

有明町埋蔵文化財発掘調査報告書（8）

農用地総合整備事業（大隅中央区域）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

よこ ぼり
横堀遺跡



2005年3月

鹿児島県曾於郡有明町教育委員会

有明町埋蔵文化財発掘調査報告書（8）

農用地総合整備事業（大隅中央区域）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

よこ
横 ぼり
堀 **遺** **跡**

2005年3月

鹿児島県曾於郡有明町教育委員会

序 文

埋蔵文化財は、日本の歴史や文化を知ると同時に、自分達の住んでいる有明町の歴史・文化をはじめ、先人達の生活のようすをうかがう貴重な宝物であります。

本報告書は、農用地総合整備事業(大隅中央区域)の大隅グリーンロード建設に伴い、有明町教育委員会が主体となって実施した横掘遺跡の発掘調査成果をまとめたものであります。

横掘遺跡は、おもに縄文時代早期の非常に良好な遺構・遺物を発見しております。遺跡は安楽川西岸の台地上に位置することから、有明町から志布志町までの歴史を語る上で重要な資料といえます。とくに、「多角形の土製耳栓」や「漁労の可能性を示す石錘」などをはじめ、多くの土器の貴重な遺物が出土しております。

これらの出土品を研究や社会教育・学校教育の場などにおいて、手軽に活用できるよう整理保管して、地域の歴史や文化に対する愛着と保護や活用につながるようして参りたいと思います。そして、自分達の住む有明町の歴史と文化を知り、果ては郷土への誇りと愛着を持って生活して、未来へと引き継いで参りたいと思っております。

最後に、発掘調査や整理作業・報告書作成に従事していただいた多くの方々をはじめ、ご支援・ご指導をいただきました鹿児島県教育庁文化財課、鹿児島県立埋蔵文化財センターならびに関係各位の皆様に対して心より感謝申し上げます。

平成17年3月吉日

有明町教育委員会
教育長 長 重 逸 郎

報告書抄録

ふりがな		よこほり いせき						
書名		横堀 遺跡						
副書名		農用地総合整備事業（大隅中央区域）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻次								
シリーズ名		有明町埋蔵文化財発掘調査報告書						
シリーズ番号		(8)						
編集者名		中水忍、出口順一郎、堂込秀人、東徹志						
編集機関		有明町教育委員会						
所在地		〒899-7492 鹿児島県曾於郡有明町野井倉1756番地 Ⅱ 0994-74-1111						
発行年月日		2005年3月14日						
遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
横堀 遺跡	鹿児島県 曾於郡 有明町 野井倉 字横堀	46467	69	131°	31°	[確認] 1999.11.4~26	[確認] 約132㎡	農道 整備 事業
			—	84	04'	27'	[全面] 2000.6.14~10.31 [整理作業・ 報告書作成] 2001.4.1~ 2005.3.15	
種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項	
集落跡	縄文時代 縄文時代早期 (前葉~後葉)		おとし穴状遺構 1基 集石 34基 炉穴(連穴土坑) 3基 土坑 9基 柱穴 3基以上		土器(前平式、吉田式、石坂式、 下刺峰式、辻タイプ、桑ノ丸式、 押形文、壺ノ神式、平格式、微 隆帯文ほか) 土製円鏡、土製耳環 石鏃、石錐、打製石斧、剥片、 石鏃、磨石、敲石、台石、石皿		土器胎土中の 鉱物分析	



图1 調査地点

例 言

1. 本書は、農用地総合整備事業（大隅中央区域）の広域農道整備に伴って行われた、有明町野井倉に所在する横堀遺跡の発掘調査の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査・整理作業ならびに報告書作成は、緑資源公団九州支社（現、独立行政法人緑資源機構九州整備局）の依頼を受けて有明町教育委員会が実施した。
3. 発掘調査は、確認調査を平成11年11月、本調査を平成12年6月から同年10月まで実施した。整理作業ならびに報告書作成は、平成13年から平成17年3月にかけて随時行い、報告書刊行をもって完了した。
4. 発掘調査・整理作業ならびに報告書作成は、鹿児島県立埋蔵文化財センターの指導・支援のもとに有明町教育委員会が実施した。
各調査は、確認調査を中水忍・堂込秀人氏、本調査を中水・出口順一郎・堂込氏、整理作業ならびに報告書作成を出口・堂込氏・東徹志が行なった。担当者の所属や各作業の従事者などについては第I章に後述する。
5. 掲載遺物の撮影の一部を、横手浩二郎氏（鹿児島県立埋蔵文化財センター）にご協力頂いた。現像・焼付けについては、大村彌紀氏・中川ヒロミ氏にご協力頂いた。また、図版の構成や製本などについて、福永修一氏にご助言いただいた。
6. 発掘調査及び報告書作成に際して、一部の業務を以下の機関に委託して作業を実施した。
作業員の派遣 : 社団法人有明町シルバー人材センター
遺構実測作業 : 株式会社コバルト技建
自然科学分析 : バリノ・サーヴェイ株式会社
石器の実測・トレース作業 : 株式会社埋蔵文化財サポートシステム
7. 本書の作成は、中水忍、出口順一郎、堂込秀人氏、東徹志が実施しており、執筆については、中水・出口・東が分担して行っている。文責については、本文目次と文末に明記している。
8. 発掘調査・整理作業ならび報告書作成に際しては、上記以外にも、以下の方々のご指導・ご支援を賜った。記して感謝を申し上げたい。
黒川忠広、新東晃一、堂込秀人、西園勝彦、前迫亮一、宮田栄二、八木澤一郎
（鹿児島県立埋蔵文化財センター）、下大川司（根占町教育委員会）、
辻本崇夫（バリノ・サーヴェイ株式会社）、和田るみ子（鹿児島大学大学院）、東朋子
[組織別・五十音順・敬称略]
9. 本書の編集は、東徹志が行っている。
10. 調査記録・遺物の保管は、鹿児島県曾於郡有明町野井倉1756番地 有明町民体育館内および農業歴史資料館内に保管する。問合せ先は、有明町教育委員会 社会教育課まで。

※ 表紙題字は長重逸郎教育長による。

凡 例

1. 遺構実測図・土層断面図などに表記した標高は、事業実施計画図面より引用した数値で、m(メートル)をおもな単位として用いている。
2. 遺構配置図などに国土座標ラインを明示している。国土座標の基軸方向及び数値は、事業実施計画図面より引用し、旧測地系を用いている。
3. 遺構平面図には方位を記載している。方位は、調査に際してはおもに磁北を用い、報告書では磁北と座標値を用いた。磁北の場合は「MN」と表記している。
4. 各調査並びに作業については、基本的に鹿児島県教育庁文化財課及び鹿児島県立埋蔵文化財センターの指導などに準拠して行っている。
5. 遺構の法量は検出面からの数値である。
6. 図の縮尺は各図に示した。図中に見られる「」は断面位置を示している。
7. 報告書中における遺構の呼称は、通し番号を用いている。表現としては「(通し番号) - (遺構名)」と表記している。
8. 本書挿図・図版に示した遺物の図番号は、本文中の遺物番号に対応する。遺物の図番号は通し番号である。
9. 掲載図面の縮尺は、各図に縮尺を明示している。
10. 写真図版の遺物写真については、縮尺を統一していない。
11. 本書に用いた広域地図は、有明町所有の『有明町管内図』を使用している。
12. 土色名に数字が入っているものは、小山正忠・竹原秀雄編・著 2001 農林水産省農林水産技術会議事務局監修 財団法人日本色彩研究所色票監修 『新版標準土色帖23版』に準じた。記載に際しては、原則として色名・記号・土質の順で記した。
13. 層呼称における「イケダ軽石」・「アカホヤ火山灰」・「サツマ火山灰」は、調査員の肉眼観察によるものである。火山灰層の特徴と下堀遺跡・牧遺跡におけるテフラ同定分析の結果から、当遺跡にも該当すると考えられる。

目 次

序 文

報告書抄録

例 言

凡 例

第I章 調査に至る経緯と経過	(中水・出口・東)	1
第II章 遺跡の環境	(東)	5
第III章 発掘調査の方法	(東)	11
第IV章 層序	(東)	14
第V章 検出面1の遺構・遺物	(東)	16
第VI章 検出面2(縄文時代早期)の遺構・遺物	(東)	18
第VII章 分析		
第1節 分析について	(東)	151
第2節 横堀遺跡出土試料の放射性炭素年代	(パリノ・サーヴェイ株式会社)	152
第3節 横堀遺跡出土遺物の分析調査	(パリノ・サーヴェイ株式会社)	153
第4節 横堀遺跡出土縄文土器の胎土分析	(パリノ・サーヴェイ株式会社)	155
第VIII章 まとめにかえて	(東)	162

図 版

あとがき・後付け

挿 図・表・写 真 目 次

報告書抄録	図VI.06	1-集石・2-集石	26
図1 調査地点	図VI.07	3-集石・5-集石	27
第I章	図VI.08	4-集石・6-集石	28
表I.01 確認調査の組織	図VI.09	7-集石～9-集石	29
表I.02 本調査の組織	図VI.10	11-集石	30
表I.03 整理作業と報告書作成の組織	図VI.11	12-集石	31
第II章	写真VI.04	21-集石 検出状況	31
図II.01 有明町の位置	図VI.12	13-集石・18-集石	32
図II.02 有明町域と調査地点	図VI.13	19-集石～21-集石(1)	33
図II.03 周辺遺跡の分布	図VI.14	21-集石(2)	34
表II.01 周辺遺跡一覧	図VI.15	22-集石	35
第III章	図VI.16	26-集石～29-集石	36
図III.01 本調査の調査区設定	図VI.17	30-集石・31-集石・34-集石・36-集石	37
図III.02 確認調査のトレンチ配置	図VI.18	35-集石・37-集石	38
図III.03 本調査の調査区位置	図VI.19	38-集石・40-集石・43-集石	39
第IV章	図VI.20	41-集石・44-集石	40
表IV.01 基本層序	図VI.21	45-集石	41
図IV.01 調査区及び工事路線の縦断面	図VI.22	46-集石	42
図IV.02 確認調査 土層柱状図	図VI.23	10-土坑・14-土坑	43
第V章	図VI.24	15-土坑・16-土坑・33-土坑	44
図V.01 検出面1 遺構配置	図VI.25	17-土坑・39-土坑	45
図V.02 検出面1 土坑1(おとし穴状遺構)	図VI.26	42-土坑・47-土坑	46
写真V.01 土坑1 堆積状況	図VI.27	23-連穴土坑	48
第VI章	図VI.28	24-連穴土坑・25-連穴土坑	49
図VI.01 検出面2 遺構配置	図VI.29	VI・VII層 遺物分布状況	51
表VI.01 検出面2 遺構一覧	図VI.30	VI・VII層 遺物分布 拡大図(1)	52
図VI.02 遺構配置(1)	図VI.31	VI・VII層 遺物分布 拡大図(2)	53
図VI.03 遺構配置(2)	図VI.32	VI・VII層 遺物分布 拡大図(3)	54
図VI.04 遺構配置(3)	図VI.33	VI・VII層 遺物分布 拡大図(4)	55
図VI.05 遺構配置(4)	図VI.34	VI・VII層 時期別の遺物分布	56
写真VI.01 11-集石と遺物分布状況	図VI.35	土器1～3類の分布	57
表VI.02 集石の計測表	図VI.36	土器3類の分布(1)	58
写真VI.02 1-集石	図VI.37	土器3類の分布(2)	59
写真VI.03 2-集石	図VI.38	土器4類の分布(1)	60
	図VI.39	土器4類の分布(2)	61
	写真VI.05	遺物分布状況	61
	図VI.40	土器5・6類の分布	62
	図VI.41	土器7・8類の分布	63
	図VI.42	土器8類の分布	64

図VI.43	土器9類の分布(1)	65	図VI.83	土器9類(4)	107
図VI.44	土器9類の分布(2)	66	図VI.84	土器9類(5)	108
図VI.45	土器9類の分布(3)	67	図VI.85	土器9類(6)	109
図VI.46	土器10類の分布	68	図VI.86	土器9類(7)	110
図VI.47	土製品・石器の分布状況	69	図VI.87	土器9類(8)	111
図VI.48	石器の分布(1)	70	図VI.88	土器9類(9)	112
図VI.49	石器の分布(2)	71	図VI.89	土器9類(10)	113
図VI.50	石器の分布(3)	72	図VI.90	土器9類(11)	114
表VI.03	土器分類表	73	図VI.91	土器9類(12)	115
表VI.04	出土土器の割合	73	図VI.92	土器9類(13)	116
表VI.05	土器分類の時期	73	図VI.93	土器9類(14)	117
図VI.51	土器1類・2類	74	図VI.94	土器9類(15)	118
図VI.52	土器3類(1)	75	図VI.95	土器10類	119
図VI.53	土器3類(2)	76	表VI.06	土器の観察表	120~129
図VI.54	土器3類(3)	77	写真VI.06	耳栓出土状況	130
図VI.55	土器3類(4)	78	表VI.07	土製品の計測表	130
図VI.56	土器3類(5)	79	図VI.96	土製品	131
図VI.57	土器3類(6)	80	表VI.08	石材の分類一覧	132
図VI.58	土器3類(7)	81	表VI.09	剥片石器の計測表	134
図VI.59	土器3類(8)	82	表VI.10	剥片類の石材別割合(重量)	134
図VI.60	土器3類(9)	83	表VI.11	剥片類の石材別割合 (石材別重量/総重量)	134
図VI.61	土器3類(10)	84	表VI.12	剥片類の計測表	135
図VI.62	土器3類(11)	85	図VI.97	剥片石器(1)	136
図VI.63	土器3類(12)	86	図VI.98	剥片石器(2)	137
図VI.64	土器4類(1)	87	図VI.99	剥片石器(3)	138
図VI.65	土器4類(2)	88	図VI.100	剥片石器(4)	139
図VI.66	土器4類(3)	89	図VI.101	礫石器(1)	140
図VI.67	土器4類(4)	90	図VI.102	礫石器(2)	141
図VI.68	土器4類(5)	91	図VI.103	礫石器(3)	142
図VI.69	土器4類(6)	92	図VI.104	礫石器(4)	143
図VI.70	土器5類	93	図VI.105	礫石器(5)	144
図VI.71	土器6類(1)	94	図VI.106	礫石器(6)	145
図VI.72	土器6類(2)	95	図VI.107	礫石器(7)	146
図VI.73	土器7類	96	図VI.108	礫石器(8)	147
図VI.74	土器1~7類の底部(1)	96	図VI.109	礫石器(9)	148
図VI.75	土器1~7類の底部(2)	97	図VI.110	礫石器(10)	149
図VI.76	土器8類(1)	100	表VI.13	花崗岩の計測表	149
図VI.77	土器8類(2)	101	表VI.14	礫石器の計測表(1)	149
図VI.78	土器8類(3)	102	表VI.15	礫石器の計測表(2)	150
図VI.79	土器8類(4)	103			
図VI.80	土器9類(1)	104			
図VI.81	土器9類(2)	105			
図VI.82	土器9類(3)	106			

第VII章

写真VII.01	23-連穴土坑	151
----------	---------	-----

写真VII.02	分析試料	151
表VII.01	試料一覧	151
第2節	表1 放射性炭素年代測定結果	152
第3節	写真1 炭化物	154
	写真2 炭化物の出土状況	154
第4節	表1 土器胎土薄片観察結果	156
	表2 土器胎土植物珪酸体分析結果	157
	写真1 胎土薄片	160
	写真2 植物珪酸体・珪藻分析プレパ ラート内の状況写真	161

图 版 目 次

- 图版 1 调查地远景(1)
- 图版 2 调查地远景(2)
- 图版 3 空中写真
- 图版 4 遺構(1)
- 图版 5 遺構(2)
- 图版 6 遺構(3)
- 图版 7 遺構(4)
- 图版 8 遺構(5)
- 图版 9 遺構(6)
- 图版10 土器 1 ~ 3 類
- 图版11 土器 3 類(1)
- 图版12 土器 3 類(2)

- 图版13 土器 4 類
- 图版14 土器 5 · 6 類
- 图版15 土器 7 · 8 類
- 图版16 土器 8 · 9 類
- 图版17 土器 9 類(1)
- 图版18 土器 9 類(2)
- 图版19 土器 9 · 10 類
- 图版20 土製品
- 图版21 剥片石器
- 图版22 剥片石器·礫石器
- 图版23 石錘·石製品

第I章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

緑資源公園九州支社（現、独立行政法人緑資源機構九州整備局）は鹿屋市、肝属郡申良町、曾於郡志布志町、有明町、大崎町の所在する大隅半島中央部において、地元市町の申請により、農業振興のための農用地総合整備事業を計画することとなった。同事業は生産基盤整備と流通施設整備が主な内容であり、とくに後者は前述の関保市町を横断する新規の広域農道を整備するものであった。そのため緑資源公園九州支社は、計画の実施に伴い事業区内において、埋蔵文化財包蔵地が存在するかについて、鹿児島県教育庁文化財課に照会を依頼した。

これを受けて鹿児島県教育庁文化財課が鹿児島県立埋蔵文化財センターと有明町教育委員会に埋蔵文化財の分布調査を依頼し、両者が平成8年6月に実施したところ、有明町の事業予定範囲内に複数の遺物散布地（長田遺跡・横堀遺跡・仕明遺跡・上苑遺跡・牧遺跡）が存在することを発見した。

この成果を受けて緑資源公園九州支社・鹿児島県教育庁文化財課・有明町教育委員会社会教育課の三者は、埋蔵文化財保護と開発事業との調整を図ることを目的に協議を行った。この席上、先ず、工事着手前に埋蔵文化財包蔵地の実態把握のため各遺跡の確認調査を実施した後、遺跡の取り扱いについて協議を行うことが確認された。

その後、各遺跡において鹿児島県立埋蔵文化財センターと有明町教育委員会の手により、確認調査が実施されたところ、いずれの遺跡においても保存の必要性があると判断された。そのため遺跡保存と事業推進との調整を図ることを目的に再度協議を行ったが、事業推進にあたっては遺跡の現状保存が困難であると判断し、遺跡の範囲内において破壊・消滅する部分を中心に、記録保存のために緊急発掘調査を実施することとなった。

横堀遺跡においても、平成11年11月に確認調査を実施し、遺跡内の事業範囲において弥生時代及び縄文時代早期の遺物・遺構が確認された。そのため平成12年6月から10月末にかけて発掘調査を実施し、遺跡の記録保存を行った。その後、平成13年度から平成17年度にかけて断続的に整理作業を行い、平成18年3月に報告書として調査成果を公開して、一連の作業を完了した。

第2節 調査の経過と組織

1. 確認調査

確認調査は、中水忍を庶務・調査の担当者とし、中水・堂込秀人氏の手により調査を実施した。事務補助を風留末子が行った。

調査に際しては、作業員派遣を社団法人有明町シルバー人材センターに委託し、同団体会員が掘下げ作業等を行った。重機操縦・管理については山口邦好が行った。

調査期間は、平成11年11月4日から26日までの約13日間を費やした。調査は、調査対象面積が約3,700㎡の範囲に9つのトレンチを設けて、約140㎡を行った。

2. 本調査の経過と組織

本調査は、当初、中水忍を庶務・調査の担当者とし、中水・堂込秀人氏の手により調査が実施されていた。しかし、調査途中に中水が人事異動により企画課へと異動となったため、出口順一郎が引き継いで調査を続行した。調査補助は田之上ともみ・野口さとり・八久保 登が務め、事務補助を吉井麗子が行った。

調査に際しては、作業員派遣を社団法人有明町シルバー人材センターに委託し、同団体会員が掘下げ作業等を行った。重機操縦・管理については山口邦好が行った。一部の実測作業については株式会社コ

バルト技建に委託した。

調査期間は平成12年6月14日から10月31日までの約5ヶ月間を費やし、約3,000㎡の調査を実施した。

3. 整理作業並びに報告書作成の経過と組織

整理作業は平成13年度より断続的に行い、平成13・14年度は、出口順一朗を庶務と作業の担当者とし、堂込秀人氏の指導・支援のもと実施された。作業は遺物洗浄・注記作業・土器接合などを行い、田之上ともみ・野口さとり・八久保堂・安野美子・若松孝雄・加藤英仁が作業に従事した。また、堂込氏により石器が選別され、株式会社埋蔵文化財サポートシステムに実測・トレース作業の委託が行われた。図の監修は堂込氏が行った。事務補助は吉井麗子が行った。

平成15年度からは、東徹志が庶務・調査作業の担当者として作業を引き継ぎ、報告書刊行までを行った。作業は東の管理のもと分担して行われ、野口さとり・川ノ上真理・安野美子・若松孝雄・加藤英仁・徳留愛・山元弓枝が従事した。事務補助は吉井麗子が行った。

各作業については、遺構が野口を中心に、遺物ほか川ノ上を中心に作業を実施した。

遺構の個別図・配置図の整理を野口・安野が、遺構個別図のトレースを野口が、配置図等のトレースを安野・川ノ上が行った。

土器の作図は野口・山元・東が実測し、安野がトレースをした。拓本は川ノ上・若松が実施した。石膏復元については若松が行った。

石器は東が再度選別を行い、委託分に含まれていなかったものについて、実測・トレースを行った。礎石器は山元が実測・トレースした。剥片石器については和田るみ子氏に実測・トレースを依頼した。

遺物分布図の作成は、有限会社カムテックの埋蔵文化財業務支援ソフト「倭人傳」・「倭人傳CAD SE」を用いて行った。入力作業を山元・川ノ上が行った。

遺物写真については、一部を横手浩二郎氏に撮影いただき、現像・焼付けを福永修氏のもと大村彌紀氏・中川ヒロミ氏に行っていた。また、写真図版の構成や製本などについて、鶴田静彦氏・福永氏・西園勝彦氏・横手氏にご助言いただいた。

その他の作業については主に東・川ノ上が行い、平成16年度末の報告書刊行をもって完了した。

表1.01 確認調査の組織

調査主体	有明町教育委員会			
調査責任	〃		教 育 長	大 脇 茂 夫
調査企画	〃	社会教育課	社会教育課長	立山広幸
	〃	〃	社会教育課長補佐	濱島兼雄
	〃	〃	社会教育係長	井手佐喜雄
調査・庶務	〃	〃	主 事	中水 忍
	〃	〃	〃	出口順一朗
調 査	鹿児島県立埋蔵文化財センター	調 査 課	文化財主事	堂込秀人
作 業	【事務処理】 風留末子（有明町教育委員会 社会教育課 臨時職員） 【調査補助】 田之上ともみ（有明町教育委員会 社会教育課 臨時職員） 【重機操縦】 山口邦好（宮内機械株式会社） 【発掘作業】 市来原勝男、富迫利満、中本雅昭、前田重良、岡本初子、小平光子、鈴木絹枝、 瀬口イク、瀬口エミ、谷川静枝、谷口久子、中野京子、中野ノリ、橋口トシ、平元トミエ、 山平アヤ子、吉岡ミチ、濱田信雄、山平一美、山添早苗、田迫チツ （社団法人有明町シルバー人材センター）			

表1.02 本調査の組織

調査主体	有明町教育委員会			
調査責任	〃		教 育 長	大 迫 亨
調査企画	〃	社会教育課	社会教育課長	立山広幸
	〃	〃	社会教育課長補佐	濱島兼雄
	〃	〃	社会教育係長	鬼塚 仁
調査・庶務	〃	〃	主 事	中水 忍
	〃	〃	〃	出口順一朗
調 査	鹿児島県立埋蔵文化財センター	調 査 課	文化財主事	堂込秀人
	〃	〃	〃	八木澤一郎
	〃	〃	文化財研究員	横手治二郎
作 業	【事務処理】 吉井麗子（有明町教育委員会 社会教育課 臨時職員） 【調査補助】 田之上ともみ・野口さとり・八久保堂（有明町教育委員会 社会教育課 臨時職員） 【重機操縦】 山口邦好（宮内機械株式会社） 【発掘作業】 稲付辰男、川野雄幸、口山英郎、富迫利満、中島正美、長竹健次、濱田信雄、 本室富士雄、若宮庸成、伊田カズ、仮谷静子、黒山フミ、小平光子、鈴木絹枝、 瀬トミエ、田迫チツ、谷川静枝、谷口久子、谷口チエ、谷口モギ、平元トミエ、森山敬子、 持永ハツ子、山添早苗、稲田光昭、川崎司、藤々崎満男、立迫利治、立本勉、立山利行、中本雅昭、 山平一美、植山貞男、平井静男、山口行則、阿久根久子、宇都ミキ、大池萬里子、大保ユキエ、 垣内セツ、重井キョク、瀬口イク、苑田ナル、園山キョク、立山キクエ、立平涼子、富山サチ、 中野京子、中野ノリ、鍋サチ子、野口サチ、橋口トシ、原浦八重子、福留サチ、水口ミチ子、 山平アヤ子、山元フクミ、木佐薫、坂中ハツエ、池ノ上エミ、永野タミ、土橋美直、財部節子、 立木トシ、前田重良、牧本ヒサ子、井ヶ倉トミヨ、高原ミユキ、有野昭海 （社団法人有明町シルバー人材センター）			

表1.03 整理作業と報告書作成の組織

【平成13・14年度】

調査主体	有明町教育委員会			
調査責任	〃		教 育 長	大迫 亨
調査企画	〃	社会教育課	社会教育課長	立山広幸
	〃	〃	社会教育課長補佐	畑山昭俊
	〃	〃	社会教育係長	鬼塚 仁
調査・庶務	〃	〃	主 事	出口順一朗
調 査	鹿児島県立埋蔵文化財センター	調 査 課	文化財主事	堂込 秀人
作 業	【事務処理】吉井麗子（有明町教育委員会 社会教育課 臨時職員） 【調査補助】野口さとり・安野美子・若松孝雄・加藤英仁（有明町教育委員会 社会教育課 臨時職員）			

【平成15年度】

調査主体	有明町教育委員会			
調査責任	〃		教 育 長	大迫 亨
				長重 逸郎（平成15年10月16日引）
調査企画	〃	社会教育課	社会教育課長	立山広幸
	〃	〃	社会教育課長補佐	畑山昭俊
	〃	〃	社会教育係長	森重 晃一（平成15年10月1日引）
調査・庶務	〃	〃	主 事	岩元 秀光
作 業	【事務処理】吉井麗子（有明町教育委員会 社会教育課 臨時職員） 【調査補助】野口さとり・安野美子・若松孝雄・川ノ上真理・山元弓枝 （有明町教育委員会 社会教育課 臨時職員）			

【平成16年度】

調査主体	有明町教育委員会			
調査責任	〃		教 育 長	長重 逸郎
調査企画	〃	社会教育課	社会教育課長	徳満 裕幸・中崎 秀博※1
	〃	〃	社会教育課長補佐	森重 晃一
	〃	〃	社会教育係長	岩元 秀光
調査・庶務	〃	〃	主 事	東 徹志
調査指導・支援	鹿児島県立埋蔵文化財センター	調 査 課	文化財研究員	横手浩二郎
調査指導	鹿児島県教育庁	文化財課	文化財主事	堂込 秀人
〃	鹿児島県立埋蔵文化財センター	調 査 課	調 査 課 長	新東 晃一
〃	〃	〃	文 化 財 主 事	宮田 栄二
〃	〃	〃	〃	前道 亮一
〃	〃	〃	〃	和田のみ子
作 業	【事務処理】吉井麗子（有明町教育委員会 社会教育課 臨時職員） 【調査補助】川ノ上真理・安野美子・若松孝雄・徳留愛・山元弓枝 （有明町教育委員会 社会教育課 臨時職員）			

※1 平成17年1月1日より

第II章 遺跡の環境

鹿児島県

日本列島の九州島南端にあり、三方を海に囲まれ、中国大陸・朝鮮半島や沖縄を經由して台湾・東南アジア諸島に近接している。県域は、総面積9,187km²を計り、薩摩・大隅の二つの半島と多数の離島に分かれ、海岸総延長が2,643kmと長い海岸線になる。その範囲は広く、南北が北緯27度1分から32度18分まで約590km、東西が東経128度24分から131度12分まで約272kmに広がる。離島は、総面積2,488km²を計り、幅100m以上のものが145島、有人島が27島を数える。

大地の多くは火山灰堆積物に覆われる。とくに約半分の地域は、火砕流堆積物である「シラス」が厚く堆積する「シラス台地」と呼ばれる台地を形成される。このシラスは流水作用に弱いので、堆積面に起伏や台地縁部に大小の谷が多く見られる。地形的にはシラス台地に加えて山地も多いため起伏が多く、海岸線も変化に飛んでいる。大きな河川は少なく、小規模な河川が多いため平野部が発達していない。また、活火山・休火山が多くあり、噴火・降灰などによる災害が数多く記録されている。

気候は、亜熱帯から温帯まで見られ、温暖多湿な海洋モンスーン型である。梅雨時の雨量は多く、夏から秋にかけては台風も多い。そのため自然災害が多発するが、気候の影響で植生の回復が早く、冬でも作物の収穫ができる。また、沿岸は暖流の黒潮が東シナ海を北上してトカラ列島付近で太平洋へと流れ込み、高知沖から沿岸に沿って北上を続ける。一方で黒潮支流が県西部沿岸沖を北上して日本海に流れ込み、対馬海流と呼ばれる。二つの海流は東日本沿岸まで北上している。

冬になれば季節風の影響で黄砂と思われる降砂が見られる。季節風は、夏が南西諸島から県本土へ、冬はこの反対へと季節ごとに風向きを変える。今でも船の往来に大きな影響を与えている。

有明町

有明町は、九州島南端の大隅半島の南東部にあり、太平洋に面した志布志湾岸に位置する。行政区画では鹿児島県曾於郡に属し、四方を志布志町・大隅町・松山町・輝北町・大崎町と接している。2006年からは志布志町・松山町と合併して志布志市となる。総面積は約98.05km²、人口は約12,000人、第1次産業を基盤とし、農業が盛んである。土地の多くは農地が占めるが、畑地が多く、ほとんどが標高約100m以上のシラス台地上に広がる。

町内は伊崎田・有明・通山・蓬原・野神・原田・山重の7つの地区に分けられる。ほぼ昔の旧村単位であり、各地区は地理・気候などが異なり、それぞれの文化・歴史を育んだ地域でもある。

また、町の前身は「西志布志村」であり、旧「志布志村」から「東志布志村（現・志布志町）」・「月野村（現、大隅町）」と共に分村し、その後、「有明町」に改めている。そのため志布志との関係は深く、その一部に含まれることも多い。なお、町名は現在の志布志湾岸が有明浦と呼ばれていたことにちなんでいる。

町域は、ほとんどが標高100～300mのシラス台地であり、有明・蓬原・野神・原田の台地上には広大な堆積面が広がる。その台地から北部の霧岳（408m）、中央部の岳野山（274m）などの丘陵が突き出しており、これらの丘陵ではシラス堆積以前の地層が露頭として確認できる。

町内には、中央部に菱田川、東部に安楽川支流の本村川・高下谷川、西部に田原川が流れており、それぞれシラス台地を侵食して、狭い平地を作り出している。菱田川流域の中流では、浸食作用により深く切り立った谷底に「黒霧の石畳」と呼ばれるシラス基底部と思われる岩盤が露出する。一方、下流域では河岸段丘が発達しており、広い範囲にわたって河岸段丘面が両岸に広がっている。他の河川では深く狭い谷底に追田と呼ばれる水田が広がる。

町域は、一部が南東側で志布志湾に面しており、志布志湾岸では砂丘が発達している。当町域の砂浜

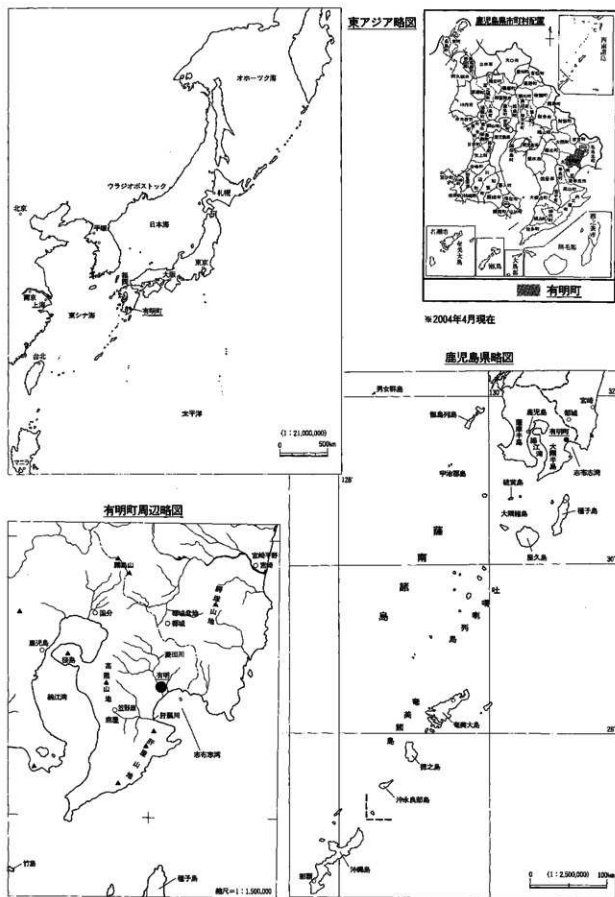


図 I.01 有明町の位置



※一部、飛地が抜ける

1:75,000



図Ⅱ.02 有明町域と調査地点

は押切海岸と呼ばれ、本来は海岸線まで100m近い砂浜が広がっていたが、近年の湾岸開発により侵食されて往時の姿は止めていない。以前は、押切海岸の後背地に潟湖が発達して、菱田川と安楽川は潟湖によってつながっていたと言われるが今では面影がない。志布志湾は日向灘に面して、日南海岸の南に位置することから、日向（宮崎）方面とのつながりは深い。古来より有明一帯は日向国に属し、近代においても宮崎県に含まれていたことから、海岸沿いの往来が頻繁であったことが考えられる。

有明の歴史

遺跡を中心に町の歴史をみると、町内の遺跡総数は205を数え、近年発掘調査が増えている。時期別には、後期旧石器は菱田側流域の屋部当遺跡・仕明遺跡でわずかであるが出土している。

縄文時代草創期は確認されていない。早期は調査数が多く、とくに菱田側右岸の河岸段丘上にある上苑遺跡では、円形の柱列が検出されており、施設の可能性が考えられる。田原川流域の浜場遺跡の石鏃製作跡、下堀遺跡の礫石・連穴土坑・柱列群などがあり、下堀遺跡では連穴土坑の燃焼部下より「シミ状痕跡」など特徴的な遺構も確認されている。前期は仕明遺跡、中期は本村川流域の本村遺跡などで少量の遺物が出土している。晩期は菱田側上流の黒葛遺跡・牧原遺跡などで調査が行われている。前述の下堀遺跡では、刻目突帯文の時期に牧遺跡の柱列に類似したものが確認されている。

弥生時代は、調査例は前述の本村遺跡で花弁形住居が1棟確認されている。また、野井倉の土橋集落では銅矛が出土しており、現在、東京国立博物館に収蔵されている。

古墳時代は、田原川流域の原田古墳、菱田側流域の蓬原の地下式横穴が知られる。調査でも仕明遺跡・上苑遺跡などで集落跡が確認されている。

古代は、黒葛遺跡で遺物が出土し、仕明遺跡で竪穴住居や製塩土器などが確認されている。

中世は、蓬原の蓬原城や金丸城・片平城など城跡もあり、その周辺では輸入陶磁器が出土・採取される。

近世は、各調査で割平層として確認されることが多く、仕明遺跡では廃棄土坑などが確認されている。近代では、シラス台地上を水田化するために開田事業が進められ、蓬原開田・野井倉開田などが整備されている。今では台地上に、平野の様な田園風景が広がる。

横掘遺跡

安楽川流域に位置する。安楽川の左岸にあり、シラス台地堆積面の縁辺部に立地する。調査地点は縁辺部の中でも、舌状にやや突き出ている。安楽川下流域は、河岸段丘は右岸に発達しており、横掘遺跡の崖下は水田の広がる平地になる。遺跡の北西から崖下にかけては、現在、道路の走る沢地形の中に雨水路が設けられており、昔から降水時の排水路として沢が機能していたと思われる。また、志布志湾岸へと流れ込む河口にも近く、直線距離で5kmの距離である。

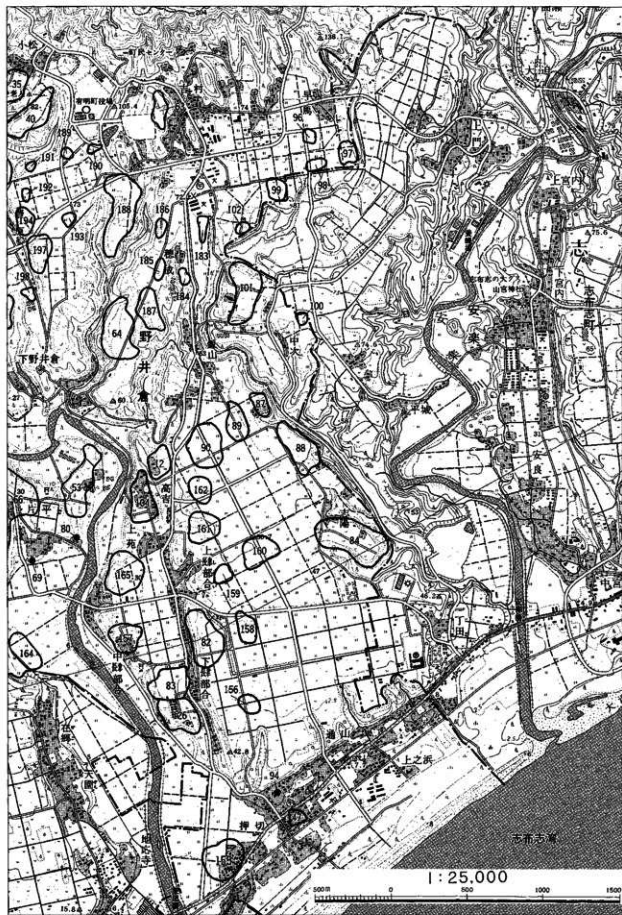


図 1.03 周辺遺跡の分布

表Ⅱ.01 周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	フリガナ	所在地	立地	時代	遺物等	備考
60-12	高古	タカコシ	野井倉字高古、栗田、下段	古墳	縄文(中・晩)、弥生	石皿	
35	平塚	ヒラオ	野井倉字平塚、赤下、小段	古墳	縄文(中)、中世	打製石斧、青銅	平成11年度農林分佈調査
40	平塚	ヒラオ	野井倉字平塚	古墳	縄文		平成11年度農林分佈調査
47	松原	マツバラ	野井倉字松原、上ノ段	古墳	弥生(中・後)	土器	
53	下永塚	シモユヅカ	藤原字下永塚、西ノ衝	古墳	古墳	小刀、土師器	平成11年度農林分佈調査
60	古村	コムラ	野井倉字古村、野吉	古墳	弥生	石鏃、打製石斧	
64	上原A	ウエハラ	野井倉字上原、西原	古墳	弥生	土師	
66	佐間	シマケ	藤原字佐間、宮ノ原、大塚、牧	古墳	旧・縄原、弥生、古墳	成川式、成穴 佐居、瓦、漆器	平成8年度分佈調査 12・13年度全面調査
60	片平古墳	カタヒラコフン	藤原字佐間	古墳	古墳	円筒	
80	片平古墳	カタヒラコフン	藤原字下永塚、佐間	古墳	古墳		
82	大代	オホダイ	野井倉字大代、藤道、大森	古墳	縄文、古代	土師器	平成11年度農林分佈調査
83	手吉	テラ	野井倉字手吉	古墳	古代、中世	土師器、青銅	平成11年度農林分佈調査
85	平古	ヒラコ	野井倉字平古	古墳	古代	土師器	平成11年度農林分佈調査
87	東	ヒガシ	野井倉字東、藤原	古墳	弥生	土師	平成11年度農林分佈調査
88	藤原	フジワラ	野井倉字藤原	古墳	弥生(中・後)、古代		平成12年度農林分佈調査
89	下段C	シモダン	野井倉字下段、東	古墳	縄文・弥生	土師	平成11年度農林分佈調査
90	下段B	シモダン	野井倉字下段、東	古墳	弥生		平成11年度農林分佈調査
94	藤原(心臓跡)	フジワラ(シンゾウ)	野井倉字藤原	古墳	縄文(中・後)、古代	一丁一古斧	(見)昭44.4.1史
96	早鳥A	ハヤマ	野井倉字早鳥	古墳	弥生		平成11年度農林分佈調査
97	早鳥B	ハヤマ	野井倉字早鳥	古墳	弥生	土師	平成11年度農林分佈調査
98	早鳥C	ハヤマ	野井倉字早鳥	古墳	弥生		平成11年度農林分佈調査
99	古原	コハラ	野井倉字古原	古墳	弥生	土師	平成11年度農林分佈調査
100	中次B	ナカジ	野井倉字中次	古墳	弥生		平成11年度農林分佈調査
101	中次A	ナカジ	野井倉字中次	古墳	弥生		平成11年度農林分佈調査
102	藤原	フジワラ	野井倉字藤原	古墳	弥生	土師器	平成11年度農林分佈調査
104	上原	ウエハラ	野井倉字上原、高古	古墳	縄文(中)、古墳	縄原・成川式、 成穴(土)はか	平成8年度農林分佈調査 平成13年度全面調査
126	平古	ヒラコ	野井倉字平古	古墳	古墳		平成8年度農林分佈調査
135	堀入	ホコイリ	野井倉字堀入、野山、山部	古墳	弥生	土師器	平成11年度農林分佈調査
156	坂上	サカウエ	野井倉字坂上、大代	古墳	古代	土師器	平成11年度農林分佈調査
157	木塚	キヅカ	野井倉字木塚、山崎	古墳	縄文・古代		
158	藤道	フジミチ	野井倉字藤道、上原上	古墳	弥生	土師	平成11年度農林分佈調査
159	上原上	ウエハラウエ	野井倉字上原上	古墳	古代	土師器	平成11年度農林分佈調査
160	藤原	フジワラ	野井倉字藤原、上原上	古墳	弥生	土師器	平成11年度農林分佈調査
161	上原B	ウエハラ	野井倉字上原、下段、上原下	古墳	古代	土師器	平成11年度農林分佈調査
162	下段A	シモダン	野井倉字下段	古墳	古代	土師器	平成11年度農林分佈調査
164	相模下	サマシタ	野井倉字相模下	古墳	古代	土師器	平成11年度農林分佈調査
165	上原A	ウエハラ	野井倉字上原	古墳	弥生、古代	山ノ口式、土師器	平成11年度農林分佈調査
183	中塚	ナカツカ	野井倉字中塚	古墳	弥生、内塚	土師器	平成11年度農林分佈調査
184	東原	ヒガシハラ	野井倉字東原	古墳	弥生、古墳	土師器	平成11年度農林分佈調査
185	西原A	ニシハラ	野井倉字西原	古墳	弥生		平成11年度農林分佈調査
186	西原B	ニシハラ	野井倉字西原	古墳	弥生、古墳	土師器	平成11年度農林分佈調査
187	上原	ウエハラ	野井倉字上原、東原、西原	古墳	弥生、古墳	土師器	平成11年度農林分佈調査
188	中塚	ナカツカ	野井倉字中塚、西原道	古墳	弥生		平成11年度農林分佈調査
189	西原道A	ニシハラミチ	野井倉字西原道	古墳	古代	土師器	平成11年度農林分佈調査
190	西原道B	ニシハラミチ	野井倉字西原道	古墳	縄文・弥生	土師	平成11年度農林分佈調査
191	上ノ段A	ウエノダン	野井倉字上ノ段	古墳	弥生	土師	平成11年度農林分佈調査
192	上ノ段B	ウエノダン	野井倉字上ノ段	古墳	弥生		平成11年度農林分佈調査
193	上ノ段C	ウエノダン	野井倉字上ノ段	古墳	古代	土師器	平成11年度農林分佈調査
194	上ノ段D	ウエノダン	野井倉字上ノ段	古墳	古代		平成11年度農林分佈調査
195	上ノ段E	ウエノダン	野井倉字上ノ段	古墳	弥生		平成11年度農林分佈調査
197	藤村	フジムラ	野井倉字藤村、下段	古墳	弥生		平成11年度農林分佈調査
198	下段	シモダン	野井倉字下段	古墳	弥生	土師	平成11年度農林分佈調査

第III章 発掘調査の方法

第1節 確認調査の方法

確認調査は、分布調査で所在の判明した遺跡の範囲と性格を把握することを目的に、工事予定範囲内を中心に9つのトレンチを設けて発掘調査を実施した。トレンチ規模は幅2m×長さ3～4mを基本としたが、遺構の広がりなどが考えられたトレンチについてはトレンチを拡張している。トレンチ位置については図III.02を参照されたい。

掘り下げについては、表土（I層）を調査員立会いのもと重機で除去した。II層以下については、全てを人力で掘り下げている。遺構検出は、遺構の存在が考えられた時点で随時行った。基本的には基本層序のIV（イケダ軽石）層上面とVIII層上面の2面で実施している。

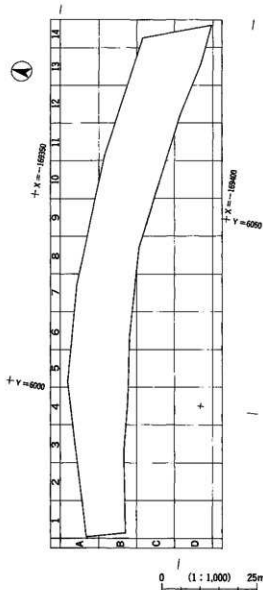


図 III.01 本調査の調査区設定

第2節 本調査の方法

本調査は、工事予定範囲内における埋蔵文化財の記録保存を目的に発掘調査を実施した。調査に際しては、事業者側の要請から、法面工事にかかわる範囲については調査を控えている。そのため調査区設定は工事予定範囲から約1m内側に設定されている。

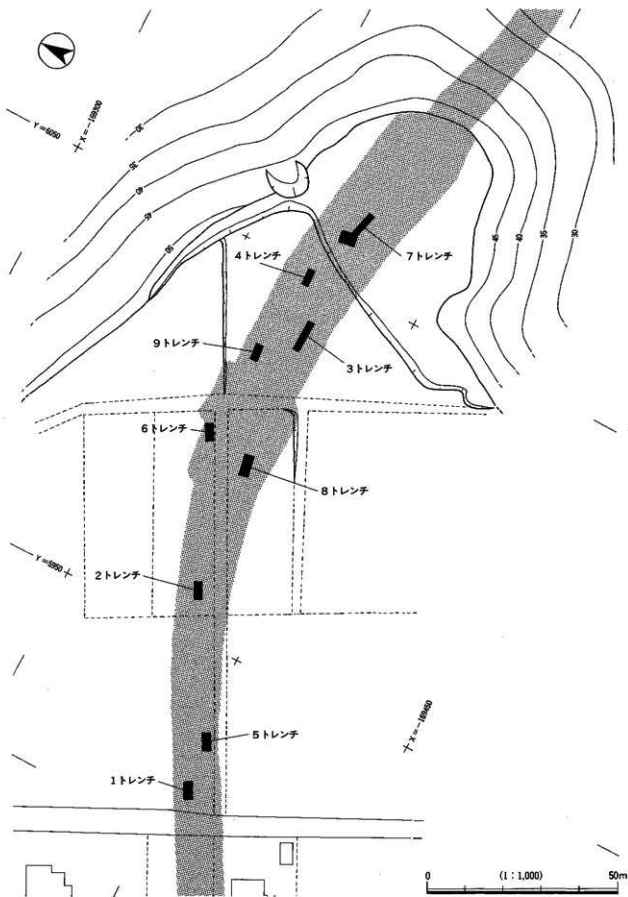
グリッドについては、任意の基点より10m×10m範囲で設定している。設定状況の詳細については図III.01を参照されたい。

掘り下げは、表土（I層）を調査員立会いのもと重機で除去し、II～IV層とVI～VIII層を全て人力で掘り下げている。V（アカホヤ火山灰）層については、無遺物層と考え、調査員立会いのもと重機にて除去している。

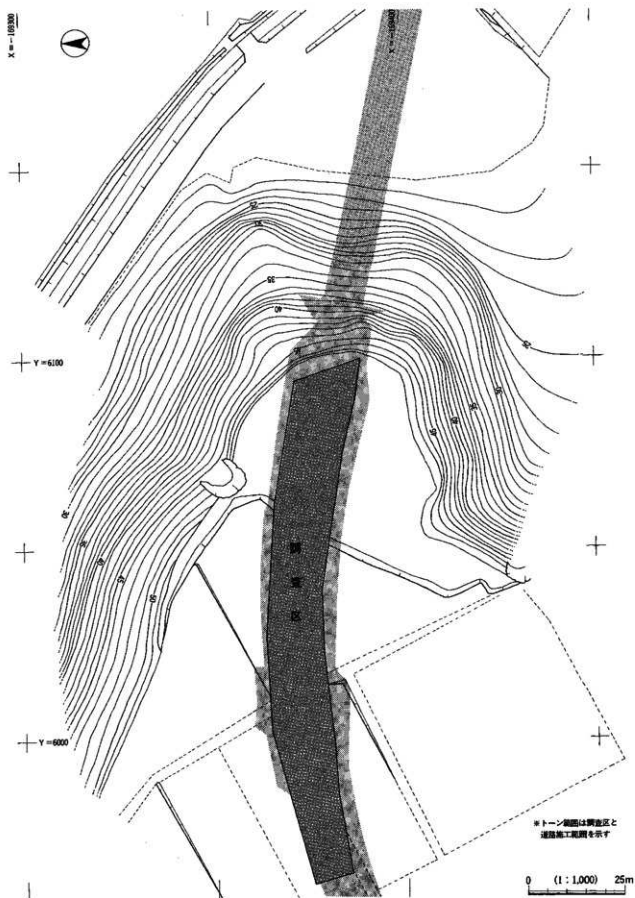
基準点・水準点については、工事図面より数値を引用している¹。

調査作業は西側から着手し、グリッドA1～B5の範囲をVIII層上面まで調査を行い²、その後グリッドD14まで調査を実施した。

- 1 基準点は旧測地系である。
- 2 この時、IX（サツマ火山灰）層上面まで掘り下げて、VIII層中の遺物包含状況を確認している。



図Ⅱ.02 確認調査のトレンチ配置



図Ⅲ.03 本調査の調査区位置

第IV章 層序

第1節 基本層序

確認調査及び本調査における基本層序は一致しており、詳しくは下記の表のとおりである。

また、今回の調査で把握された遺物包含層はII層並びにVI・VII層であるが、II層については遺物量が極めて希薄である¹。

なお、遺構検出面はIV（イケダ降下軽石）層～V（アカホヤ火山灰）層上面及びVIII層上面の2面である。

表IV.01 基本層序

層番号	土色・質	特徴ほか
I a 層	黒褐色土層	表土、現在の耕作土にあたる。
I b 層	灰褐色土層	耕地整備以前の旧耕作土にあたる。
II層	黒褐色土層	真黒の腐植土で、非常に軟らかい軟質層である。弥生時代から古墳時代に相当する遺物包含層にあたる。部分的には、さらに2層に分層できる可能性がある。
III層	黒褐色土層	火山噴出物と考えられる黄白色バミス粒を含む。
IV層	暗茶褐色土層	池田降下軽石を含む。やや硬質層である。
V層	明黄褐色土層	鮮やかな橙色に発色する土層である。鬼界カルデラ噴出のアカホヤ火山灰層と考えられる。
VI層	黒褐色土層	バミスを多く含む硬質土層である。縄文時代早期の遺物包含層にあたる。
VII層	暗茶褐色土層	径2mm大のバミスをわずかに含む硬質層である。縄文時代早期の遺物包含層にあたる。
VIII層	暗黄褐色土層	やや大き目のバミスを多く含む硬質層である。
IX層	黄褐色土層	全体的にまだら状に平面検出される土層である。サツマ降下火山灰層と考えられる。
X層	明茶褐色土層	粘質の強い軟質層である。
X I 層	暗茶褐色土層	粘質の強い軟質層である。
X II 層	暗黄褐色土層	2次シラスと考えられる。
X III 層	黄褐色土層	シラス層の上位と考えられる。

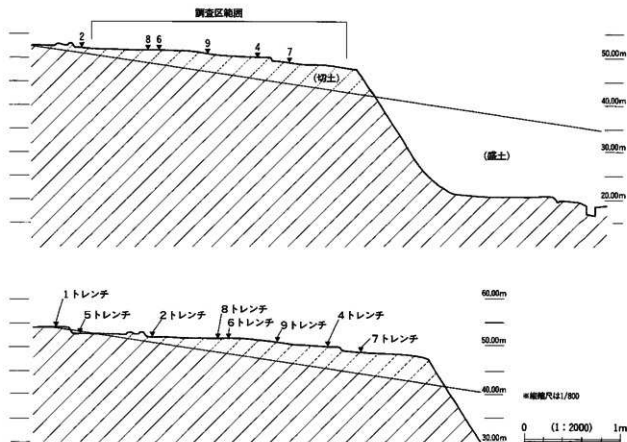
第2節 層位と旧地形

調査地の現況は、既に耕地整備されているため平坦な畑地が広がる²が、全体的には東側に向かって緩やかな傾斜が続いている。しかし、確認調査における土層の記録（図IV.02）によれば、本来の旧地形は起伏のある地形であったことが考えられる。

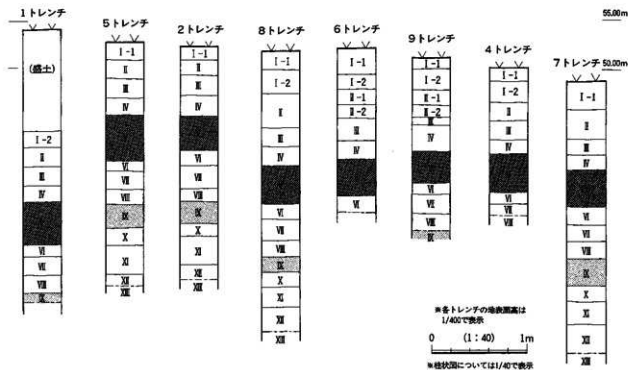
なお、調査地周辺の地理的環境については、II章に前述している。

1 記録によれば弥生土器片が出土したとあるが、保管してあった遺物をつぶさに確認したところ、II層ないしVI・VII層以外の層出上の遺物は確認されなかった。

2 確認調査7トレンチ周辺から東側は、現況で山林が広がっていた。

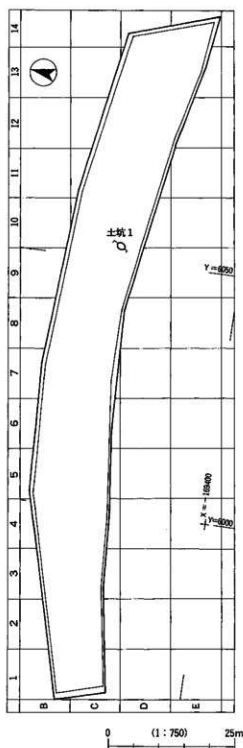


図IV.01 調査区及び工事路線の縦断面図



図IV.02 確認調査 土層柱状図

第V章 検出面1の遺構・遺物



図V.01 検出面1 遺構配置

はじめに

検出面1はV（アカホヤ火山灰）層上面を検出面として、遺構を精査している。検出面1に対応する遺物包含層はII層と考えられるが、遺物の出土量は極めて少量であった。なお、ここでは他の層中において検出された遺構についても記述する。

第1節 II層上面

確認調査の3トレンチのII層上面において、2条の溝が検出された。遺構内及び周辺にも遺物がなく、時期は不明である。しかし、I b層が旧耕土¹と考えられることから、近代のものと考えられる。同様の遺構は、他の地点では確認されていない。

第2節 V層上面

V層上面では、確認調査3トレンチより柱穴2基、本調査のグリッドB10より土坑1基が検出された。遺構密度が極めて希薄であり、遺物も同様で出土遺物はほとんど確認されていない。

柱穴

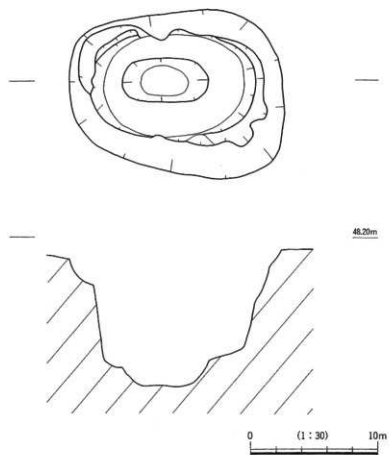
2基の柱穴は、遺物の出土などは確認されていないが、調査者は時期を弥生時代と推定している。

土坑1

土坑1は、遺構内及び周辺からも遺物の出土がなく、時期が不明である。平面形態は楕円形、断面形態は逆台形を呈するが、壁面は垂直に近い。規模は長さ160cm×幅135cm×深さ110cmを測る。また、底面には楕円形の凹みが見られ、柱穴の可能性が考えられる。凹みの規模は長さ68cm×幅33cm×深さ19cmを測る。

遺構の形態からは、おとし穴状遺構に分類されると考える。

1 調査担当者による事業報告の記載に従う。本書では耕地整備以前の近代の耕土層を指すものとする。



図V.02 検出面1 土坑1（おとし穴状遺構）



写真V.01 土坑1 推積状況

第VI章 検出面2（縄文時代早期）の遺構・遺物

はじめに

検出面2は、基本層序のⅧ層上面を遺構検出面とした。遺構の対応する遺物包含層はⅥ・Ⅶ層にあたる。この2層中に、当時の生活面は存在したものと考えられる。なお、調査区西端のグリッドA1からB4にサブレンチを設け、IX（サツマ火山灰）層上面まで掘り下げて遺物の有無を確認したが、Ⅷ層中から遺物は確認されなかった。

第1節 遺構

おもに集石34基、土坑9基、連穴土坑3基を検出している。また、検出したもの以外にも遺構が存在していた可能性が考えられる。詳しくは後述する。遺構の名称については、調査時の呼称に混乱が見られたため、報告書作成に際して統一した。報告書では、調査区西側から遺構すべてに通し番号を付し、番号の後ろに遺構の種別を記述している（例「番号－遺構名」）。

1. 遺構配置

遺構はグリッドB9から東の台地縁辺に集中している。B9から西側は遺構が散在する。また、礫の分布状況は調査区全体に分布が見られたが、東側に行くほど分布密度が高くなっている²。詳しくは図VI.01～05に示している。

2. 集石

集石は34基を検出している。分布はグリッドB11から東側に多く集まる。以下、集石別に述べ、法量などは表VI.02に示す。

1-集石は、赤色化して被熱したと考えられる礫が存在する。

3-集石は、熱破碎したと考えられる礫が多く、中でも砂岩の破碎礫が多い。掘り込みはもたないが、埋土には黒色の強い範囲が存在する。

4-集石は、砂岩円礫の被熱破碎したと考えられる礫が多い。礫下には、浅い掘り込みが存在した可能性があり、埋土には炭混じりの黒色土が堆積する。

5-集石は、熱破碎したと考えられる礫が多く、10cm大前後の砂岩円礫の集中する範囲がある。この砂岩円礫は被熱痕跡が見られない。このことから礫の仮置場の可能性が考えられる。

7-集石は、赤色化して被熱したと考えられる礫が存在する。

8-集石は、掘り込みがあり、埋土に黒褐色土が堆積する。

11-集石は、破碎した礫が広範囲に広く分布する。

13-集石は、底面上に配石（731）が見られる。

18-集石は、被熱破碎したと考えられる礫で構成される。礫は非常に小さい。

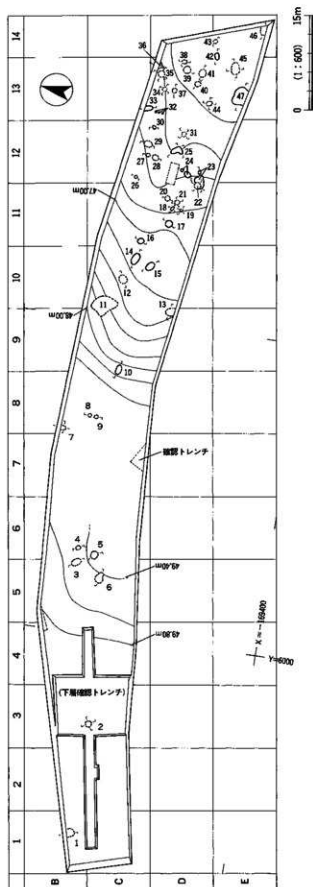
19-集石は、ほぼすべての礫が赤色化して破碎している。被熱したと考えられる。

20-集石は、掘り込みがあり、炭化物を含んだ黒色土が堆積する。

21-集石は、被熱したと考えられる礫が存在する。底面上には、大きさが28cm×23cm×16cmの配石が見られる。掘り込みには黒色土が堆積する。また、土器1点が出土している。土器1は、外面に綾杉条痕文を施し、内面は丁寧なナデで整える。土器3類の石取式に比定される。

27-集石は土器1点が出土している。土器2は外面に山形押形文を施す。土器8類の押型文に比定される。

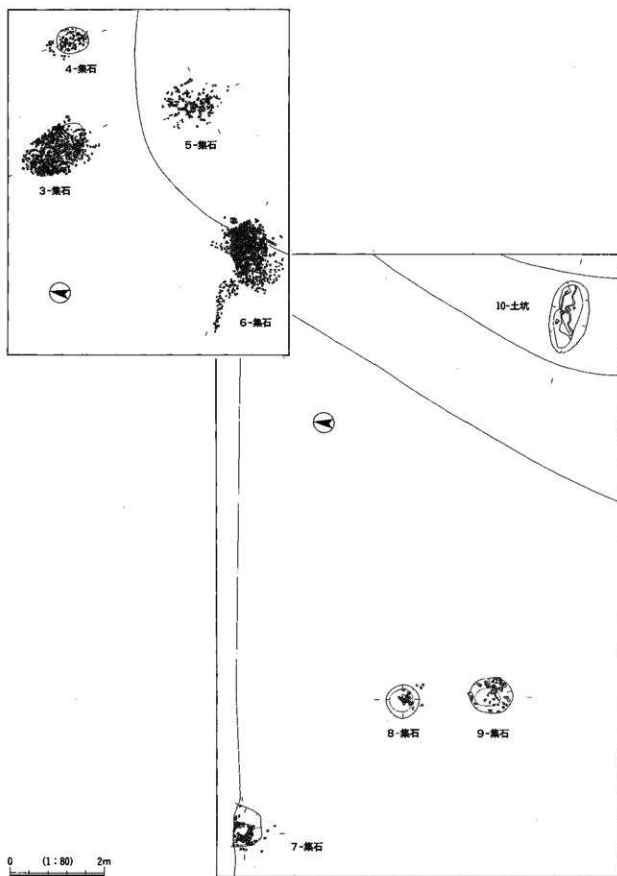
28-集石は土器1点が出土している。土器3は外面に短沈線文を施し、内面は上へのケズリで整える。



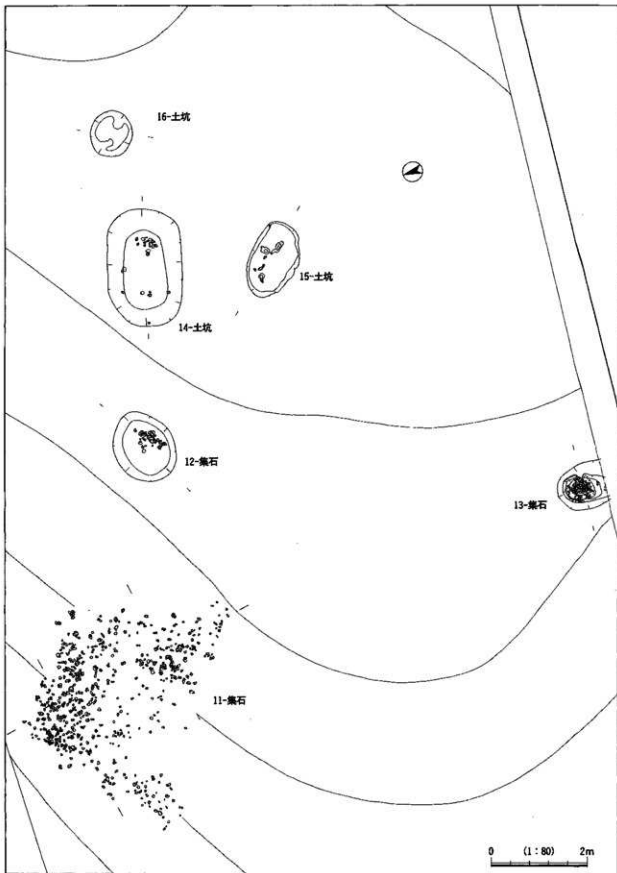
図VI.01 検出面2 遺構配置

表VI.01 検出面2 遺構一覧

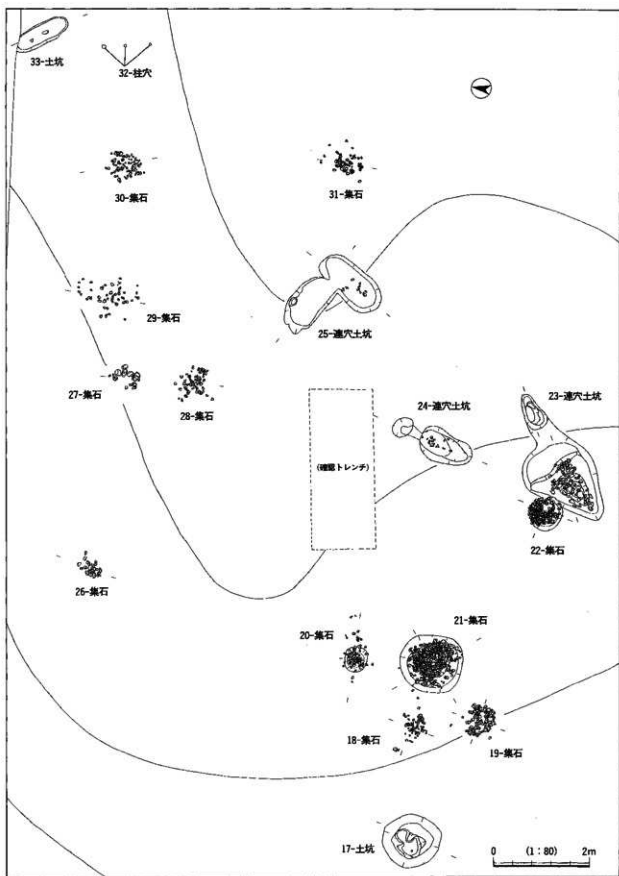
報告番号	調査時呼称	備考
1-集石	【集石C】	
2-集石	【集石2】	
3-集石	【集石I(集石1号)】	3-6-集石は同一面で検出
4-集石	【集石H(集石2号)】	#
5-集石	【集石J(集石3号)】	#
6-集石	【集石K(集石4号)】	#
7-集石	【集石P(集石b)】	
8-集石	【集石R】	9-集石と同一面で検出
9-集石	【集石Q】	8-集石と同一面で検出
10-土坑	【土坑No.9】	
11-集石	【集石I】	
12-集石	【集石土坑⑦号】	
13-集石	【集石土坑⑧号】	
14-土坑	【集石土坑⑩号】	
15-土坑	【土坑A】	
16-土坑	【土坑B】	
17-土坑	【土坑C】	
18-集石	【集石G】	18-21-集石と同一面で検出
19-集石	【集石F】	#
20-集石	【集石N】	#
21-集石	【集石M】	#
22-集石	【集石E】	
23-通穴土坑	【集石土坑⑤号(集石d)】	
24-通穴土坑	【通穴土坑1】	
25-通穴土坑	【集石土坑④号】	
26-集石	【集石O】	
27-集石	【集石Z】	
28-集石	【集石a】	
29-集石	【集石Y】	
30-集石	【集石D】	
31-集石	【集石A】	34・35-集石と同一面で検出
32-柱穴		記録写真で確認
33-土坑	【土坑1】	
34-集石	【集石B】	31・35-集石と同一面で検出
35-集石	【集石C】	31・34-集石と同一面で検出
36-集石	【集石V】	
37-集石	【集石W】	
38-集石	【集石U】	
39-土坑	【集石土坑③号】	
40-集石	【集石X】	
41-集石	【集石土坑②号】	
42-土坑	【土坑2】	
43-集石	【集石土坑①号】	
44-集石	【集石L(集石Y)】	
45-集石	【集石T】	
46-集石	【集石S】	
47-土坑	【野穴住居】	調査時に土坑に変更



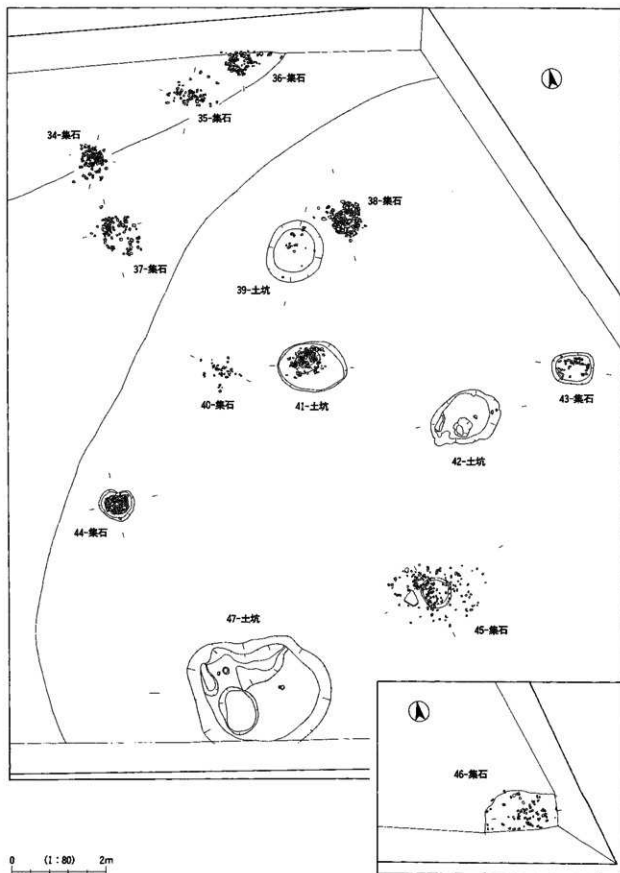
图VI.02 遺構配置(1)



図VI.03 遺構配置(2)



図VI.04 遺構配置 (3)



図VI.05 遺構配置(4)

土器6類の桑ノ丸式に比定される。

30-集石は、赤色化して被熱したと考えられる礫があり、礫と共に炭化物が出土している。

31-集石は、記録によれば土器9類の塞ノ神式が出土したと記されている。

36-集石は、赤色化して被熱したと考えられる礫が存在する。

37-集石は、検出時の礫配置が輪状で、中央部が一段低い位置より検出している。断面ではレンズ状を呈していたと思われる。

40-集石は、赤色化して被熱したと考えられる礫が存在する。

41-集石は、掘り込みがあり、規模が平面が145cm×105cm、深さが32cmを測る。掘り込みの底面には、もう一段の掘り込みがあり、規模が平面56cm×48cm、深さ14cmを測る。

43-集石は土器1点が出土している。土器4は外面に縦位の山形押形文と横のミガキを施す。土器8類の押形文に比定される。

44-集石は、赤色化して被熱したと考えられる礫が存在する。

45-集石は、赤色化して被熱したと考えられる礫が存在する。石皿730が1点と土器4点が出土している。出土土器には時期差が見られる。土器5は内外面を横のナデで整える。土器9類の塞ノ神式に比定される。土器6は外面に斜位の貝殻条痕文を施し、内面を上へのケズリで整える。土器7は外面に短沈線文を施し、内面は横のナデで整える。土器6類の桑ノ丸式に比定される。土器8は外面を横のナデ、内面を左へのケズリで整える。土器9類の塞ノ神式に比定される。

46-集石は、赤色化して被熱したと考えられる礫が存在する。掘り込みは確認されていないが、埋土にやや黒色の強い範囲が存在する。遺物は土器1点が出土している。土器9は外面に貝殻条痕文を施し、内面を左斜め上へのケズリで整える。土器3類の石坂式に比定される。



← 11-集石

写真Ⅶ.01 11-集石と遺物分布状況

表VI.02 集石の計測表

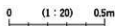
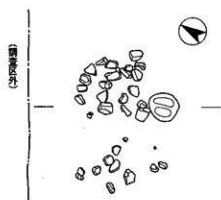
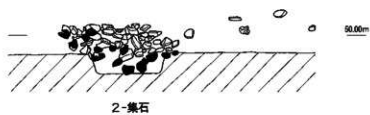
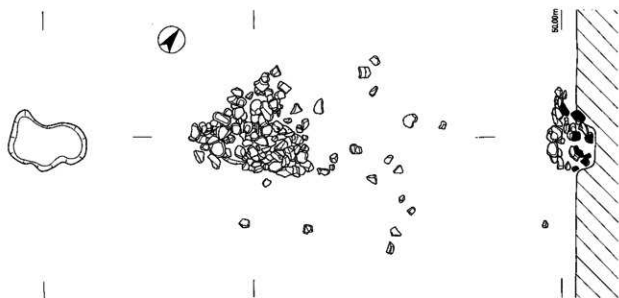
	位置	検出層位	礫の分布範囲(cm)		礫の総数	礫の密度	掘込の規模(cm) 長軸×短軸×深さ	備考
			平面	垂直				
1-集石	A1	VII層	75×55	8	37以上	疎	—	
2-集石	A3	VII層上面	120×90	24	125以上	密	42 × 25 × 10	層土はVI層土
3-集石	A5	VI層	158×100	10	471以上	やや密	83 × 60	
4-集石	A6	#層	93×55	5	95以上	疎	68 × 55 × 9	
5-集石	B6	#層	140×103	9	103以上	疎	—	
6-集石	B5	#層	255×158	20	594以上	密	85 × 30 × 14	
7-集石	A8	#層	100×75	20	75以上	疎	90 × 60 × 23	
8-集石	A8	VII層	80×70	8	23以上	疎	70 × 70 × 10	
9-集石	B8	#層	95×74	10	52以上	疎	92 × 75 × 14	層土はVI層土
11-集石	B10	#層下位	245×244	30	623以上	疎	—	
12-集石	B10	#層	70×50	48	40以上	疎	150 × 127 × 29	
13-集石	C9	VII層	80×50	38	58以上	やや密	97 × 95 × 41	
18-集石	C11	#層	150×60	14	60以上	疎	—	層土はVI層土
19-集石	C11	#層	70×70	13	83以上	やや疎	—	#
20-集石	C11	#層	110×50	11	72以上	やや密	55 × 42 × 8	
21-集石	C11	#層	110×97 115×108	17 55	71以上 290以上	非常に密	134 × 134 × 49	検出状況、層土はVI層土 礫検出状況
22-集石	C11	#層	73×70	15	104以上	密	74 × 70 × 25	
26-集石	B12	#層	53×48	17	23以上	疎	—	
27-集石	B12	#層	65×52	13	17以上	疎	—	
28-集石	C12	#層	85×78	13	59以上	疎	—	
29-集石	C12	VII層	135×90	10	54以上	疎	—	
30-集石	C12	#層	80×68	20	79以上	疎	—	層土はVI層土
31-集石	C12	#層	90×85	10	49以上	疎	—	
34-集石	C13	#層	83×68	15	78以上	やや疎	—	
35-集石	C13	#層	110×80	20	67以上	疎	—	
36-集石	C13	#層	120×53 118×98 65×60	27 10 —	82以上 80以上 85以上	やや疎 疎 密	— — —	層土はVI層土 礫検出状況1 最終検出状況
37-集石	C13	#層	105×90	20	82以上	密	55 × 50 × 15	
40-集石	C13	VII層上面	90×75	—	40以上	疎	—	
41-集石	C13	#層	80×65	33	100以上	やや疎	145 × 105 × 33	層土はVI層土
43-集石	D14	#層	65×45	11	37以上	疎	85 × 65 × 11	層土はVII層土
44-集石	C13	VII層	48×45	32	70以上	非常に密	75 × 68 × 20	層土はVI層土
45-集石	D13	#層下位	187×150	16	184以上	疎	65 × 62 × 14	
46-集石	D14	VI層	154×90	8	68以上	疎	158 × 85	



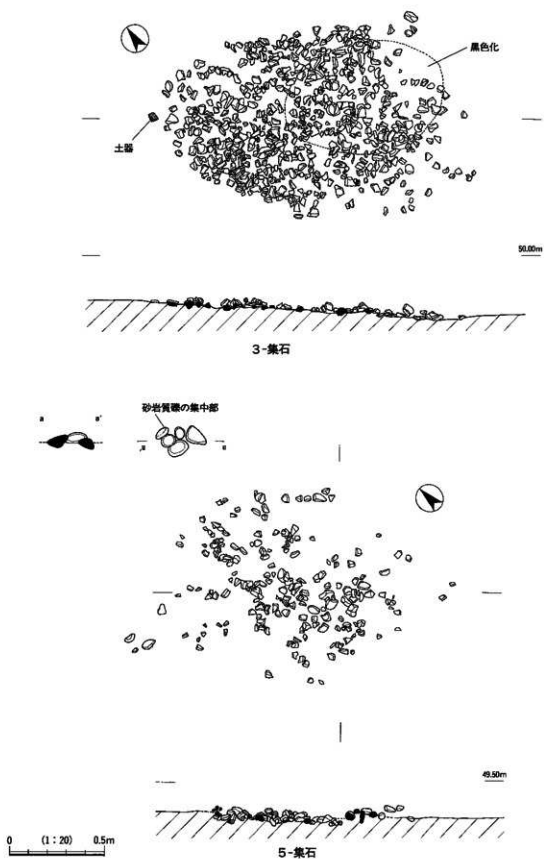
写真VI.02 1-集石



写真VI.03 2-集石



図VI.06 1-集石・2-集石



図VI.07 3-集石・5-集石

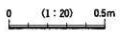
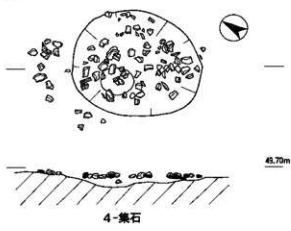
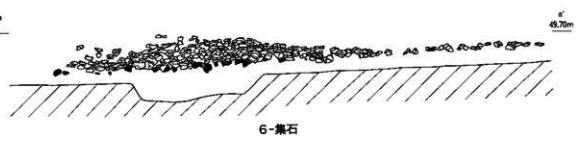
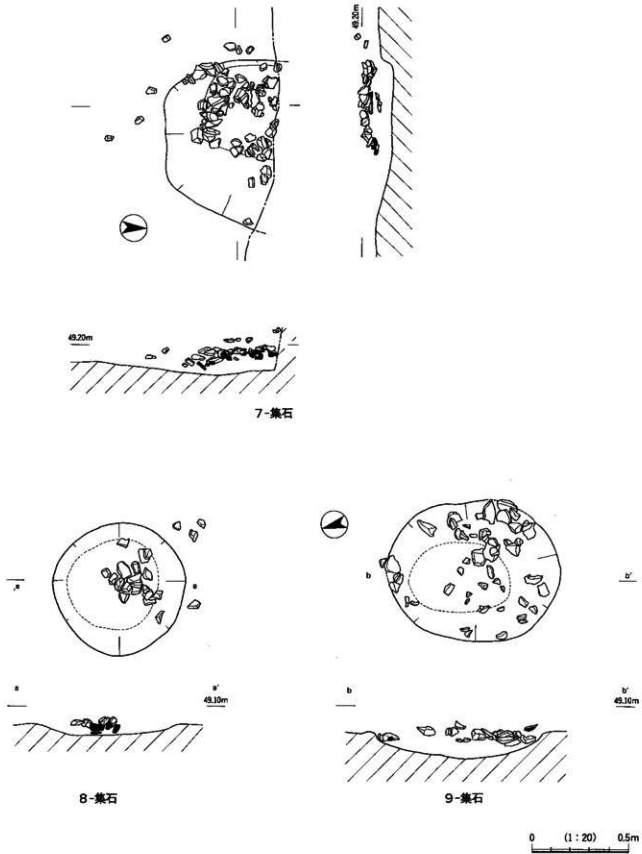


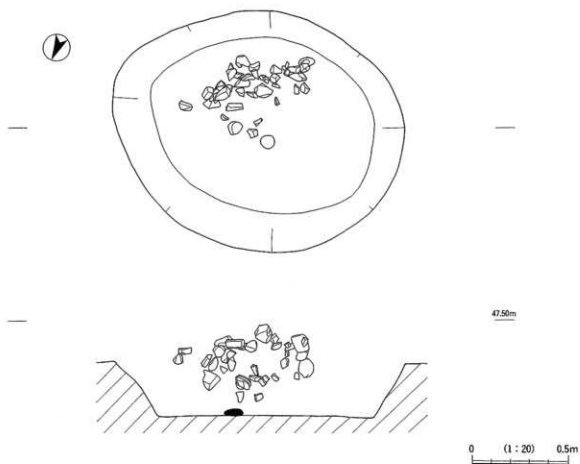
图 VI.08 4-集石 · 6-集石



図VI.09 7-集石～9-集石



图VI.10 11-集石



図VI.11 12-集石

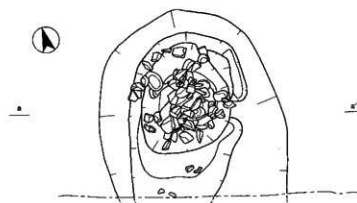


写真VI.04 21-集石 検出状況

【完備状況及び集石下位の検出状況】



【検出状況】

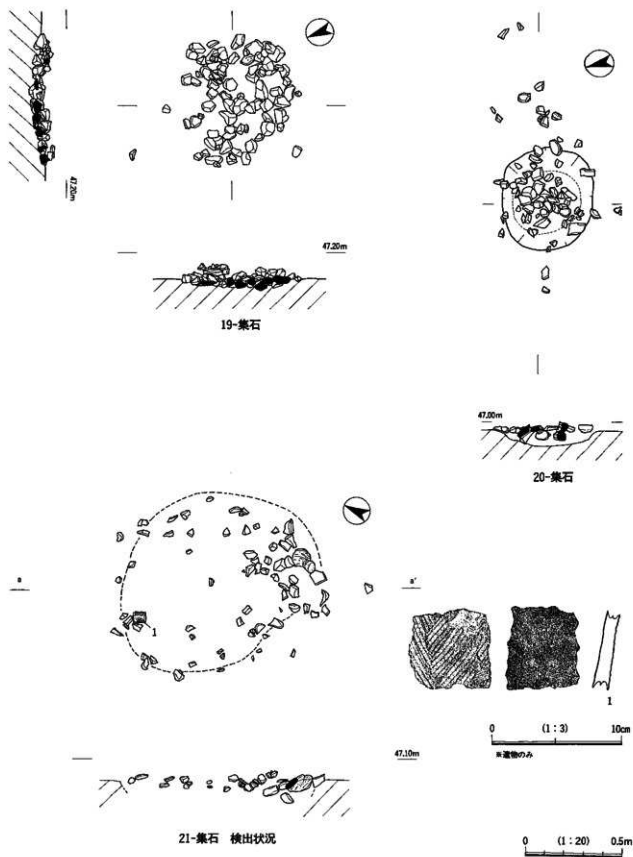


13-集石

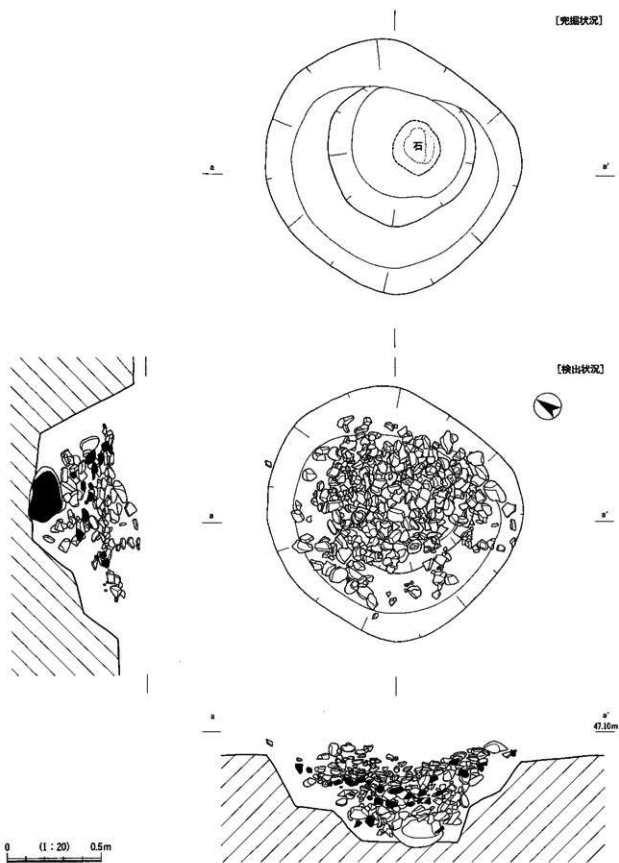


18-集石

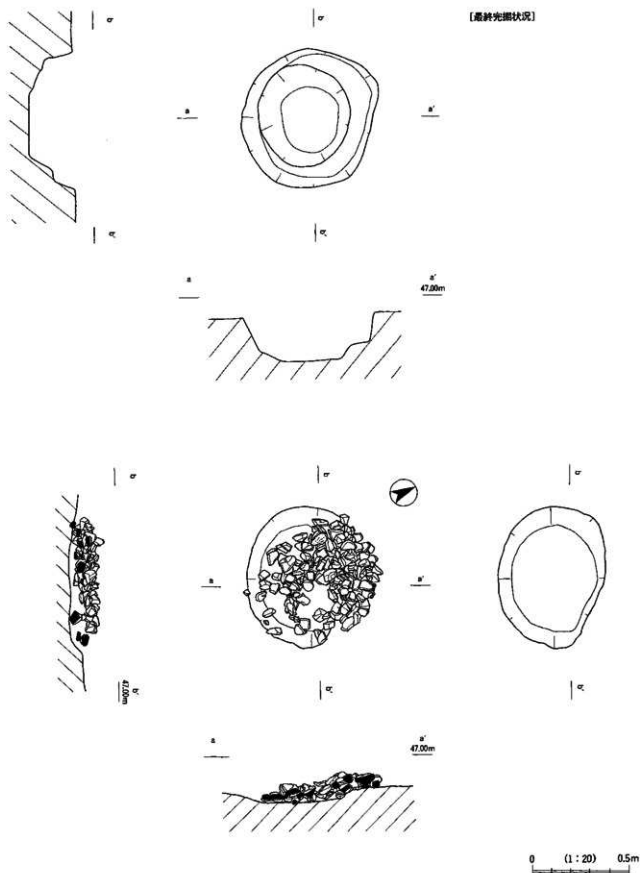
図VI.12 13-集石・18-集石



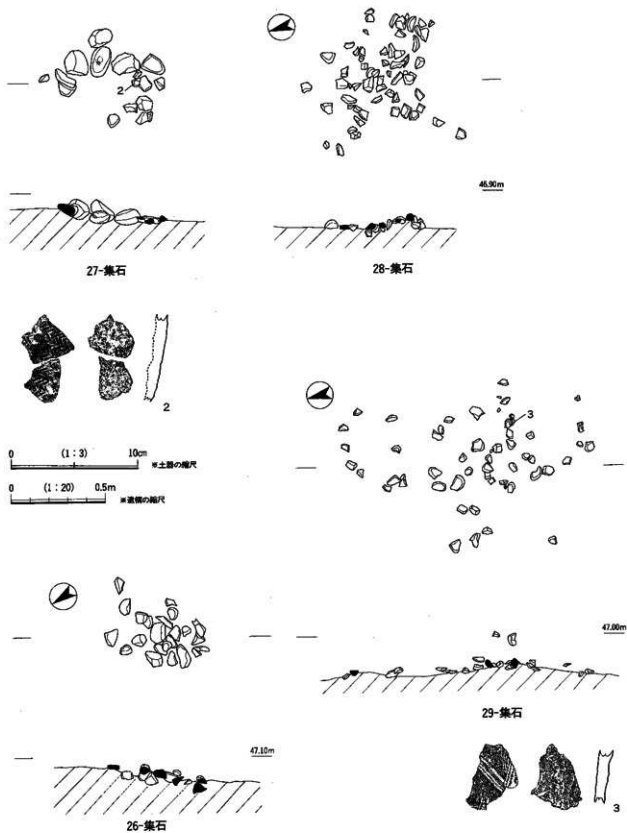
図VI.13 19-集石～21-集石（1）



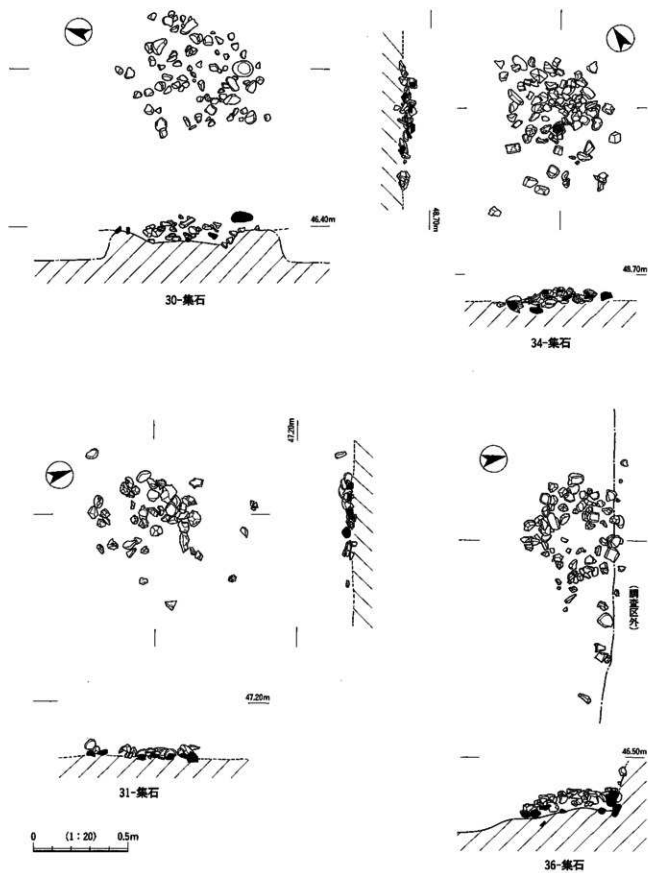
图Ⅵ.14 21-集石(2)



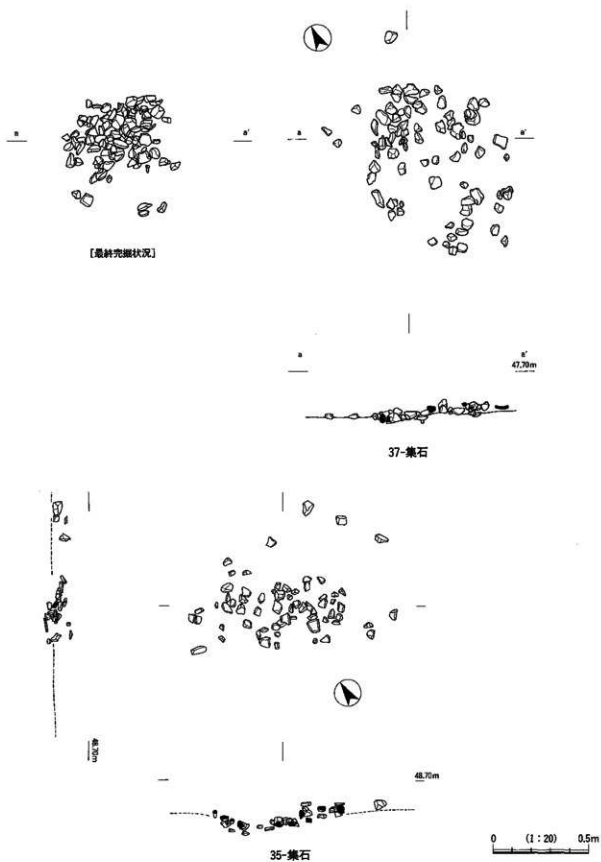
図VI.15 22-集石



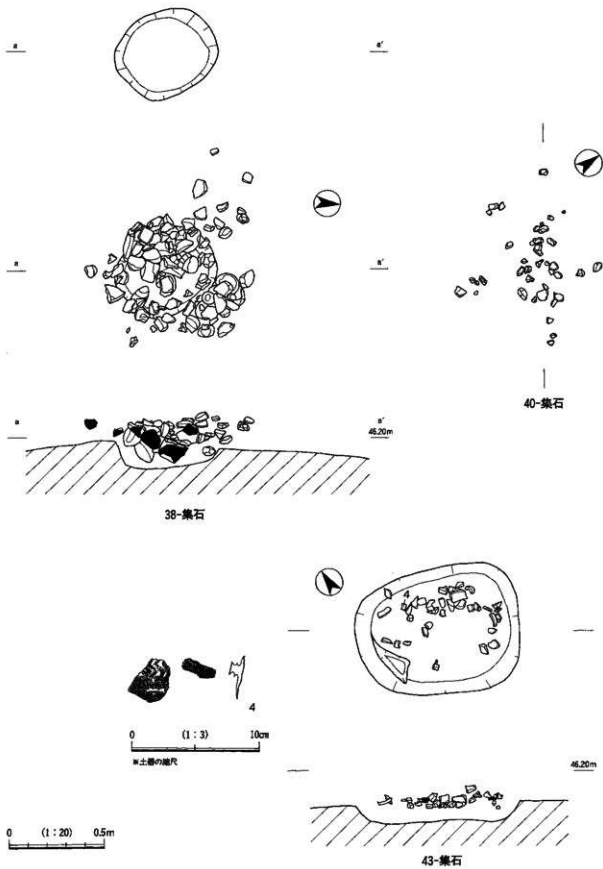
図VI.16 26-集石～29-集石



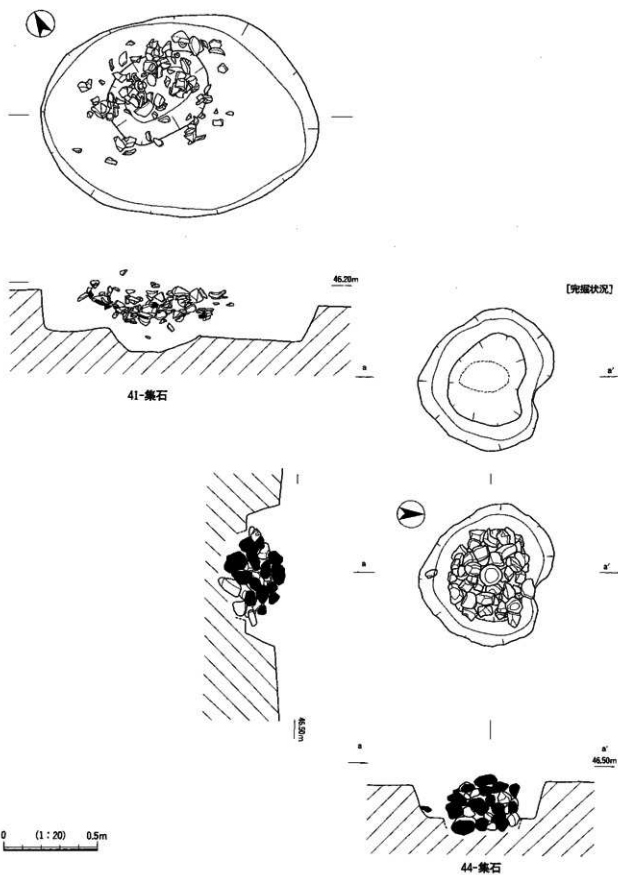
図VI.17 30-集石・31-集石・34-集石・36-集石



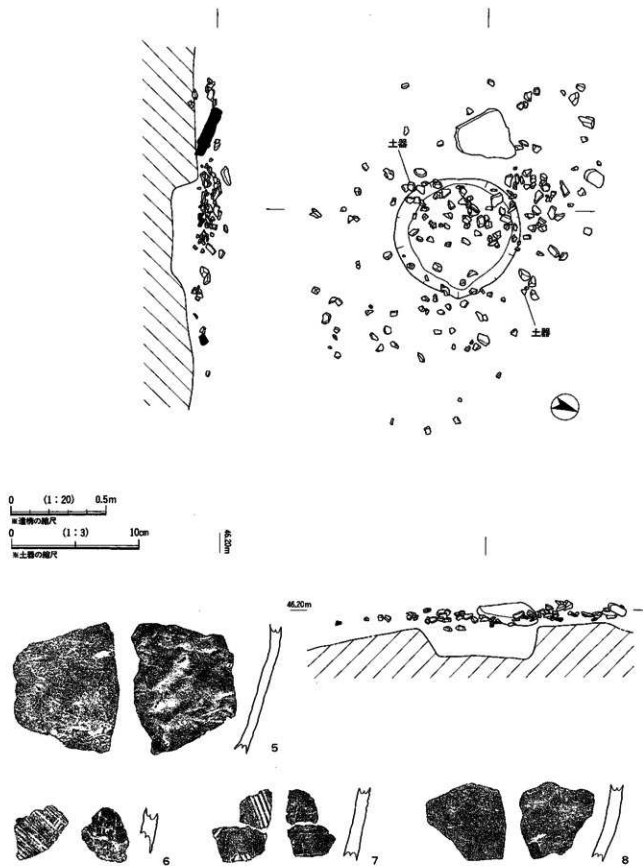
図VI.18 35-集石・37-集石



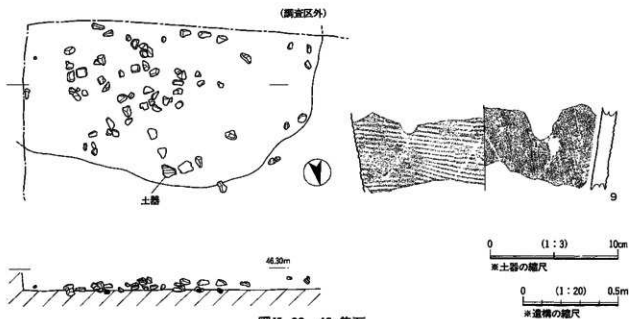
図VI.19 38-集石・40-集石・43-集石



圖VI.20 41-集石・44-集石



図VI.21 45-集石



図Ⅷ.22 46-集石

3. 土坑

土坑は9基を検出している。分布はグリッドC10付近とD13付近に集まる。

10-土坑は、形態が平面は長円形、断面が逆台形を呈する。底面に深さ28cmの掘り込みが存在する³。規模は平面153cm×79cm、底面までの深さ24cmを測る。覆土中には4個以上の礫を含む。

14-土坑は、形態が平面が隅丸長方形、断面形が皿状を呈する。規模は平面が248cm×153cm、底面までの深さ28cmを測る。覆土の上位には23個以上の礫を含む。

15-土坑は、形態が平面は楕円形、断面が逆台形を呈する。底面に小さな凹凸が存在する。規模は平面が163cm、底面までの深さ24cmを測る。覆土中には1個以上の礫を含む。

16-土坑は、形態が平面は円形、断面が逆台形を呈する。規模は平面が径88cm、底面までの深さ20cmを測る。

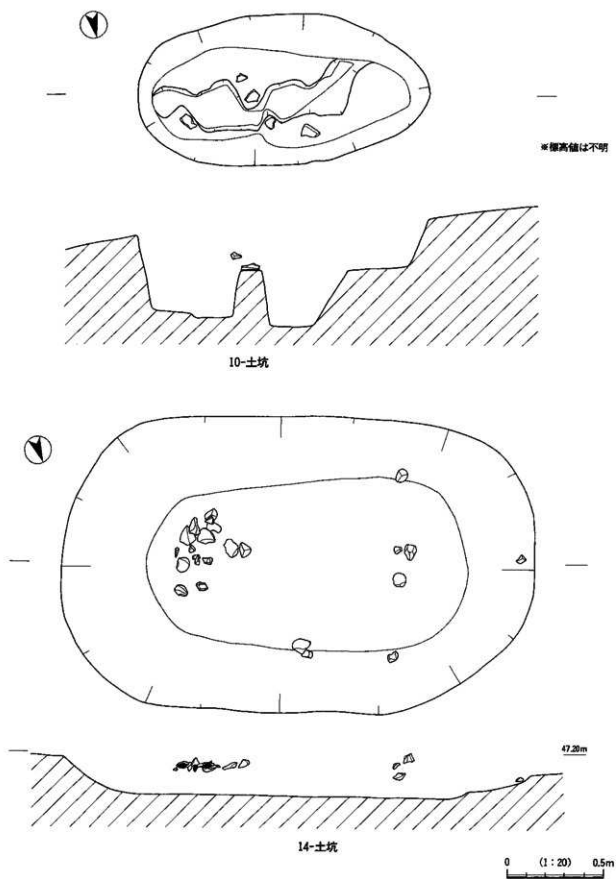
17-土坑は、形態が平面は円形、断面が逆台形を呈する。底面に深さ24cmの掘り込みが存在する。規模は平面が径122cm、底面までの深さ23cmを測る。覆土中には2個以上の礫を含む。

33-土坑は、形態が平面は長円形、断面が逆台形を呈する。底面に掘り込みが存在する。規模は平面127cm以上×43cm、深さ18cmを測る。覆土中には2個以上の礫を含む。

39-土坑は、形態が平面は円形、断面が逆台形を呈する。規模は平面が径134cm、深さ22cmを測る。覆土中には12個以上の礫を含む。また、記録では土器・石器剥片類が出土しており、図中のNo.1～4が土器、No.5が黒曜石製の石核、No.6がチャート製の剥片と記してある⁴。

42-土坑は、形態が平面は楕円形、断面が逆台形を呈する。底面には掘り込みが存在する。規模は平面148cm×108cm、深さ18cmを測る。覆土中には3個以上の礫を含む。

47-土坑は、規模の大きな土坑で、調査時は竈穴住居の可能性も考えられていた。形態は平面が円形、断面は逆台形を呈する。規模は平面292cm×214cm以上、深さ31cmを測る。覆土中には、複数の礫が見られ、記録では土器も出土しているが、詳しくは不明である。



図VI.23 10-土坑・14-土坑

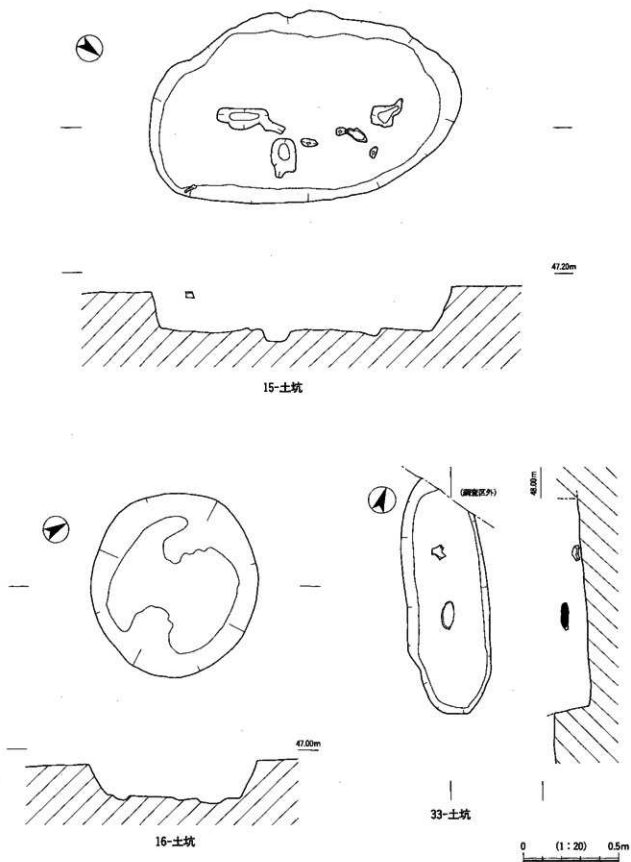


图 VI. 24 15-土坑 · 16-土坑 · 33-土坑

4. 連穴土坑

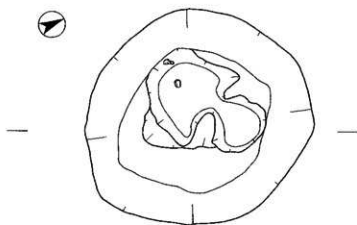
連穴土坑は3基ある。グリッドC11・12に集中して分布し、軸方向が比較的類似する。

23-連穴土坑

平面形が、楕円形の土坑から一部が突出する。突出部は平面形が楕円形を呈する。規模は平面81cm×44cm、深さ19cmを測る。土坑とは幅49cm×深さ4cmの溝でつながる。突出部の覆土の下位から底面には、炭化材が多く出土している。炭化材はユリ科やヒガンバナ科の鱗茎と同定されており、燃料材ではなく食材と考えられる。分析の詳細はⅧ章に記述している。

土坑は、一部が22-集石と重複する。形態は水滴に似た楕円形を呈する。断面は3段掘りのU字状を呈する。2段目の底面中央には黒色土の掘り込みがある。掘り込み上を中心に10～15cm大の礫が集石状に集中する。礫の総数は81個以上を数える。この礫の集中部と土坑とに時期差があるかについては不明である。

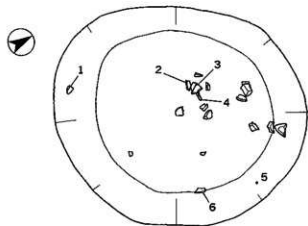
遺構からは複数の土器が出土している。土器10は外面に楕円形押形文を施し、内面は横のミガキで整える。土器8類の押形文に比定される。土器11は外面に横位の貝殻条痕文を施し、内面は横のナデで整える。土器1類の前平式に比定される。土器12は外面に貝殻刺突文を施し、内面は横のナデで整える。



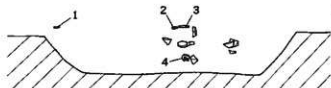
47.20m



17-土坑



46.20m



39-土坑

0 (1:20) 0.5m

図VI.25 17-土坑・39-土坑

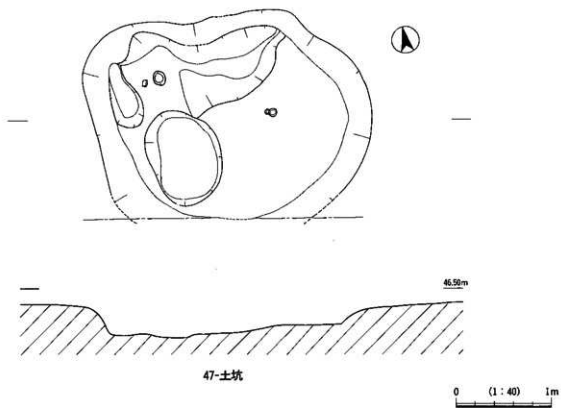
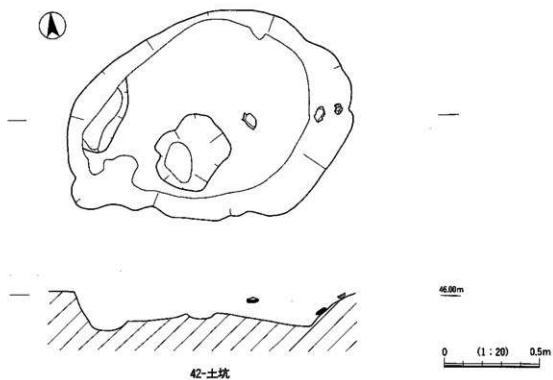


图 VI. 26 42-土坑 · 47-土坑

24-連穴土坑

2つの土坑が地下において連結する。連結部は24-連穴土坑-1底面から側面を24-連穴土坑-2の側面と、径14～24cmの穴でつないでいる。全体の深さは24-連穴土坑-2の連結部付近が深く、27cmを測る。24-連穴土坑-1は、平面形が楕円形を呈する。規模は平面48cm×36cmを測る。24-連穴土坑-2は、平面形が隅丸長方形を呈する。規模は平面117cm×68cmを測る。覆土には約15個の礫を含む。覆土は橙色砂粒を含んだ黒茶褐色粘質土が主体となる。焼土は見られない。

25-連穴土坑

2つの土坑がL字状に連結する。25-連穴土坑-1は、平面形が隅丸長方形、断面は浅い逆台形を呈する。規模は平面約130cm×68cm、深さ14cmを測る。25-連穴土坑-2は、平面形が隅丸長方形、断面は2段掘りの逆台形を呈する。覆土には約10個の礫が含まれる。規模は平面148cm×73cm、深さ23cmを測る。類例から連穴土坑と考えられる⁵。

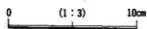
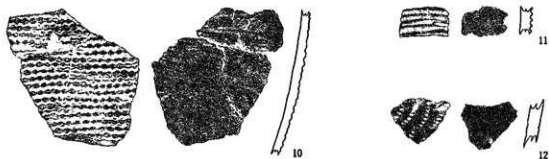
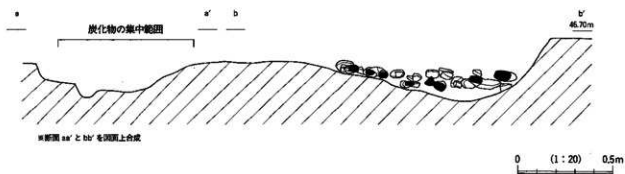
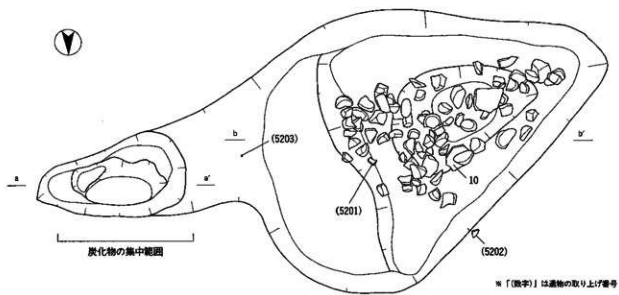
5. その他の遺構

調査当時は遺構として考えられなかったものが、その後の調査において遺構と認識されているものがあり、32-柱穴などは類似するものが枕状の柱穴である可能性が指摘されている⁶。写真記録の中には、同様のものが調査区内の随所に見られる。このことから前述の遺構群は多数の枕状の柱穴を伴っていたと考えられる。また、柱穴のみで構成された柱列などの遺構が存在していた可能性も考えられる。

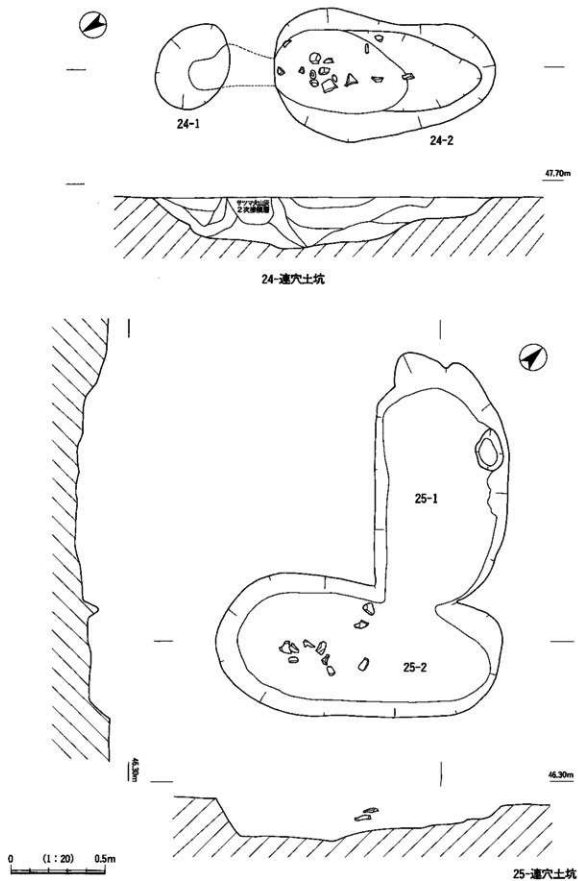
32-柱穴

検出と一部の半截のみで調査を終えている。3基の柱穴が1列に並んでいる。直径が15cm程度と小さく、埋土は黒色土である。

-
- 1 調査時に調査員の途中交代があり、呼称に統一的な見解がとられなかった。さらに調査担当者と報告書作成者が異なることから、作業の都合上、呼称を新たに付した。報告にいたるまでの詳細については、第1章に述べている
 - 2 今回の調査では詳細な礫分布を記録していないため、詳しくは不明である。調査者は礫密度が高いことを「足の踏み場がない」と形容している
 - 3 掘りすぎの可能性はある
 - 4 どの遺物かは不明である
 - 5 東叡志・松崎卓郎 2003 「浜場遺跡・下瀬遺跡」有明町教育委員会 を参照
 - 6 上苑遺跡と浜場遺跡・下瀬遺跡の調査において、円形に配列する柱穴が検出されている



図VI.27 23-連穴土坑



図VI.28 24-連穴土坑・25-連穴土坑

第3節 遺物

VI・VII層中の出土遺物は非常に多く、取り上げ番号を付したもので約6,200点を数える。取上げ遺物以外にも、多量の礫が包含層中に含まれている。以下、詳細について、分布状況・土器・土製品・石器の順に述べる。

1. 遺物の分布状況

ア) 礫の分布状況

礫については、調査時の状況から取上げ遺物を優先したため詳細は不明である。発掘担当者は「足の踏み場もないほど」と状況を表現しており、非常に多くの礫が包含層中に存在している。なお、礫には破碎礫や赤色化したもの、炭化物・煤の付着したのも多数見られる。

イ) 遺物の分布状況

取上げた遺物全体では、調査区の東側に行くほど遺物が高密度に集中しており、遺物の分布密度が概ね3つの範囲に分かれる。3つの範囲は、グリッドB1～C4は分布密度が希薄でグリッドB5～C9は高く、グリッドC10から東は極めて高い分布密度を示している。それぞれの範囲内には特に集中する箇所があり、グリッドB1～C4とグリッドB5～C9には1つ、グリッドC10から東にはグリッドD11～C12を境に東西に2分して遺物が集中している。

分布状況は後述する土器の年代観から縄文時代早期中葉・後葉に分けたところ、前者が調査区全域に比較的遺物が分布するのに対して、後者が調査区東側に偏る傾向が見られる。

ウ) 土器の分布状況

土器の分布状況は、後述べる土器分類に従って分布を示している。以下、分類ごとに略述する。

土器1類・2類は調査区東端に分布が集まるが、遺物量は極めて少ない。グリッドE13・14に見られる分布のやや集まる範囲が土器3類の集中箇所に重なっている。

土器3類は土器9類と並んで出土量が最も多く、分布がグリッドB5～C8とグリッドC10～D9、グリッドC12から東側の3つの範囲に偏る。グリッドB5～C8とC10～D9の範囲内には分布の集中する箇所が存在している。

土器4類は、とくに集中する箇所は見られないが、土器3類の分布状況がほぼ重なっている。一部異なる点は、土器3類では分布の途切れるグリッドB・C9間にも遺物が拡がる点である。

土器5類は推定個体数2個体と少ないためか、主にグリッドD13に集中する。それ以外はグリッドC7に分布が集まる。分布の傾向は土器3・4類と類似する。

土器6類は土器3～5類とは分布の傾向が異なり、グリッドC5とグリッドB7～C8に集中する。

土器7類は、分布密度は疎であるが、主にグリッドC10～D11とグリッドD13～14に分布が見られる。

土器8類はグリッドC10～E14の範囲に分布する。遺物密度は疎である。グリッドD12の分布を除けば、土器7類の分布状況と重なる。

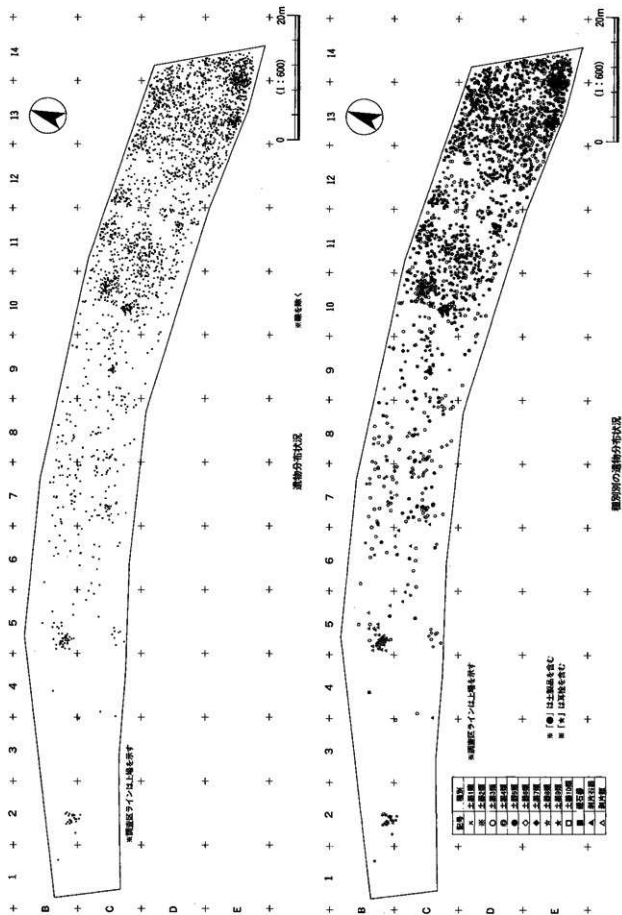
土器9類は、グリッドC10から東側に主な分布が集中する。その範囲内には数ヶ所の遺物の集中箇所が存在している。集中箇所の中には分布密度が高密度なものも見られる。

土器10類はグリッドC10から東側に分布しており、遺物密度はかなり疎である。また、10類は3つに細部されることから、細分されたものの分布は若干異なる。

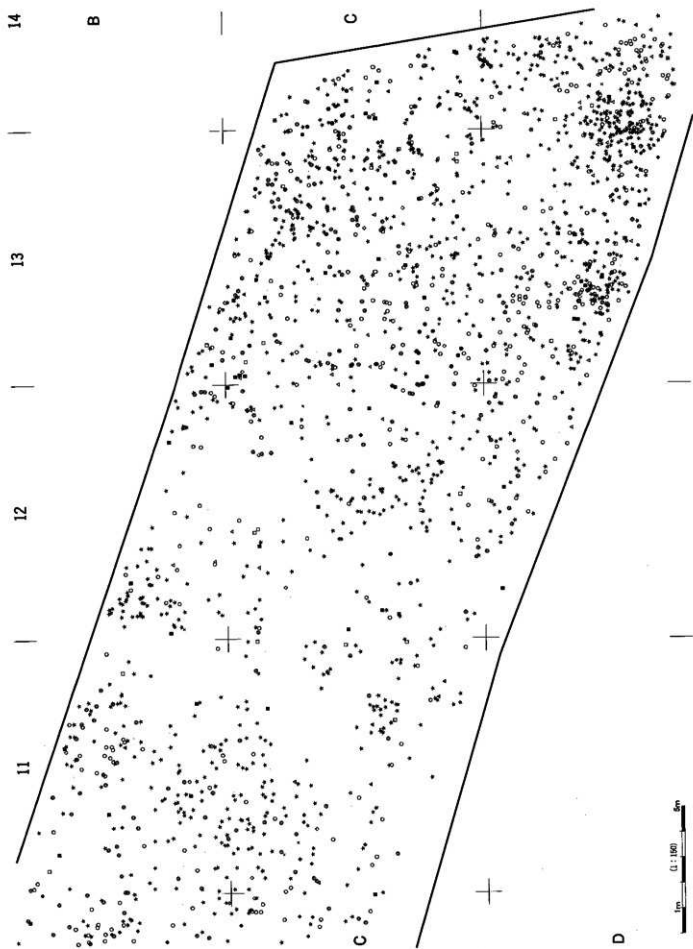
エ) 土製品・石器の分布状況

土製品

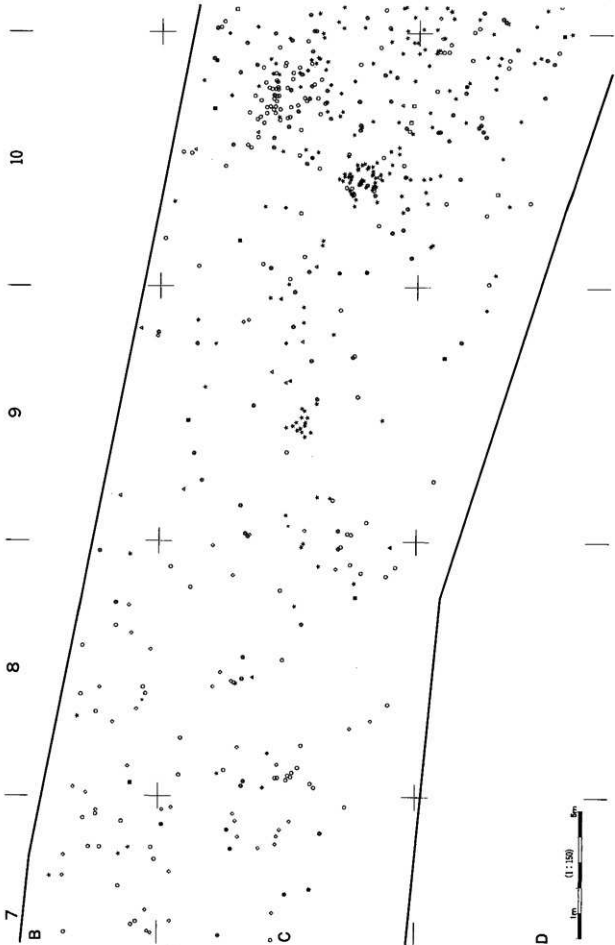
土製品は耳栓と土製円板が出土している。耳栓はグリッドD10から出土しており、とくに供伴する遺



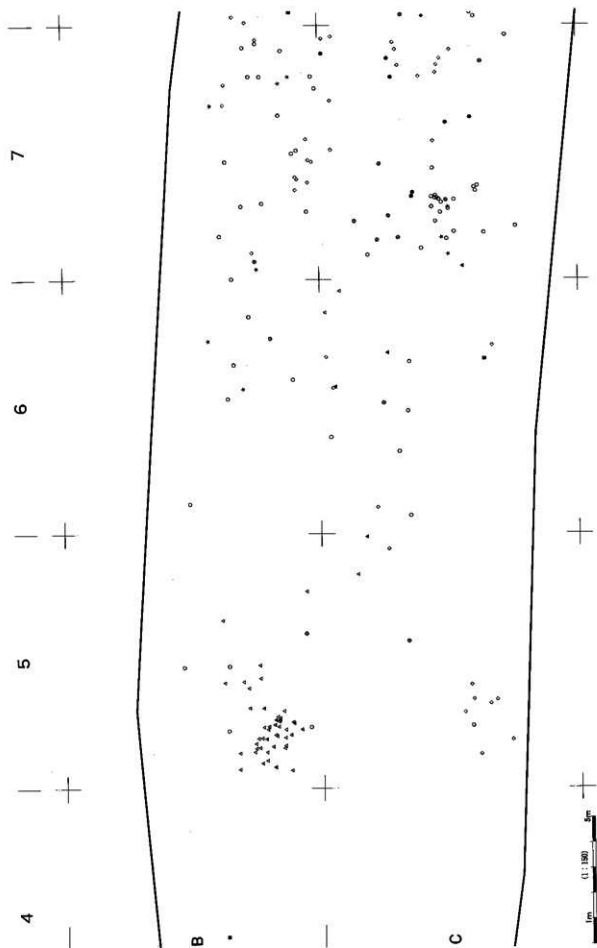
図VI.29 VI・VII層 遺物分布状況



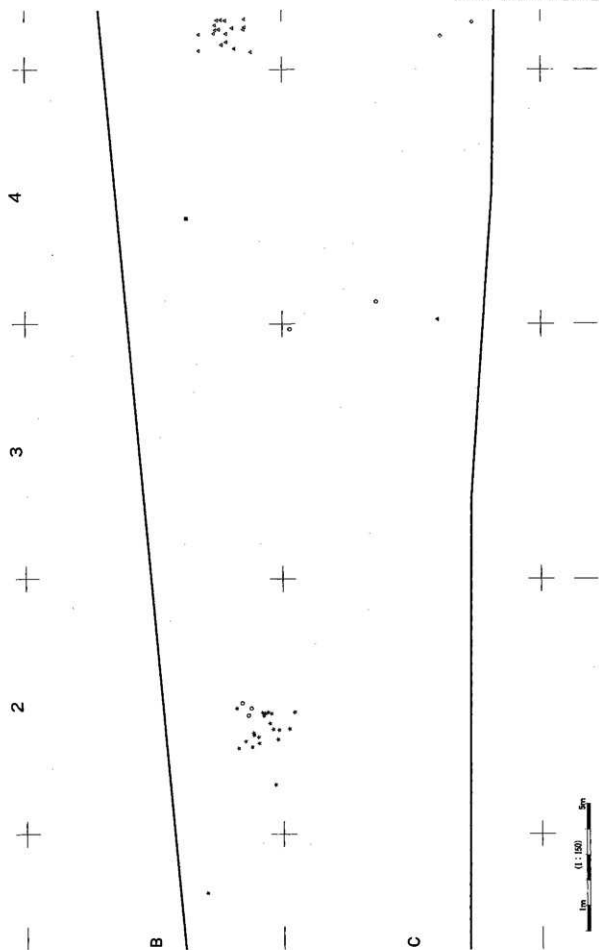
图VI.30 VI·VII層 遺物分布 拡大図(1)



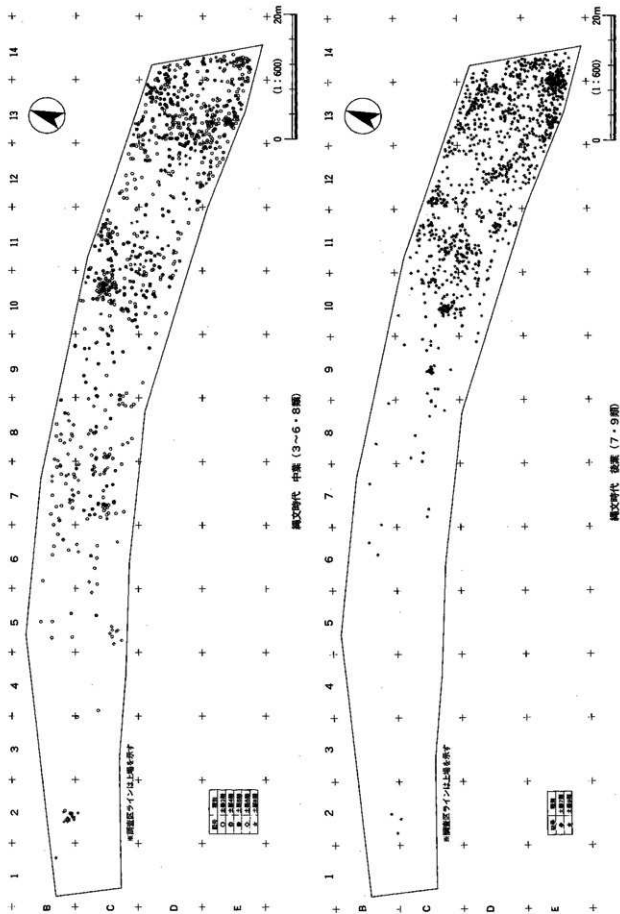
図VI.31 VI・VII層 遺物分布 拡大図(2)



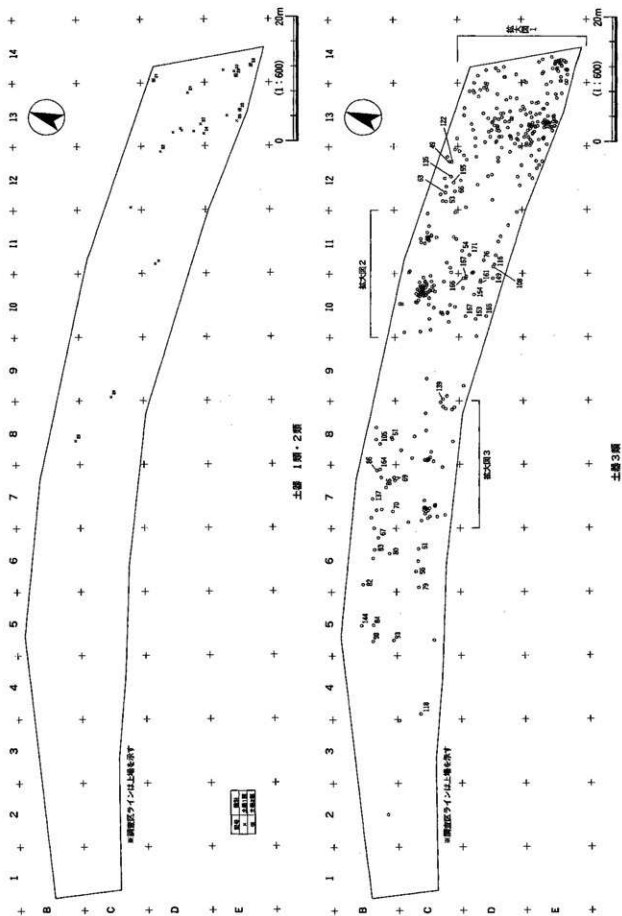
图VI.32 VI·VII层 遗物分布 放大图(3)



図VI.33 VI・VII層 遺物分布 拡大図(4)



図VI.34 VI・VII層 時期別の遺物分布

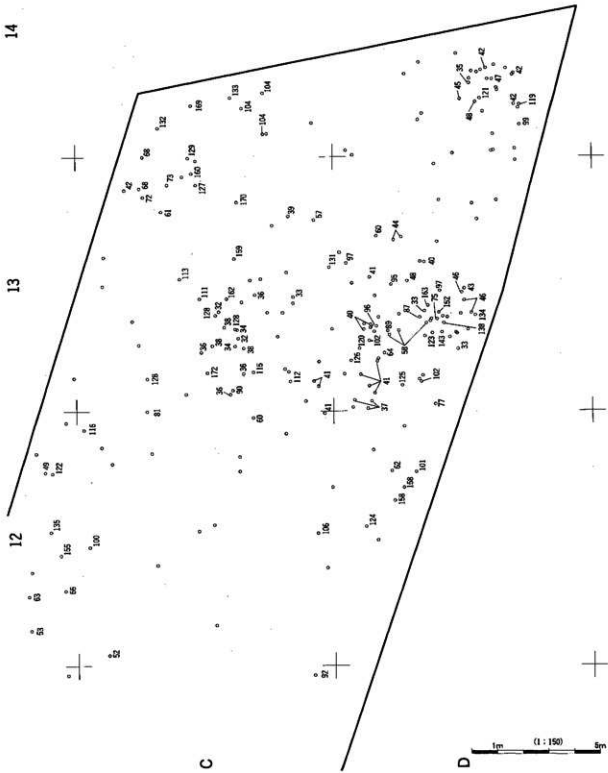


図VI.35 土器1～3類の分布

14

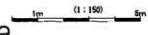
13

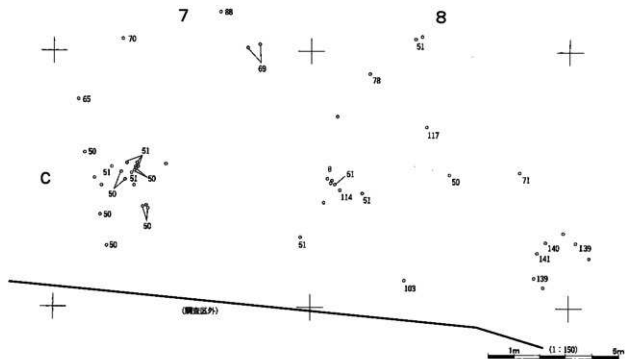
12



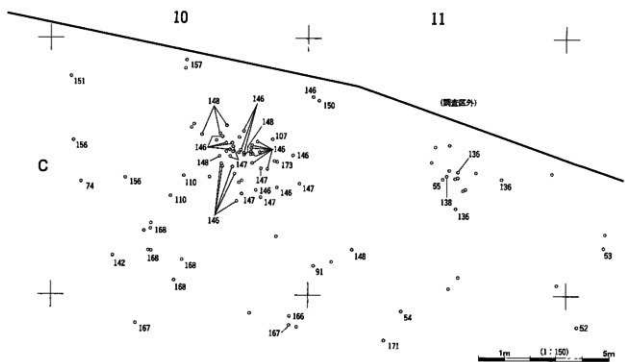
基本図1 (グリッドE2~D14)

図VI.36 土器3類の分布(1)



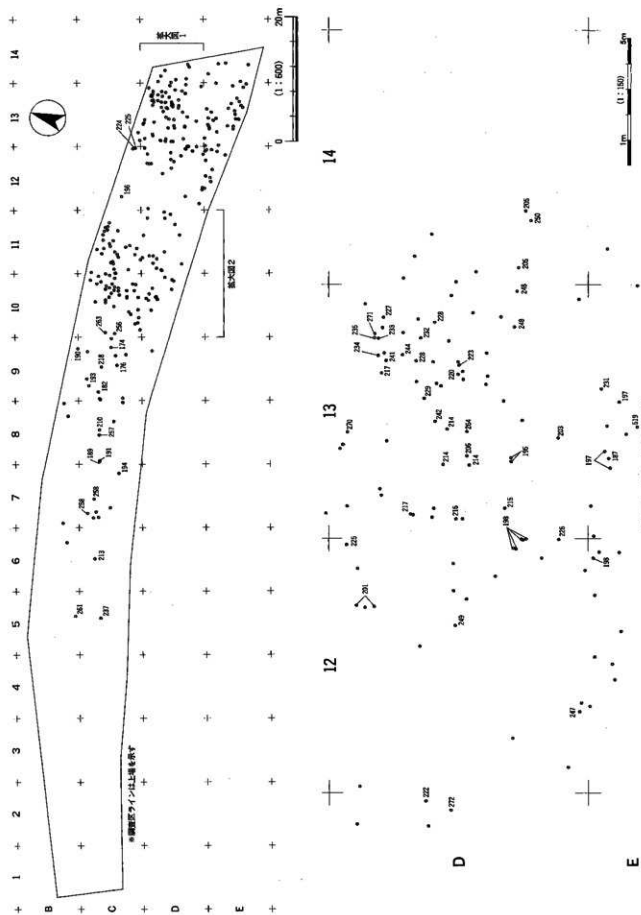


拡大図2 (グリッドC7~C8)

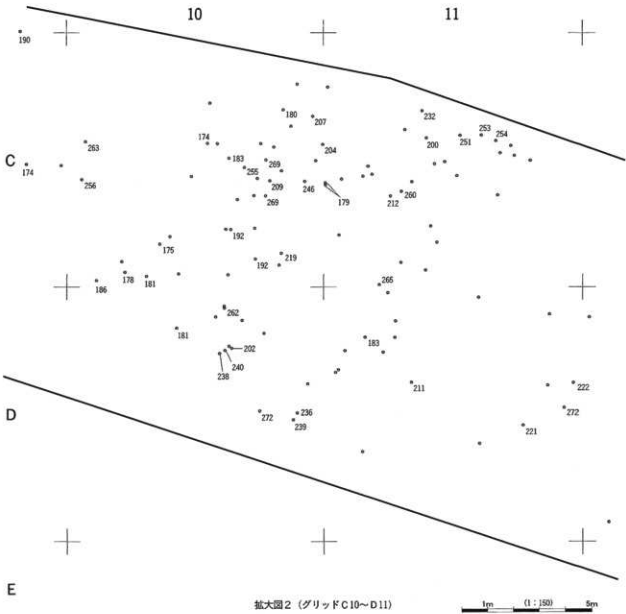


拡大図3 (グリッドC10~C11)

図Ⅴ.37 土器3類の分布(2)



図Ⅵ.38 土器4類の分布(1)



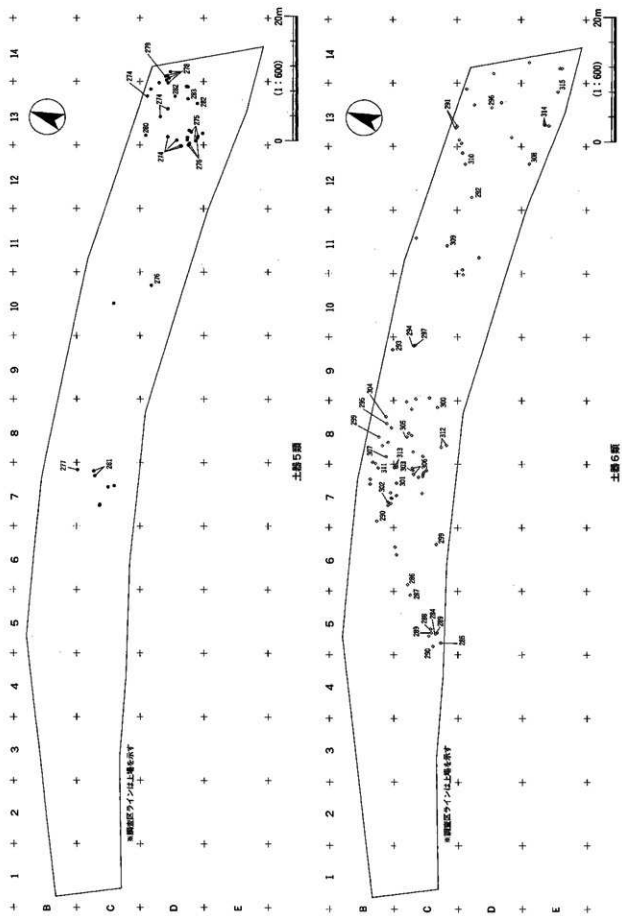
拡大図2 (グリッドC10～D11)

図VI.39 土器4類の分布(2)

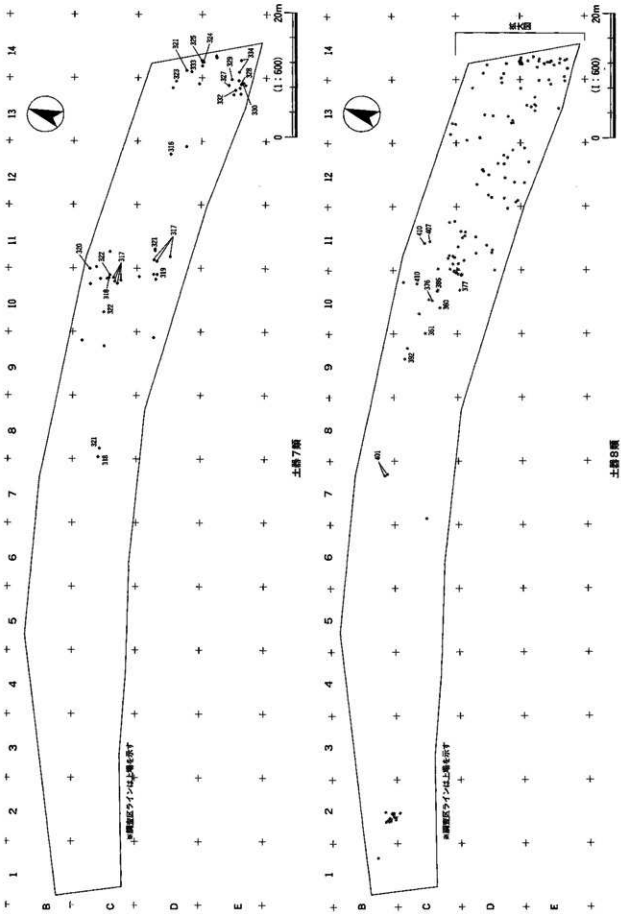


写真VI.05 遺物分布状況

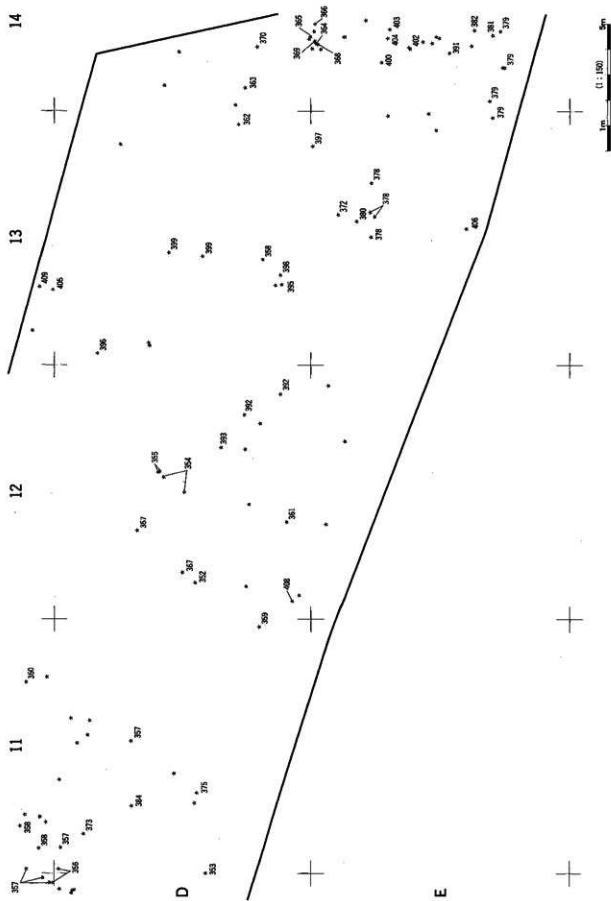
※グリッドD11より西を望む



図VI.40 土層5・6類の分布

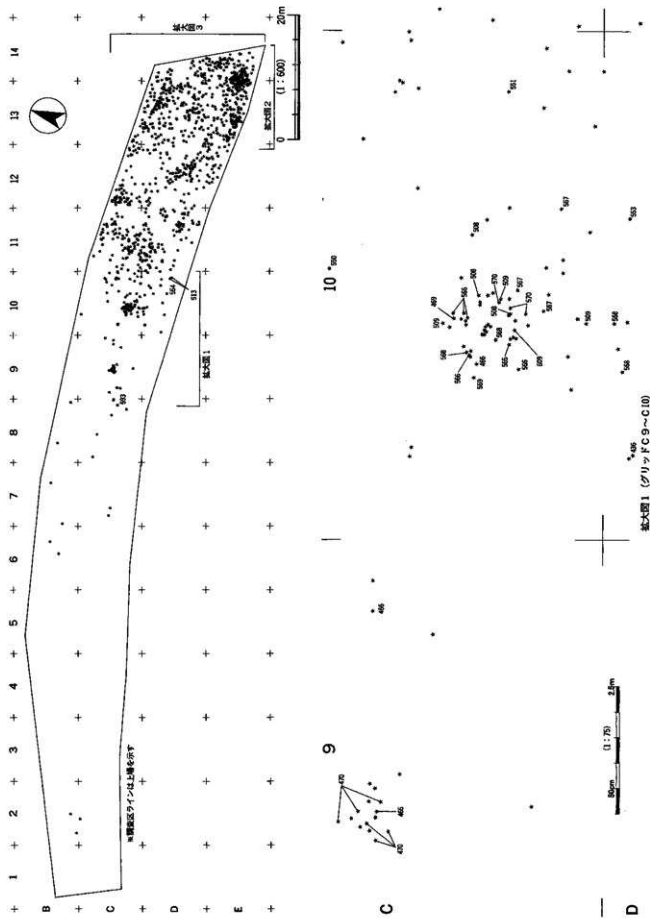


図VI.41 土器7・8類の分布

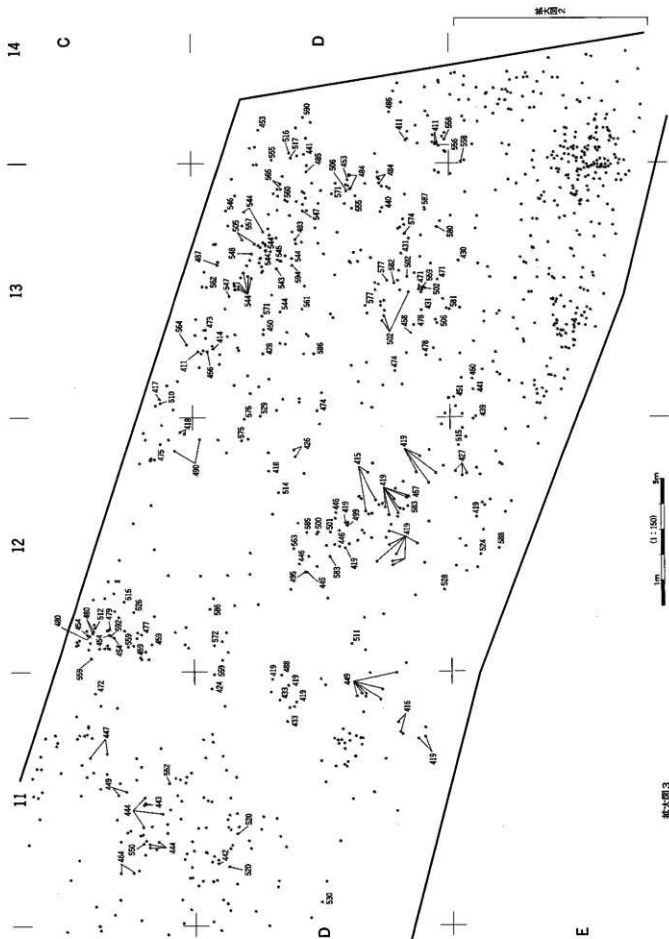


基本図 (グリッドD11~E14)

図VI.42 土器8類の分布

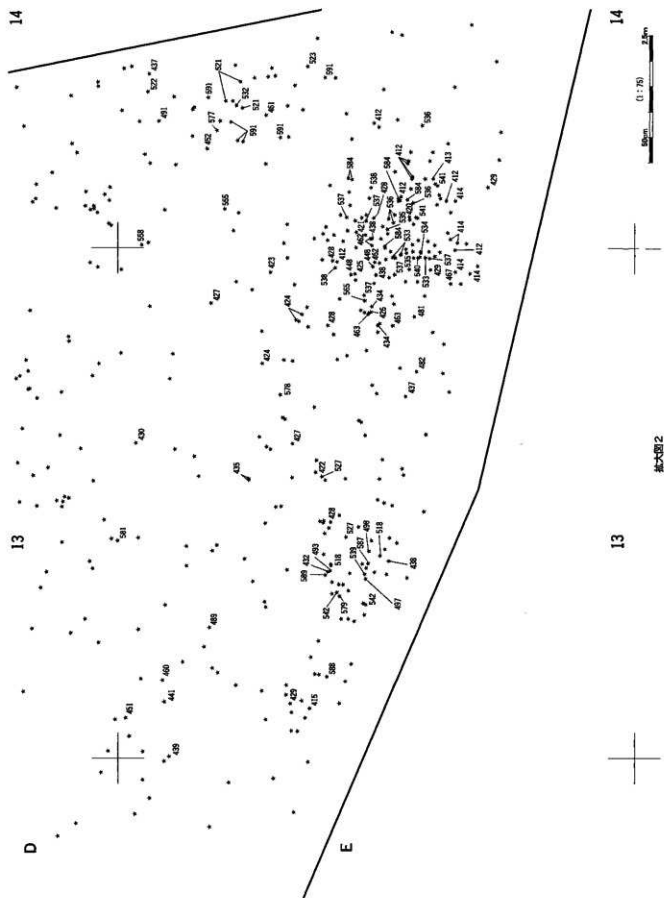


図W.43 土器9類の分布(1)

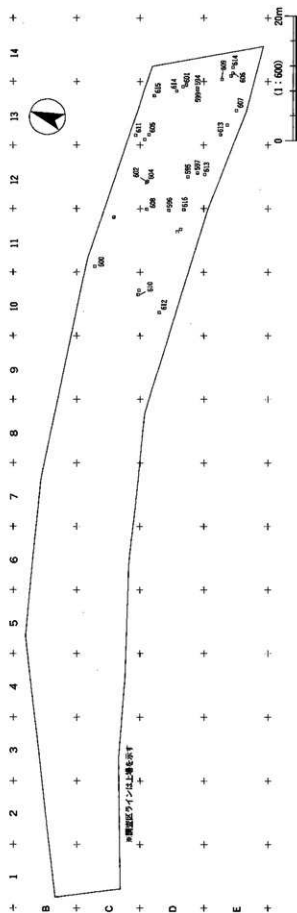


図VI.44 土群9類の分布 (2)

拡大図3



図VI.45 土壌9類の分布(3)



図VI.46 土器10類の分布

物は見られない。土製円板は底部を二次加工したもので、後述するように主に土器9類のものが多い。分布も土器9類のものと類似しており、調査区東側に偏っている。グリッドC・D14にはとくに分布が集中する。主な底部の分布状況と比較すると、底部とは異なる分布を示している。

石器

石器の分布は、グリッドB5に集中箇所があるのを除くと、東に行くにつれて分布密度が高くなり、グリッドD・E14が最も密に遺物が存在している。

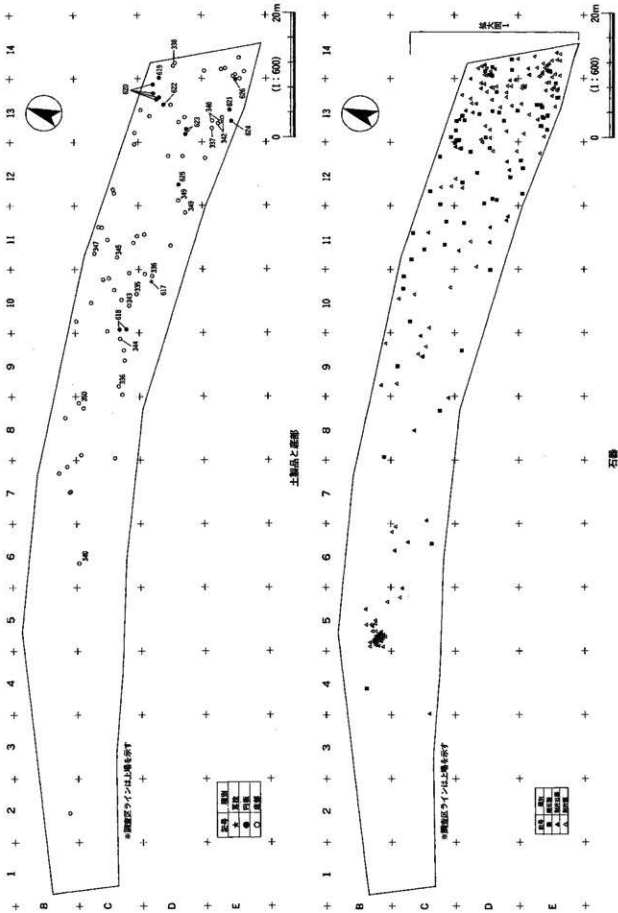
礫石器は東端のグリッドC11～E13に分布が集中する。

剥片石器と剥片類を合わせて分布の傾向を見ると、グリッドB5～C6とグリッドC9～D11、グリッドC12から東の3つの範囲に分かれる。とくに西側の範囲内であるグリッドB5には集中箇所が存在している。

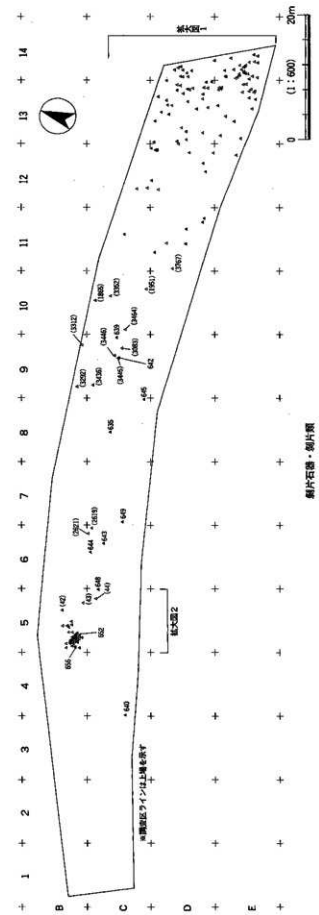
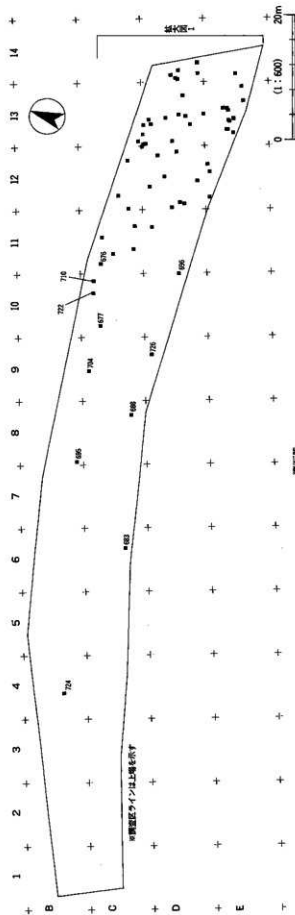
石材別に剥片石器と石器類の分布を見る。すると黒曜石がグリッドB5にとくに集中しており、それ以外ではグリッドE13にやや集まっている。全体では最も広く分布が見られる石材である。

チャートはグリッドD13～E14に2ヶ所の集中する範囲があり、とくにグリッドE14には赤色チャートが集中している。

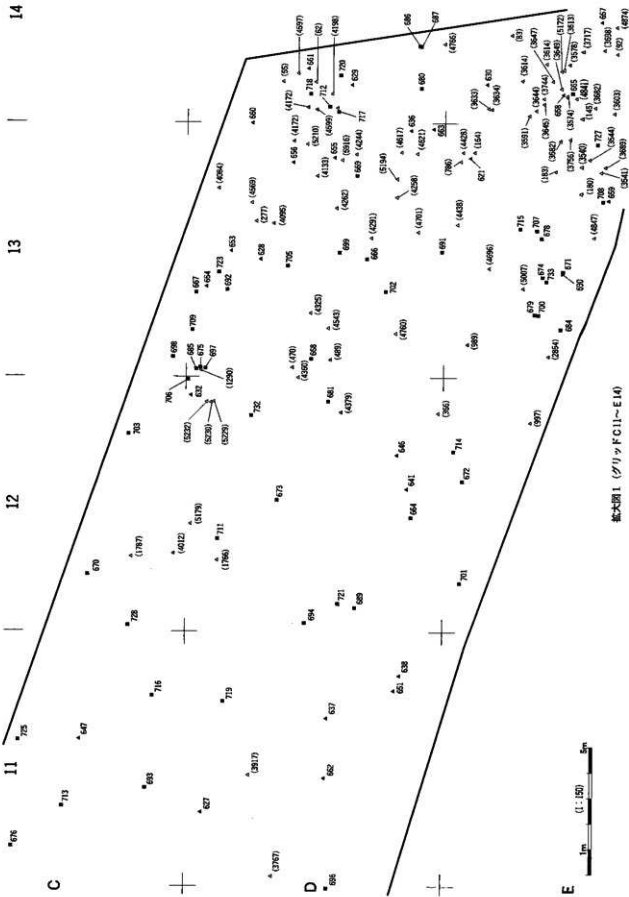
頁岩は、出土量は少ないが黒曜石について広範囲に分布している。



図VI.47 土製品・石器の分布状況



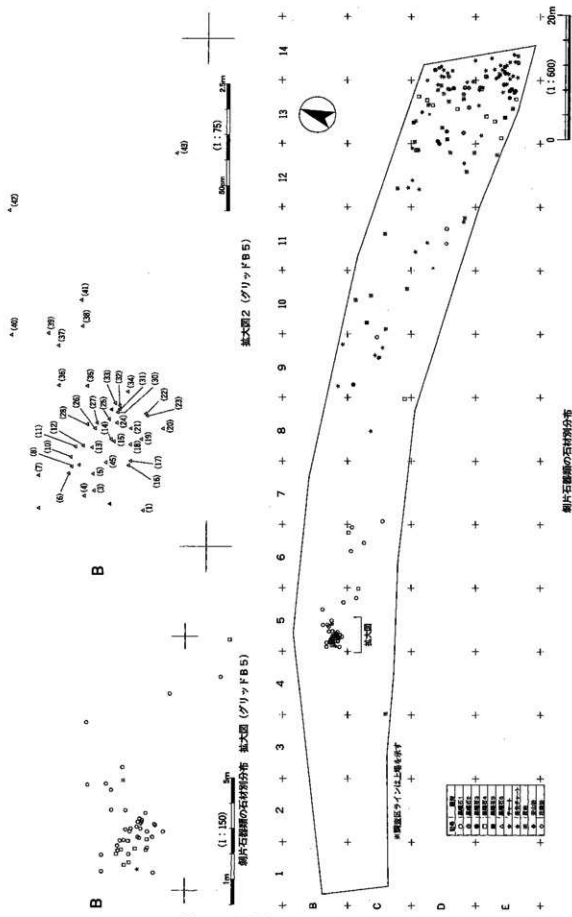
図VI.48 石器の分布(1)



図VI.49 石標の分布(2)

5

5



図VI.50 石器の分布 (3)

2. 土器

出土した土器は表VI.03に示す特徴から10類に分類している。出土土器の全体的な傾向としては、内外面が赤色化・黒色化するものが多い。一次焼成によるものか二次焼成によるものかの判別は困難である¹。

土器の出土量は、3類（石坂式）と9類（塞ノ神式）が多く、2つで半分以上を占めている。次いで4類（下刺峰式）・8類（押型文）が多い。6類（桑ノ丸式）・5類（辻タイプ）は少量となる。1類（前平式）・2類（吉田式）・7類（苦浜式）・10類（微隆帯文・縄文）の出土量は極少量である。出土土器の割合は、グラフ²にて示している。

土器から考えられる検出面2（VI・VII層）のおもな時期は、縄文時代早期で、前葉から後葉までの形式が存在する。主体を占めるのは中葉・後葉で、3類（石坂式）と9類（塞ノ神式）の時期が中心となっている。とくに3類の出土量・土器個体数が多い。土器の編年観については、表VI.05に示している。

土器1類

胴部外面に横位の貝殻条痕文を施すものを1類としている。貝殻条痕文の施文原体の違いから3個体に分けられる。

表VI.03 土器分類表

分類番号	形式名	特徴
1類	「前平式」	胴部外面に横位の貝殻条痕文を施す
2類	「吉田式」	横位の貝殻条痕文を施す
3類	「石坂式」	
3類-1		口縁端部の外面に散条の刺突文で構成された文様帯をめぐらす、胴部斜位の貝殻条痕文を施す
3類-2	「石坂1式」	胴部外面に貝殻条痕の綾杉文を施す
3類-3	「石坂2式」	胴部外面に貝殻条痕の綾杉文以外を施す
4類	「下刺峰式」	胴部外面に貝殻復縁などによる刺突文を施す
5類	「辻タイプ」	胴部外面に「ハ」字状に刺突文を施す
6類	「桑ノ丸式」	胴部外面に短沈線文を施す
7類	「苦浜式」	胴部外面に粗い沈線文を幾何学的に施す
8類-1	「押型文(山形)」	胴部外面に山形の押型文を施す
8類-2	「押型文(楕円形)」	胴部外面に楕円形の押型文を施す
8類-3	「押型文(その他)」	胴部外面に押型文を施す
9類-1	「塞ノ神式」	捺糸文を施す
9類-2	「平磨式」	へう描き沈線文を施す
9類-3		縄文を施す
9類-4	「塞ノ神式(無文)」	無文
10類	その他	

土器2類

28は棒状浮文を貼り付ける。29～31の文様は横位の貝殻復縁を刺突後にやや下に押し引いている。

土器3類

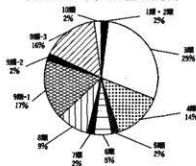
胴部外面におもに綾杉状の貝殻条痕文を施すものを3類としている。3類は形態・文様などから、さらに3類-1・3類-2・3類-3の3つに分類している。

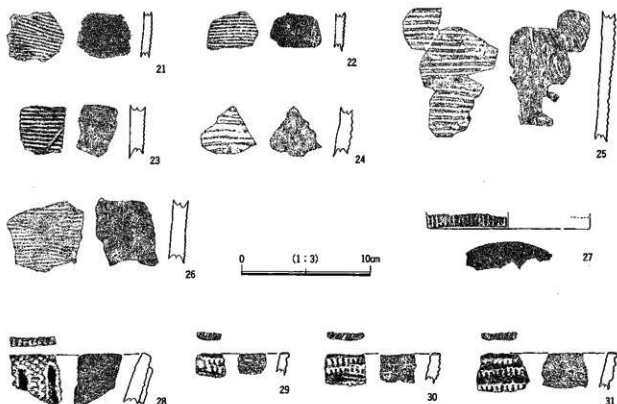
3類-1（32～49）口縁部の特徴から石坂式の中でも吉田式に近い1群と考えられる³。形態

表VI.05 土器分類の時期

時代・時期	分類	形式名
縄文時代早期 前葉	1類	「前平式」
	2類	「吉田式」
中葉	3類	「石坂式」
	4類	「下刺峰式」
	5類	「辻タイプ」
	6類	「桑ノ丸式」
	8類	「押型文」
	9類	「塞ノ神式」・「平磨式」
後葉	7類	「苦浜式」

表VI.04 出土土器の割合





図VI.51 土器1類・2類

は円筒形の胴部に、口縁部が大きく開く。口縁端部には数条の文様帯が見られ、文様は貝殻刺突文で構成される。胴部は斜位の貝殻条痕文を施す。

32～39は類似する2個体と考えられ、口縁部から底部までである。底部39は縁を打ち欠いていることから、土製円板の可能性が考えられる。

40・41は大きく開いた口縁部をもち、口唇部が側面を意識する。44～46は器壁が薄く、外面の貝殻条痕文がややナデ消される。42・43・47～49は厚い器壁をもつ。

3類-2 (50～130) 様々な形態・文様をもつが、胴部に貝殻条痕文の綾杉文を施す点が共通する。

50・51は口縁部の形態が異なるが、波状口縁をした同一個体の可能性が考えられる。胴部内面の調整が上下で異なっており、胴部を2分割で成形したと考えられる。器壁が厚い。

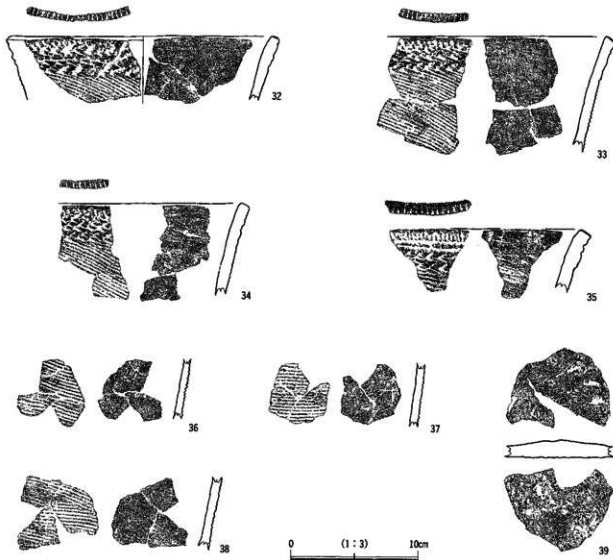
52～56は口縁部外面に2条の貝殻刺突文が巡り、上は横に真っ直ぐ、下は山形状に施す。

57～60は、口縁部が波状を呈していたと考えられる。口縁端部に2条の貝殻刺突文を施す。外面は施文前に丁寧なナデで整える。器壁が厚い。

61～64はやや窪んだ口唇部に貝殻刺突文を巡らす。口縁端部には3条の貝殻刺突文を施す。器壁が厚い。

65・66は、口縁端部には3条の貝殻刺突文を施す。薄い器壁に、復元される器径が小さいことから、小型の器と考えられる。

67～79は、類似する土器片のなかった口縁部から頸部である。67～72・75は横位の貝殻刺突文を2条から多条施す。67には穿孔が見られ外面より円形に穿つ。内面のケズリ方向が他と異なり、右に向かう。73・75・76は器壁が薄く、復元される径も小さいことから小型の器と考えられる。なお、73は土器7類



図VI.52 土器3類(1)

(苦浜式)と考えられる。74・77～79は斜位の貝殻刺突文と横位の貝殻刺突文を組み合わせた文様を施し、内面を丁寧なナデもしくはミガキで整える。

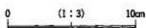
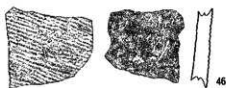
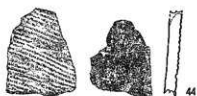
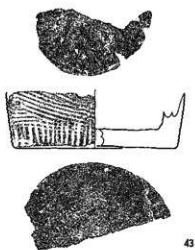
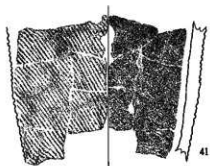
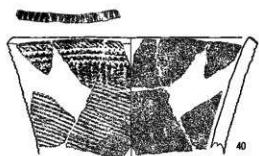
80～130は胴部である。被熱を受けたと考えられるものが多い。外面はいずれも綾杉文を貝殻腹縁で施すが、様々な施文原体が見られる。101～103は条痕幅が一定しない施文原体を用いている。

3類-3 (131～170) 3類-1・2以外を3類-3とした。

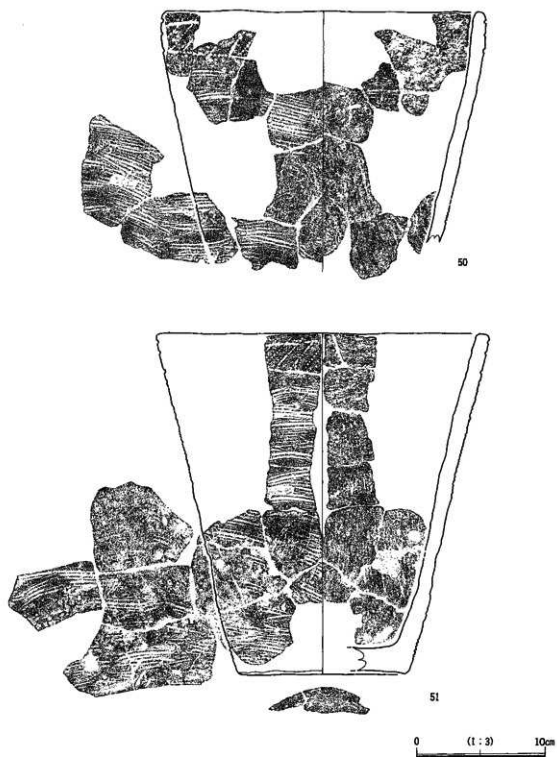
131～148は胴部外面に縦の貝殻条痕文を施している。口縁部は131の1点のみである。131は円筒形の胴部に口縁がわずかに開き、口唇部は外傾する。口縁端部は、並行する横位の貝殻刺突文(2条)の間に、斜位の貝殻刺突文を施文する。138には瘤状突起が見られる。143は特徴的な条痕文で、幅が広く浅い。146～148は同一個体で底部から胴部まで残る。底部外面は右へのケズリで整える。

149～155は口縁端部に瘤状突起をもつ。山形に突出するものから瘤状に影らむものまで、それぞれ異なる。152の外面には、ヘラ状工具による刺突が見られる。

156～160は胴部外面に斜位の貝殻条痕文を、161～168は格子状の貝殻条痕文を施す。169・170の文様



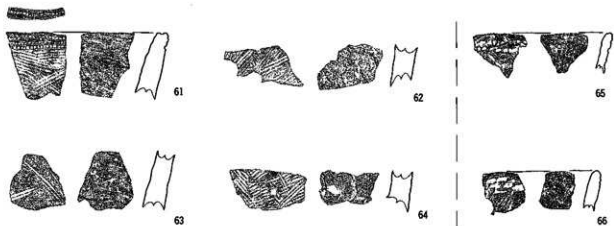
图VI.53 土器3類(2)



図VI.54 土器3類（3）

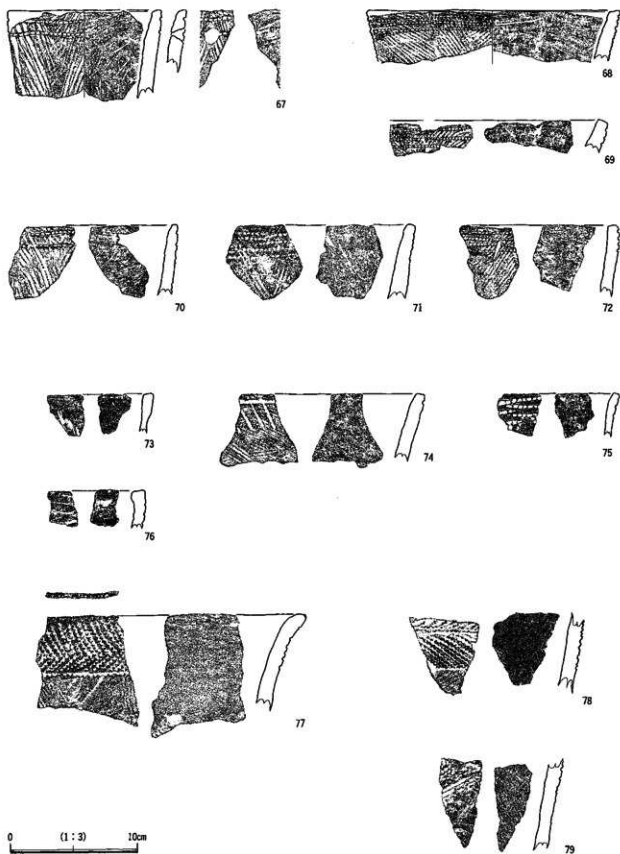
は貝殻条痕文と貝殻刺突文で構成される。

底部171は、一部を残して縁辺を打ち欠くことから、土製円板の可能性も考えられる。

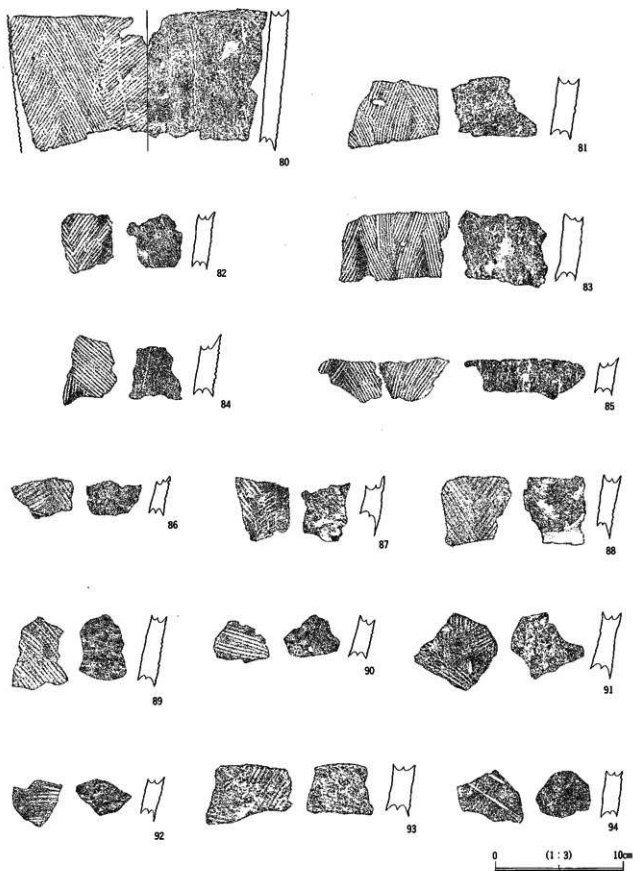


0 (1:3) 10cm

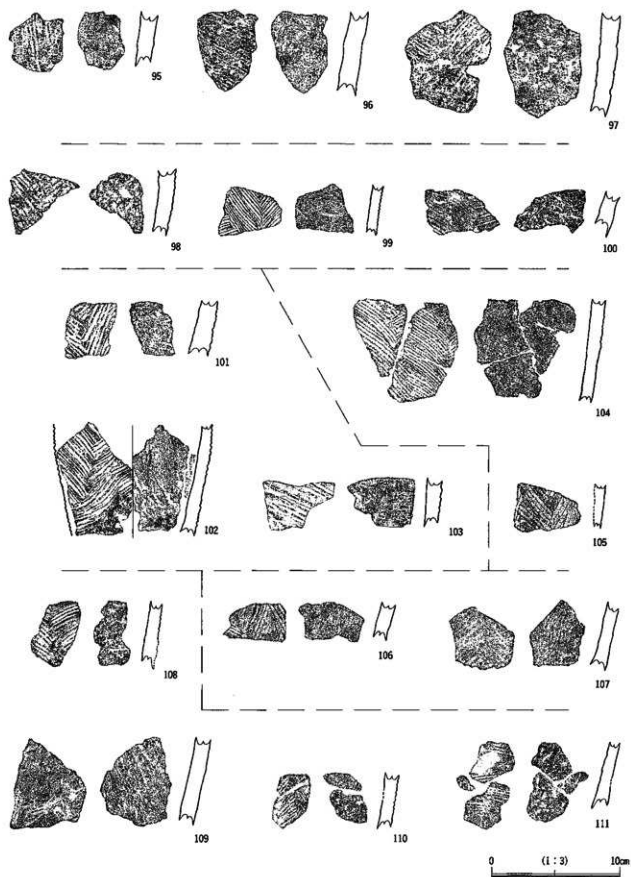
图VI.55 土器3類(4)



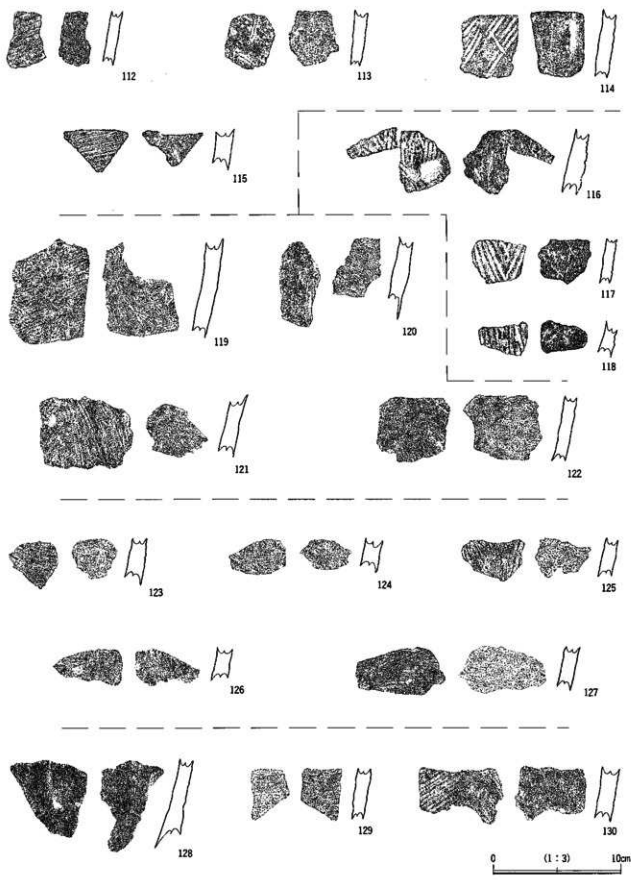
図VI.56 土器3類(5)



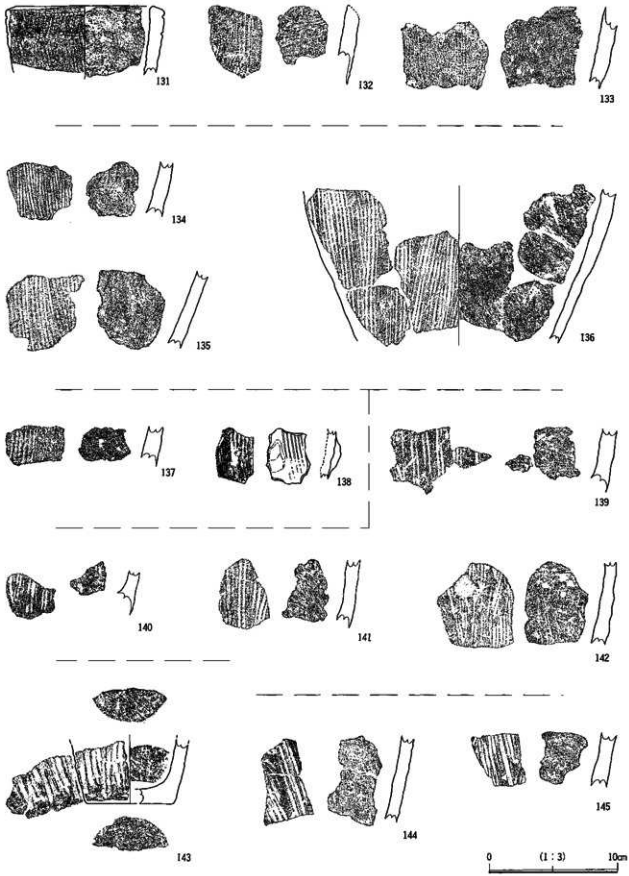
图VI.57 土器3類(6)



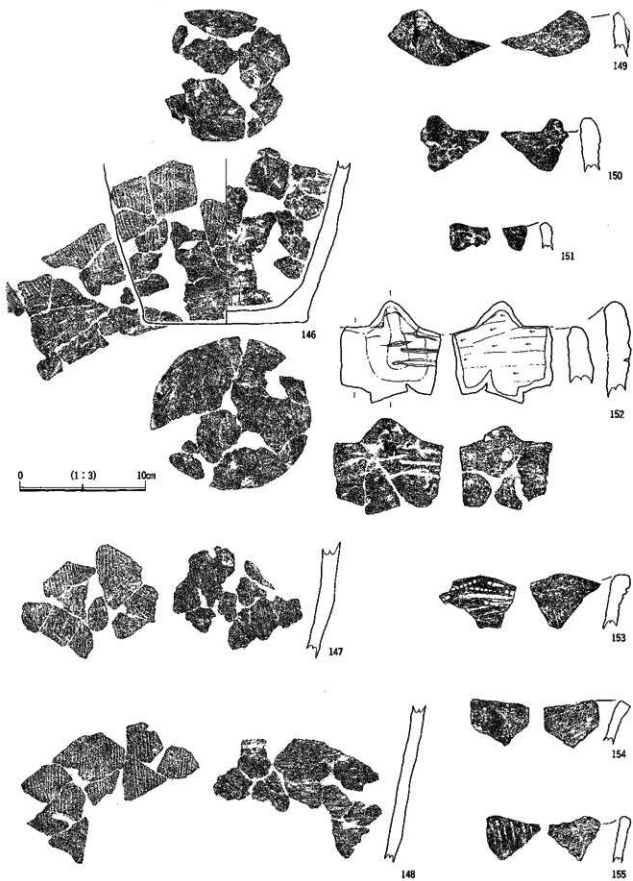
図VI.58 土器3類(7)



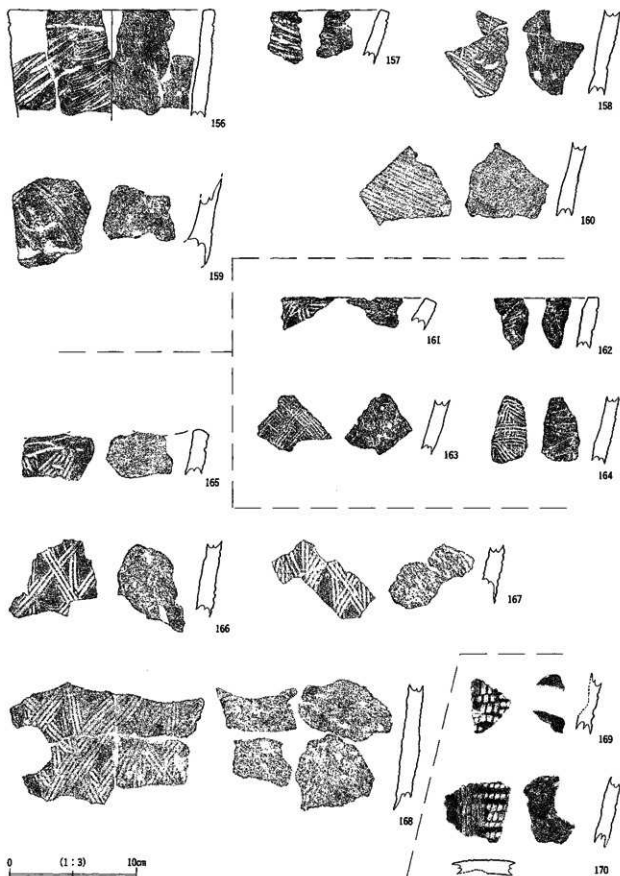
图VI.59 土器3類(8)



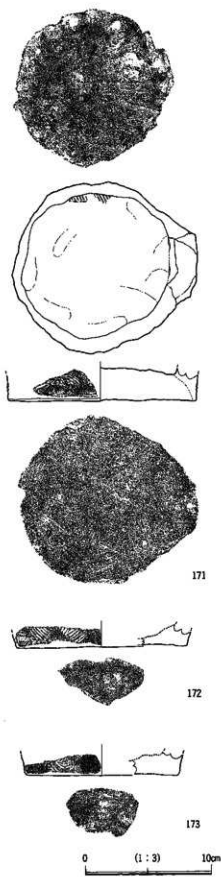
図VI.60 土器3類(9)



图VI.61 土器3類(10)



図VI.62 土器3類(11)



図Ⅳ.63 土器3類 (12)

土器4類

胴部外面に刺突文を施したものを4類としている。刺突文には貝殻刺突文と貝殻腹縁文があり、羽状に刺突するものが多い。器形は口縁部の形態が3つある。口縁部がやや内湾して口唇部が内傾するもの、わずかに外に開く口縁に平らな口唇部をもつもの、外に開いた口縁に外傾する口唇部をもつものがある。混和材は長石を多く含むものが多い。

174～179は内傾する口唇部をもつ。外面には2条の沈線や斜位・羽状の貝殻刺突文を施す。176には円形の焼成後の穿孔がある。補修孔と考えられる。

180～186は直線的な貝殻刺突文を羽状に施す。色調・胎土が特徴的である。色調は器面が淡黄色(2.5Y8/3)、断面が黄灰色(2.5Y4/1)を呈する。胎土は焼成が甘いのか非常に軟質である。他の遺跡においても小破片が確認されている。

189～191はやや外に開いた口縁に口唇部が外傾する。外面に小さい円形の貝殻刺突文を施す。192～196も類似する。

197・198は小型である。底面には5mm大の種子状の圧痕が見られる。

199～213は口縁部である。様々な形態・文様が見られる。210は小型の器と考えられ、口縁端部の内面を横の貝殻条痕文を施す。

214～268は胴部である。貝殻刺突文や貝殻腹縁刺突文を縦横の羽状に施す。内面をミガキで整えるものが多い。266～268は貝殻条痕文と貝殻腹縁刺突文とで文様が構成される。

269～273は底部である。器面をミガキで整えるものが多い。

316～322は薄い器壁をもち、口縁がやや開いて真っ直ぐ延びる。瘤状突起316も見られる。

土器5類

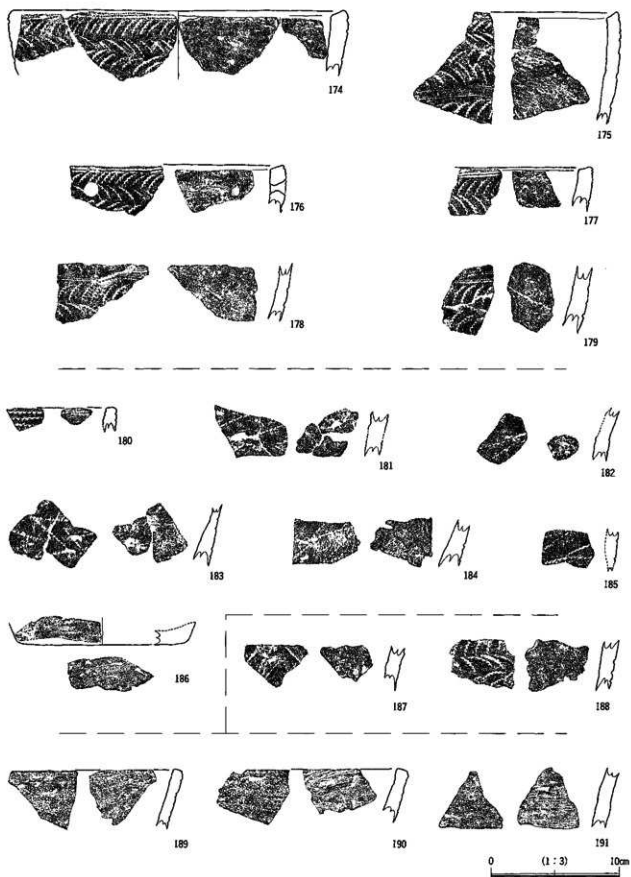
胴部外面に「ハ」状の刺突文を繰り返し施すものを5類としている。器形は、底部から開いてまっすぐ延びる。口唇部がやや内傾する。器面調整は、内面全体を丁寧なミガキで調整する。

274～276はヘラ状工具で「ハ」字状に刺突する。未貫通の円形の穿孔がある。穿孔は焼成後に施そうとしている。

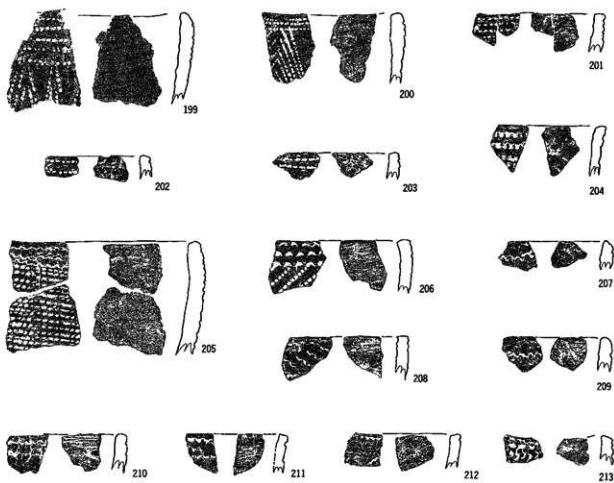
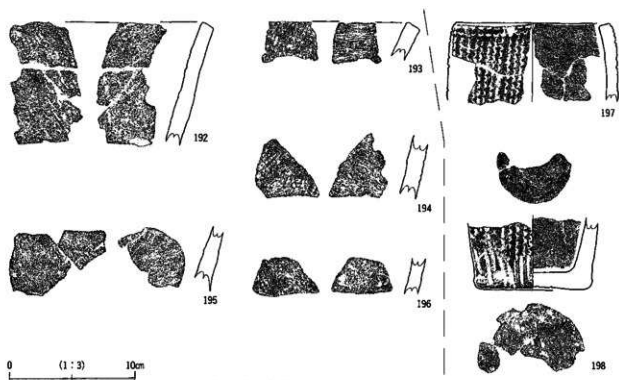
277～283は刺突文が弧を描くことから、二枚貝の腹縁部を用いて刺突を施していると考えられる。また、「ハ」字状の文様は開いた二枚貝の腹縁部を横にして刺突すると同様のものとなる。

土器6類

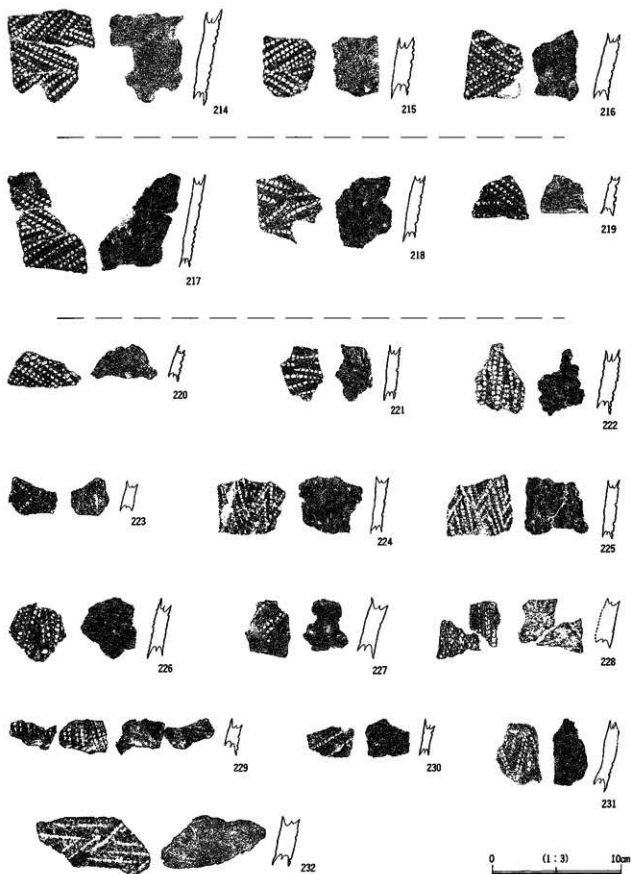
胴部外面に貝殻腹縁などを用いて、短沈線文を施すものを6類としている。器形は、底部から開いてまっすぐ延びると考えられる。口縁端部はやや内湾して、口唇部が内傾する。器面調整は、内面全体を丁寧なミガキで調整するものが多い。胎土に多くの混和材を含み、砂粒の粒度は1mm大とやや大きい。



図VI.64 土器4類(1)



图VI.65 土器4類(2)



図VI.66 土器4類(3)

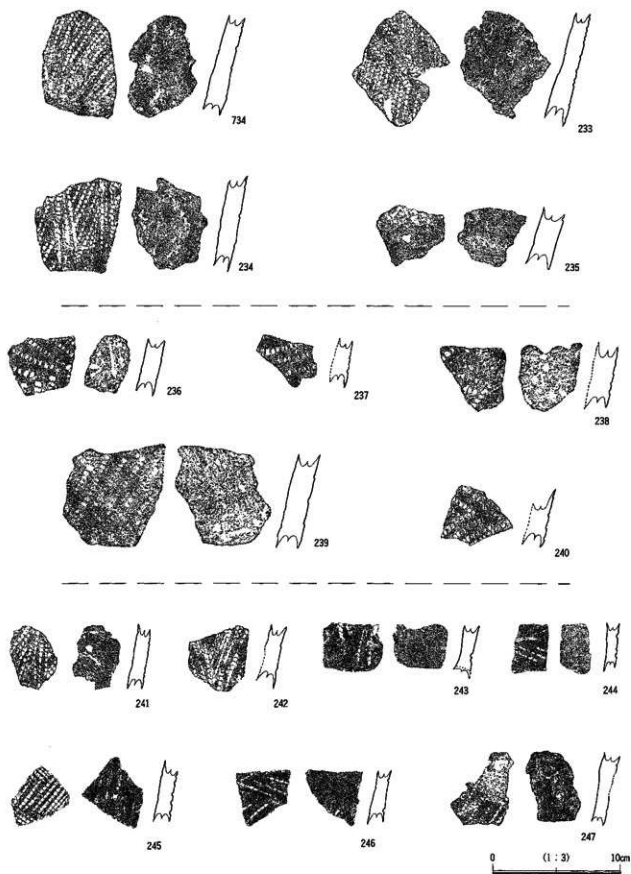
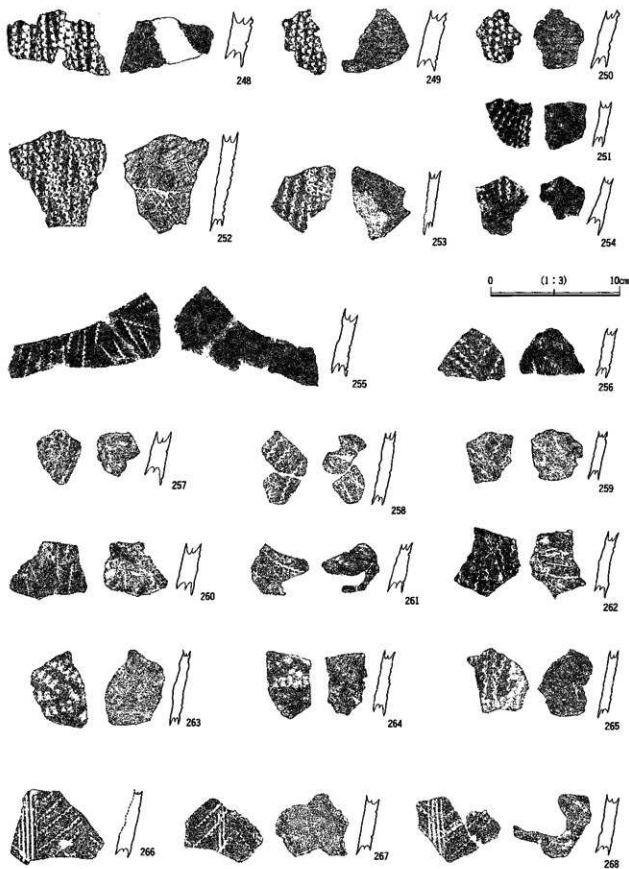
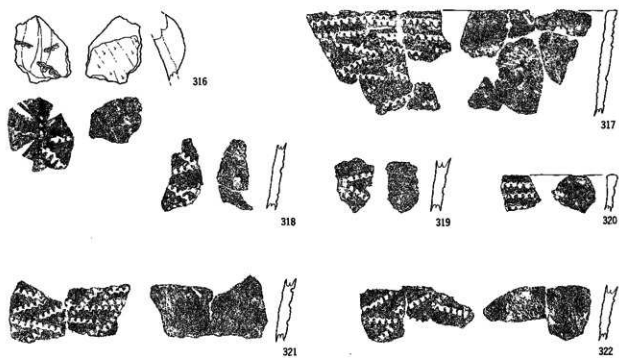


图 VI.67 土器 4 類 (4)



図VI.68 土器4類(5)

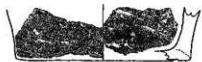


269



270

0 (1:3) 10cm



271

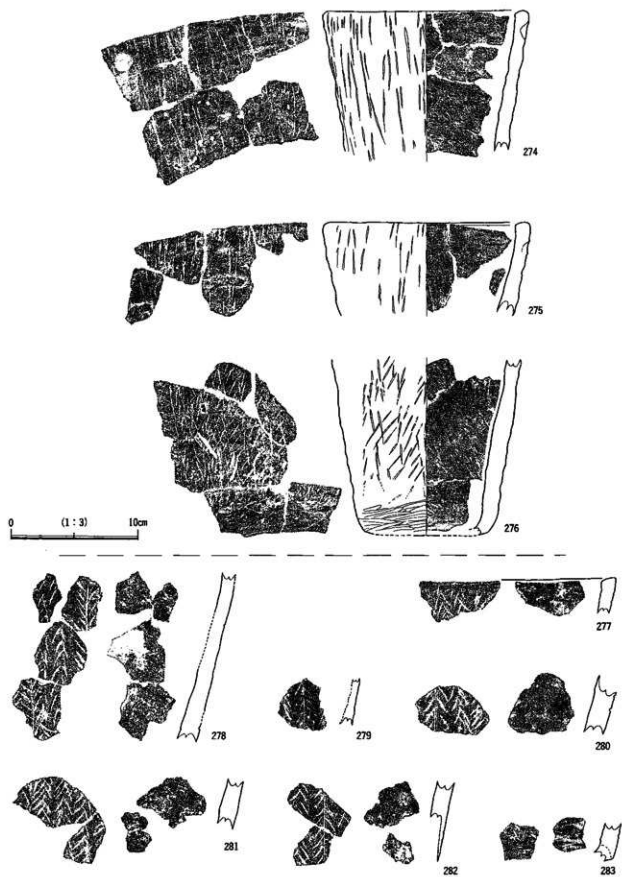


272

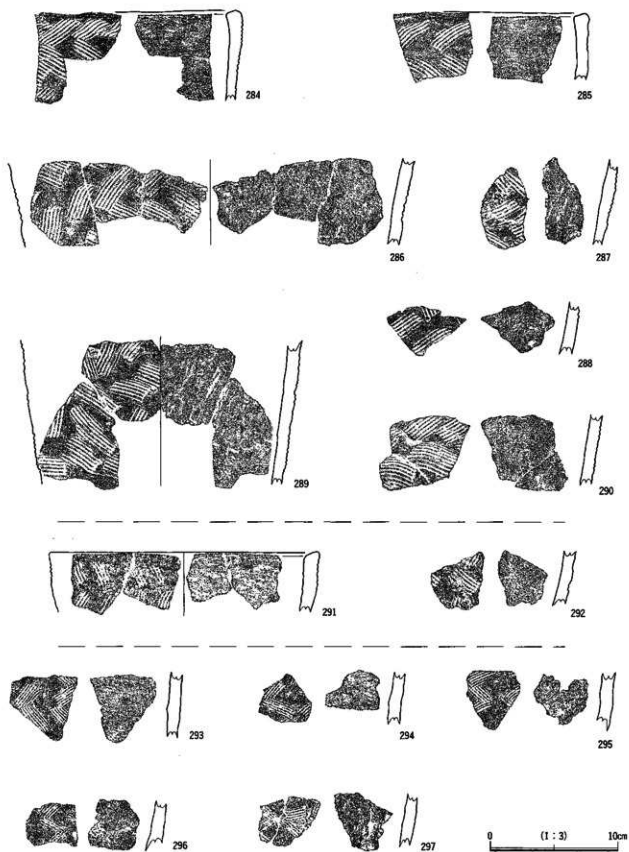


273

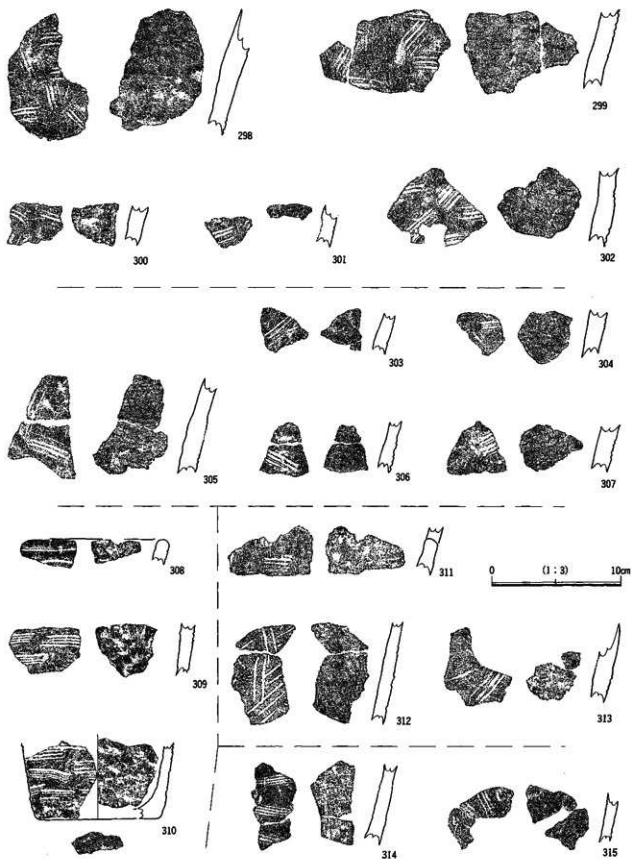
图VI.69 土器4類(6)



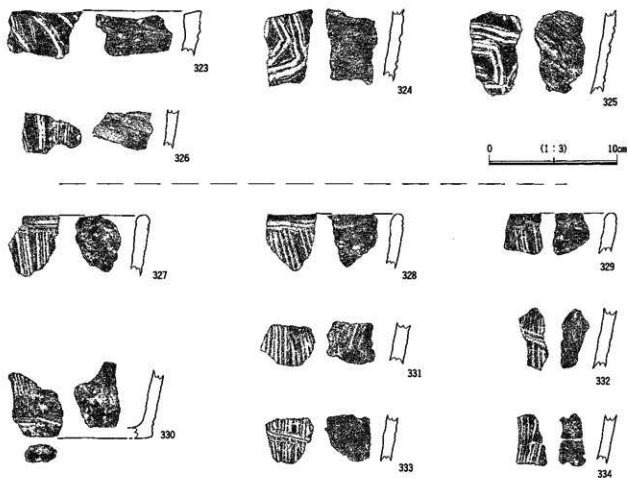
図VI.70 土器5類



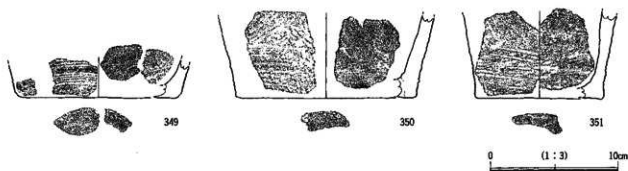
圖VI.71 土器6類(1)



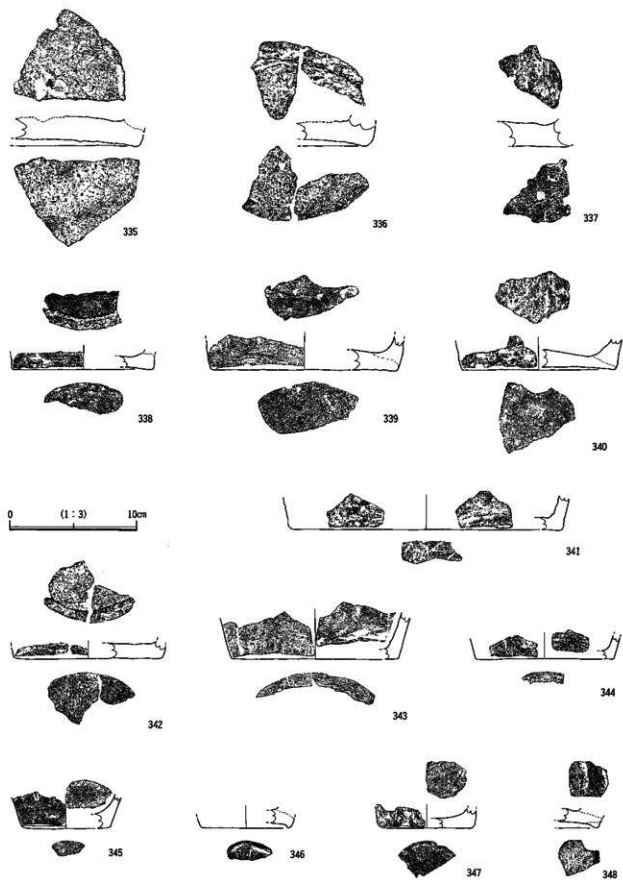
図VI.72 土器6類(2)



図VI.73 土器7類



図VI.74 土器1～7類の底部(1)



図VI.75 土器1～7類の底部（2）

284・285・291の口唇部は平坦な面をもって内傾する。

298～299の内面調整は上下で異なり、上は密なミガキを行うが、下はケズリ後にナデもしくは非常に疎のミガキで終える。

土器7類

胴部外面に、粗い沈線文で幾何学的な構図の文様を描くものを7類としている。器形は底部から開いてまっすぐ延びると考えられる。胎土に多くの混和材を含み、砂粒の粒度は1～3mm大と大きい。内面の口縁端部と口唇部はミガキで調整する。

土器1～7類の底部

335～351は底部で、土器1～7類のいずれかに分類できると考えられる。底部径が10cmを超えるものが多いが、10cm未満のもの(345～348)も存在する。346・348は接合痕から割れており、円盤状の粘土の上に粘土紐を積み上げている。また、底面には高台状のものが巡り、上底状となる。9類の可能性も考えられる。

土器8類

胴部外面に押型文を施すものを8類としている。押型文にはおもに山形文と楕円形文が見られ、一部には施文原体の不明な押型文も存在する。施文原体は枝などであろうか。山形文も楕円形文も個別に数種類が存在する。器形は底部から開いてまっすぐ延びる。器壁は厚く、焼成がやや軟い。そのためかやや脆い。混和材の粒度は1～2mm大とやや大きく、含有する量も多い。金色の雲母を多く含むものが多い。器面調整はやや粗く、内面をミガキやナデで整える。ミガキは幅が広くて粗い。

360の外面の山形押型文は、一定間隔をあけて、同一方向に捺糸文が入る。施文具に巻き付けたものの痕跡であろうか。また、焼成後に円形の穿孔をあけており、補修孔と考えられる。

361・362・374は口唇部が内傾して、キザミや押型文を施す。375は口縁端部の内面にキザミを施す。

387～390と391の押型文は、枝回転文⁶の可能性が考えられる。

392・393は楕円形と言い難い押型文を横位に施す。393には焼成後に外面より縦長楕円の穿孔があげられる。補修孔と考えられる。

土器9類

胴部の外面に捺糸文を施すものとそれに器形などが類似するものを9類としている。器形は、脹らむ胴部に頸部が締り、口縁部が開く。底面は上底のものが多い。胴部の文様は捺糸文と沈線文で構成されるものが多く、口唇部に羽状ないし縦位のキザミをもつ。器面の調整は丁寧なものが多く、とくに内面は丁寧なミガキや器面が平滑になるナデを施す。器壁は薄く、器厚5mmのものも存在する。含まれる混和材も粒度が小さい。黒色砂粒を含むものが多い。

9類-1(411～501) 胴部の文様は、縦位の捺糸文後に横位の沈線文を巡らす。沈線文は数条を並行させる。多くは口唇部に斜位・縦位や羽状のキザミを施す。胴部の器面調整には縦方向と横方向のものがある。

9類-2(502～509) 口縁部の外面に沈線文を多用して文様を描く。胴部は不明である。

9類-3(484～487) 捺糸文の代わりに縄文を用いる。文様帯が沈線に挟まれる。

9類-4(515～586) 胴部が無文のものである。器面調整が他のものとやや異なり、ミガキを施すものが極めて少ない。小型の器種も存在する。

小型の器種528～532は極めて小さく、器形も変化に富む。528は口縁部が「へ」字状に折れ曲がり、端部にはキザミが施される。529は直立した口縁がわずかに開く。口縁端部の外面には浅いキザミを、

胴部の外面には横位の沈線文を施す。530は非常に薄い器壁をもつ。内外面は粗い横のナデで整える。口縁端部の内外面のみ丁寧な横のナデを施す。531は口縁端部がやや内湾する。532は底部で尖底になると考えられる。なお、522・528・531のやや軟質の赤褐色の胎土は、厚い器壁をもつものは右京西式などに多い。

533～537は類似するが、533・536・537の内外面は左へのケズリ後粗いナデで整える。534・535の内外面は左へのケズりで整え、外面のケズリは丁寧に施される。539～542も外面のケズリを残す。544～548は内外面を横のナデで整える。549以降は、内外面の器面調整を横ナデで整える。

底部587～594は底面がやや上底のものが多く、底面からの器壁の立ち上がりはいずれも外に開く。

土器10類

1～9類に当てはまらないものをすべて10類としている。出土量は極少量である。

10類-1 (595～605) 585～605はキザミをもった微隆帯文が外面に施される。器形は腹らむ胴部に締まった頸部をもち、そこから口縁部が開いて立ち上がる。口縁端部は内湾する。

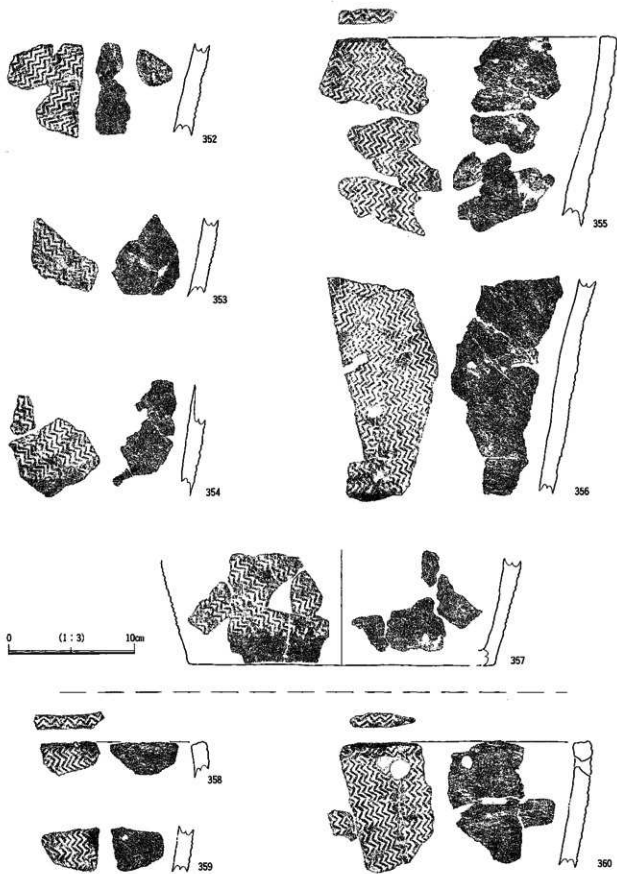
595～597は口唇部を横のナデ後、内外面の口縁端部との角に縦位のキザミを施す。外面側のキザミは長さ2mm×幅1.5mmと小さい。口縁端部の外面には円形の刺突文が巡り、口縁部はキザミをもった微隆帯文が削りだされる。598～601は微隆帯文が595～597よりやや大きい、それ以外は口縁端部の外面角の縦位キザミを除けば類似する。602～605には極めて小さな微隆帯文が施される。微隆帯文にはキザミを施す。

10類-2 (606～609) 606・609のキザミは幅広の浅いキザミを羽状に施す。指が施文原体と考えられる。

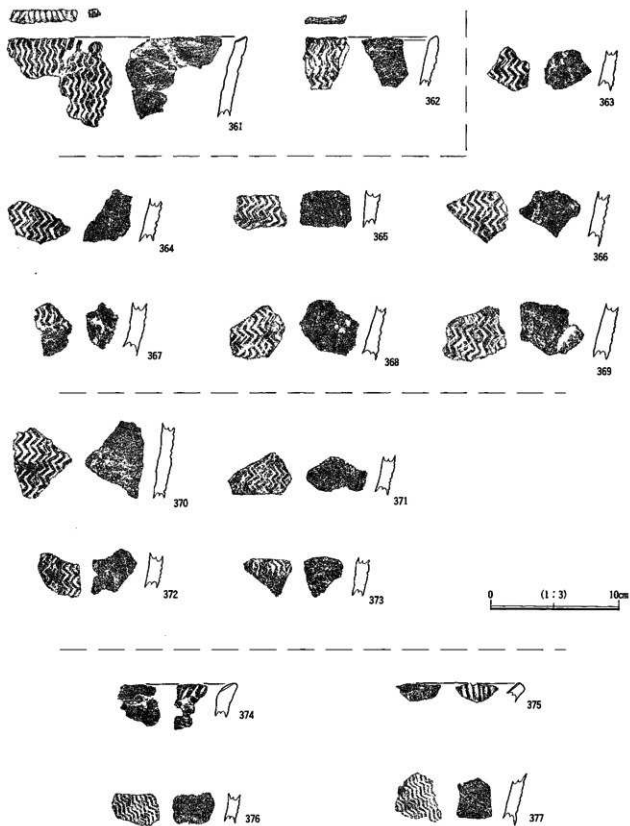
10類-3 (611～615) 611～615は外面に縄文を施す。

10類-4 (610・616) 610・616は外面に貝殻刺突文を施す。616は羽状に刺突を繰り返す。

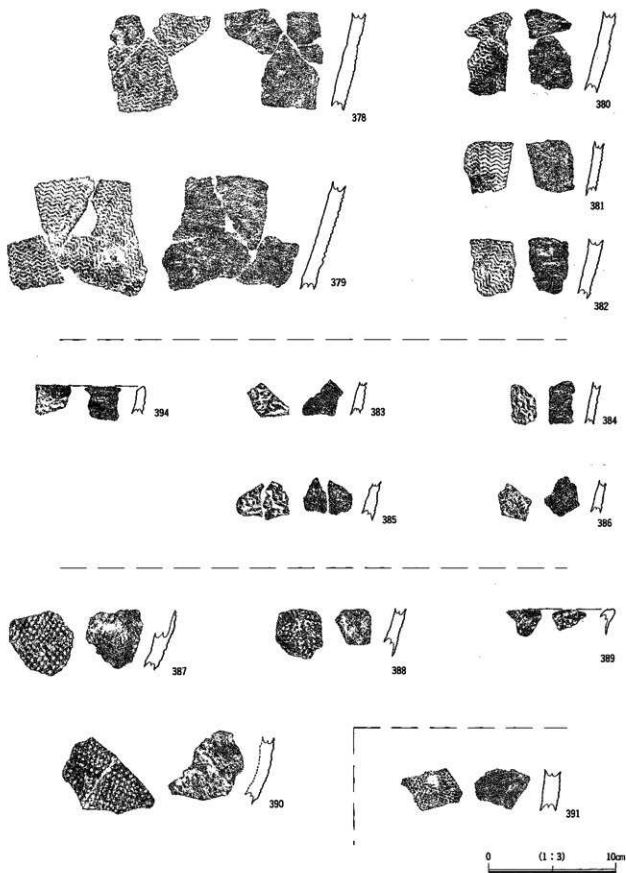
-
- 1 「一次焼成」は土器焼成に伴うもの、「二次焼成」は煮炊きなどによるものと仮定する。土器の器面に同じ高さで炭化物・煤の付着が見られない限り、二次焼成と断言できないと考えられる。
 - 2 収納箱の数を目安としている。そのため、少ないものと多いものとの差はグラフ以上に大きい。
 - 3 前迫亮一氏（鹿児島県立埋蔵文化財センター）にご教授頂いている。
 - 4 有明町野神所在の下堀遺跡、東郷志・松崎卓朗 2004 『浜場遺跡・下堀遺跡』有明町教育委員会を参照されたい。
 - 5 横手浩二郎氏（鹿児島県立埋蔵文化財センター）にご教授頂いている。



圖VI.76 土器8類(1)



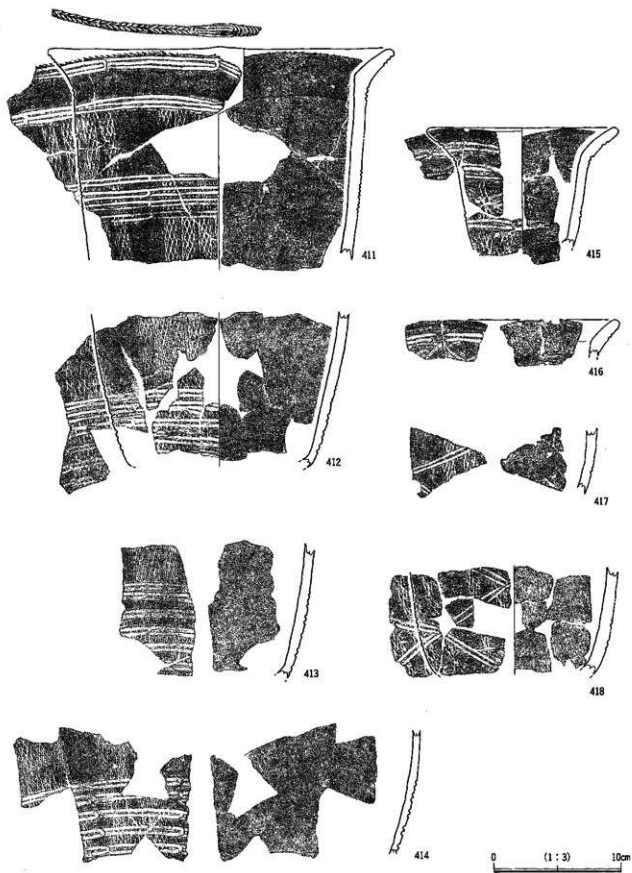
図VI.77 土器8類(2)



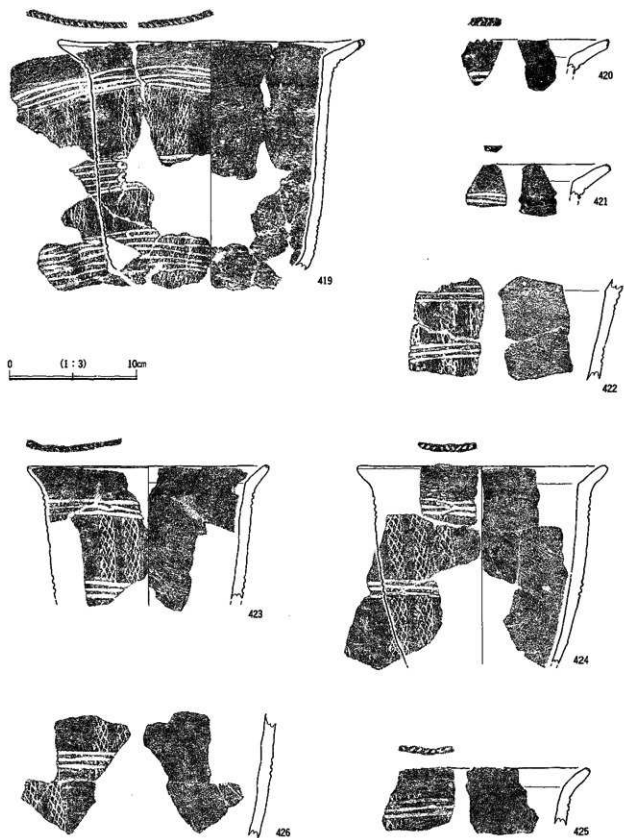
圖VI.78 土器8類(3)



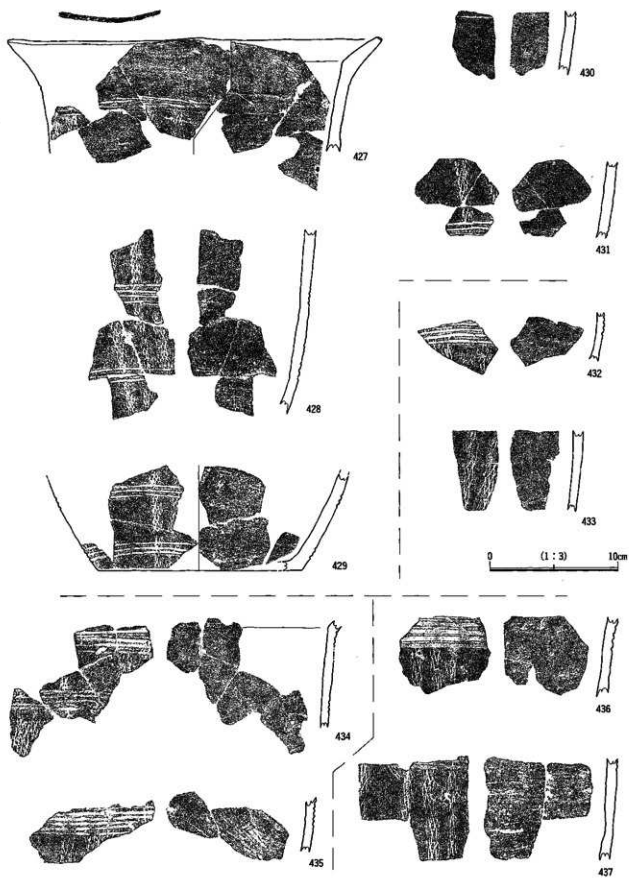
図VI.79 土器B類(4)



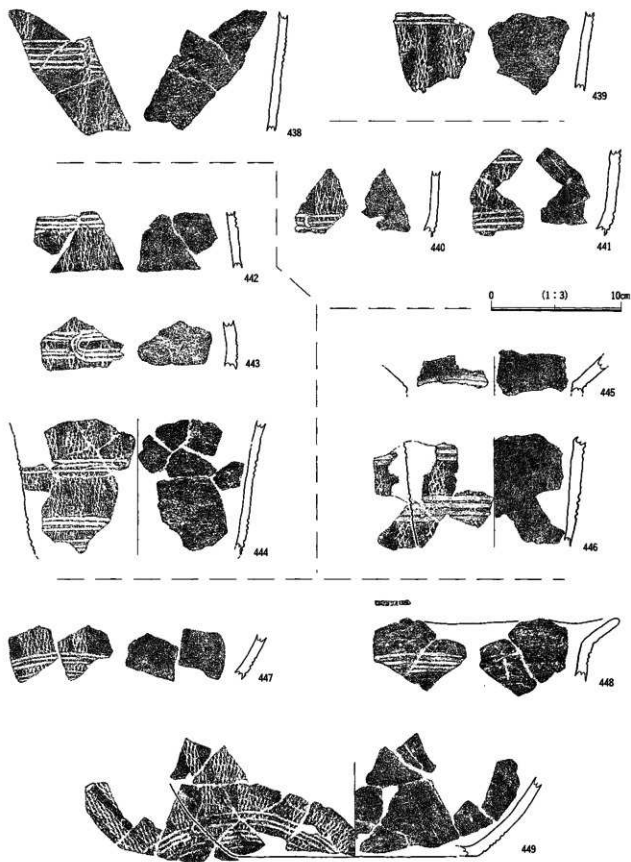
圖VI.80 土器9類(1)



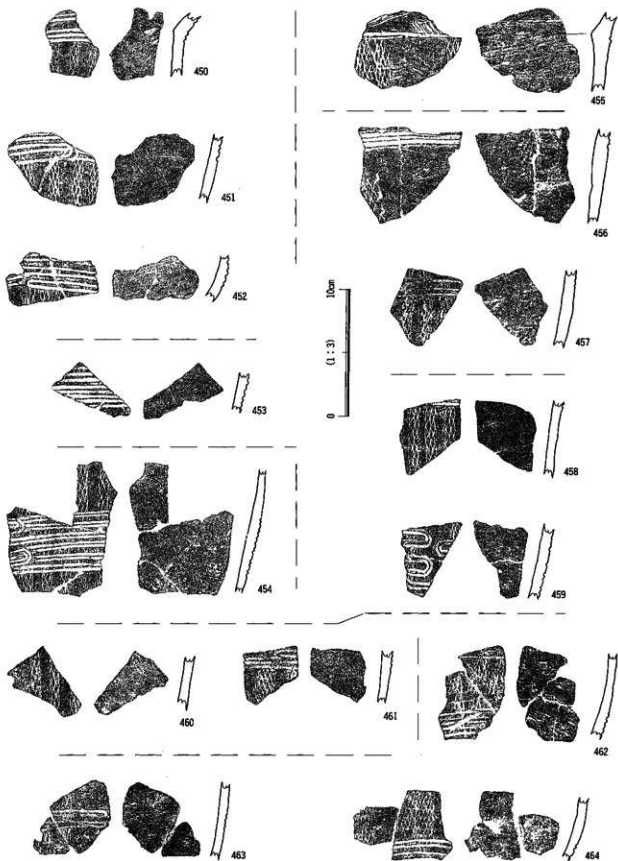
図VI.81 土器9類(2)



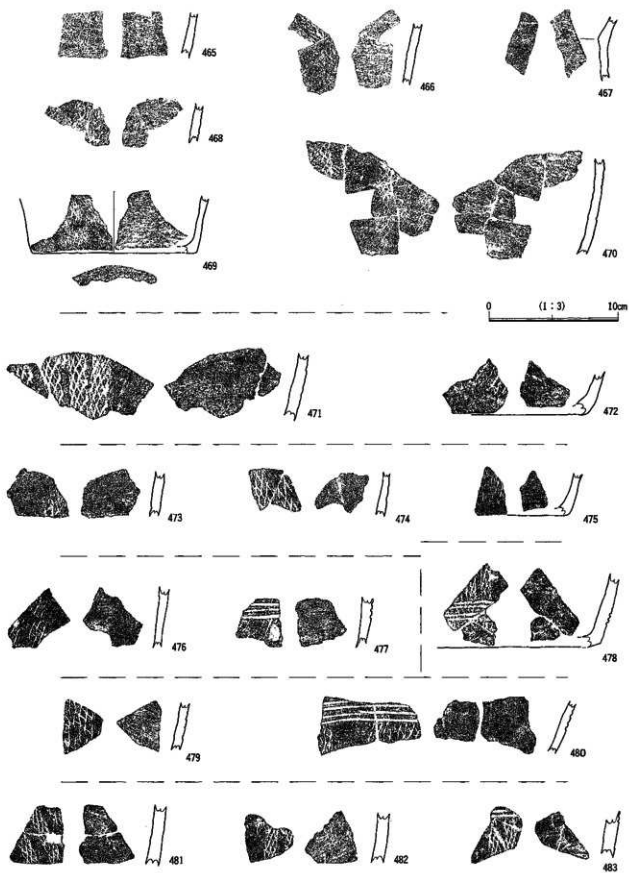
圖VI.82 土器9類(3)



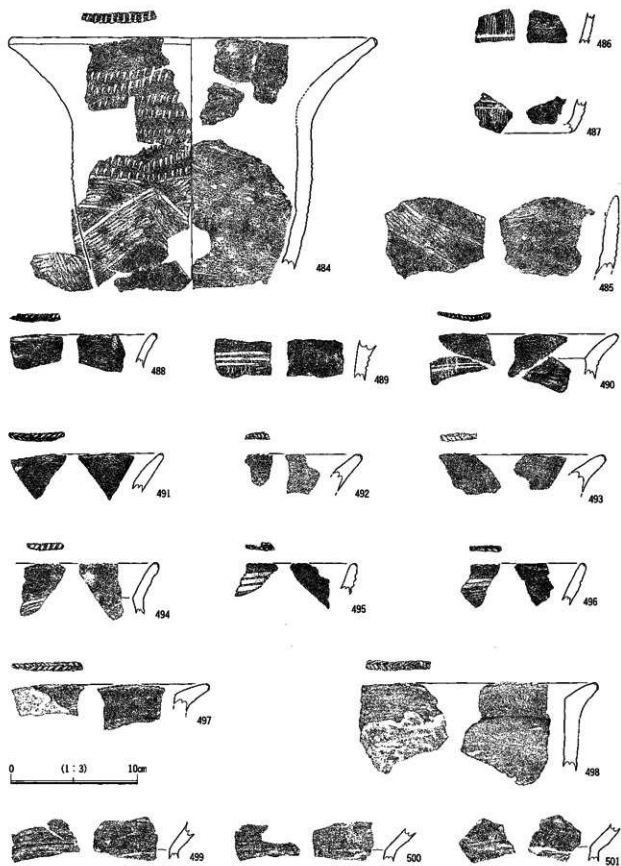
図VI.83 土器9類(4)



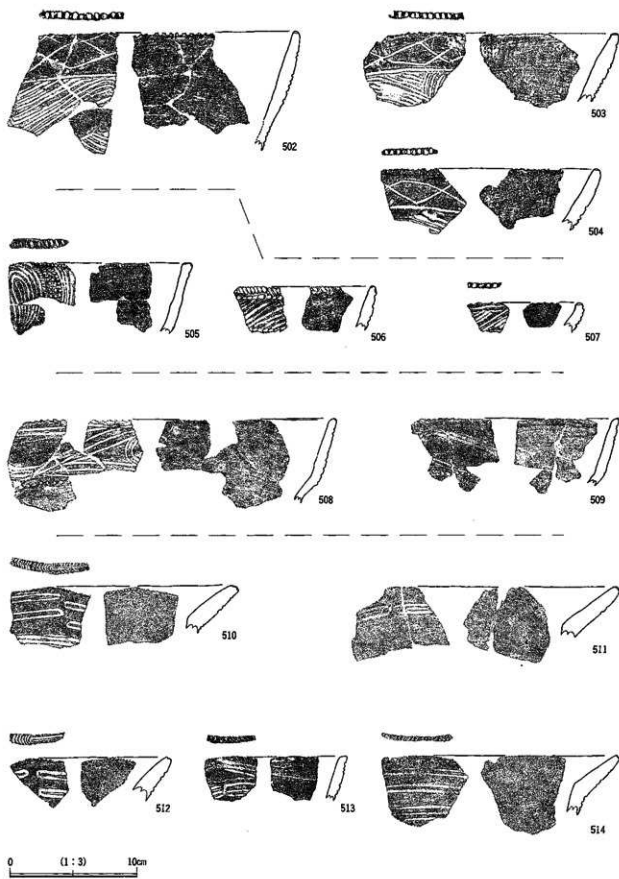
图VI.84 土器9類(5)



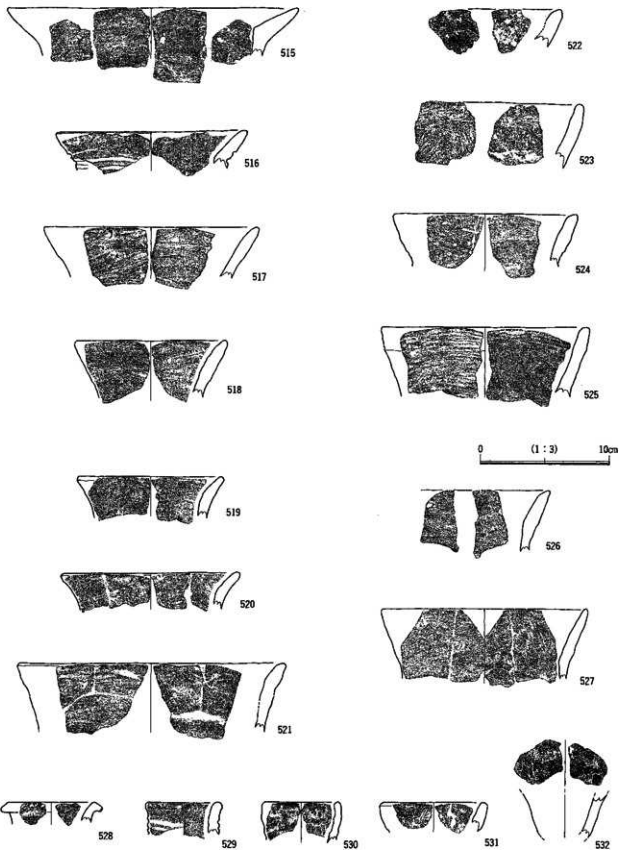
図Ⅵ.85 土器9類(6)



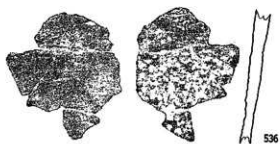
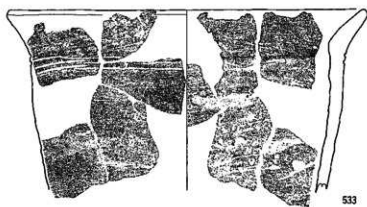
图VI.86 土器9類(7)



図VI.87 土器9類(8)

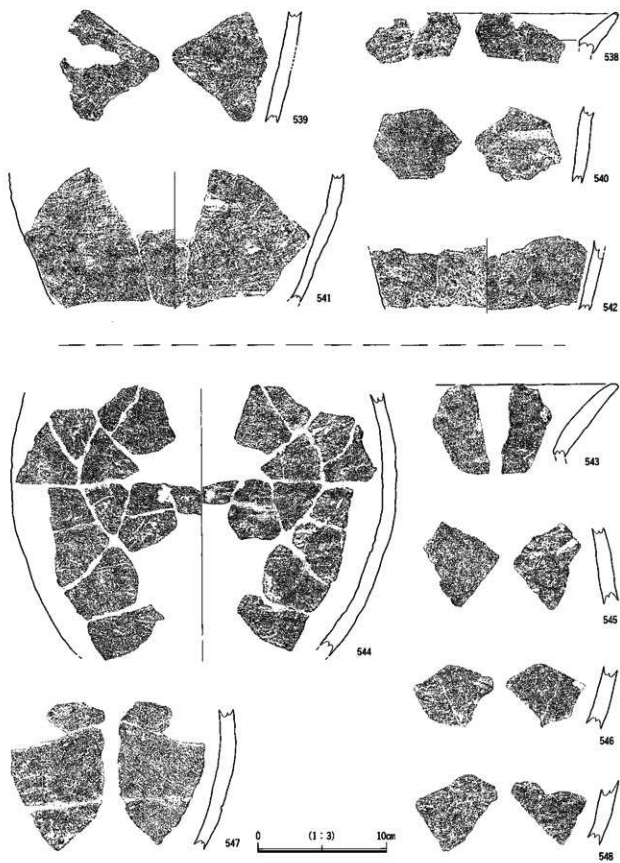


圖VI.88 土器9類(9)

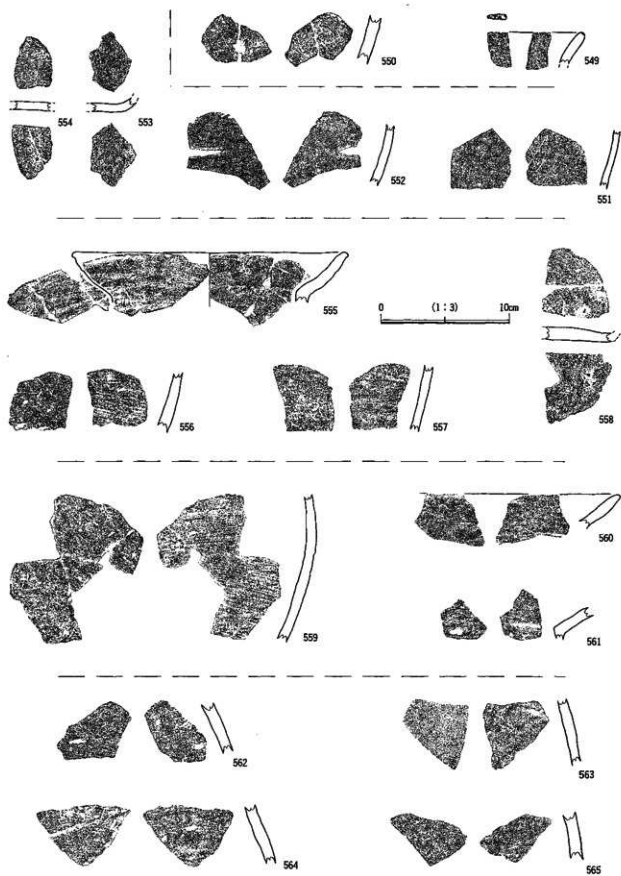


0 (1:3) 10cm

図VI.89 土器9類(10)



图VI.90 土器9類 (11)



図VI.91 土器9類 (12)

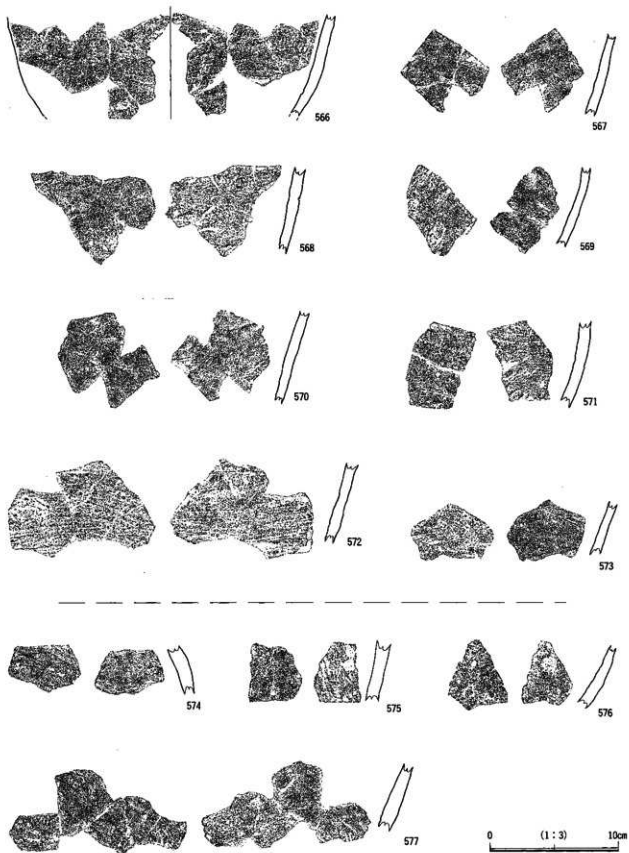
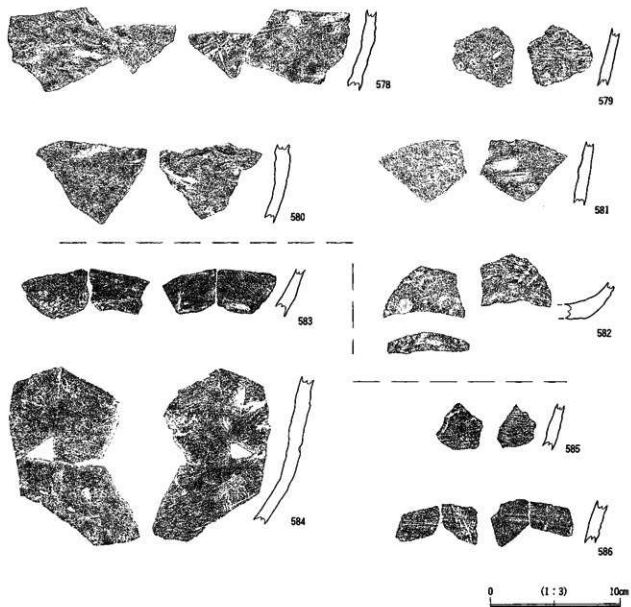
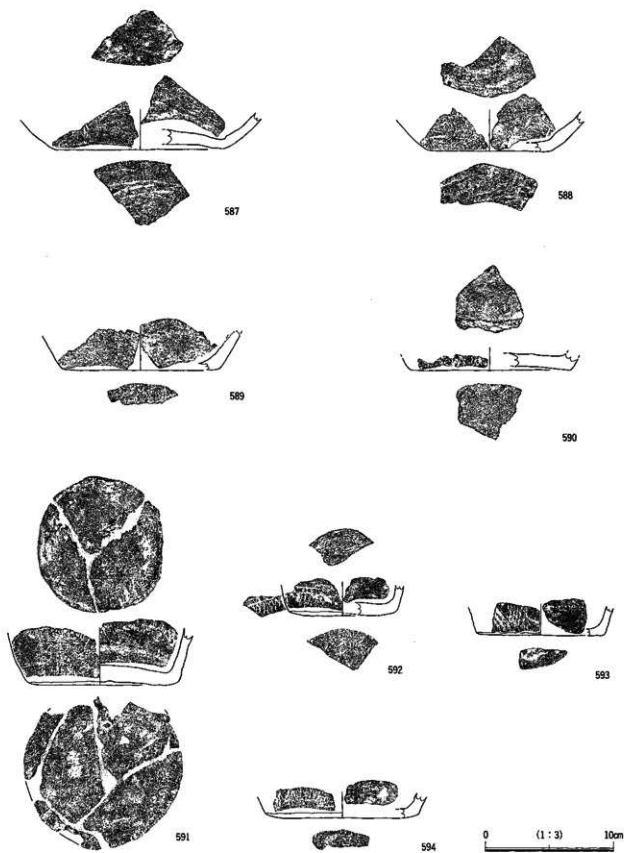


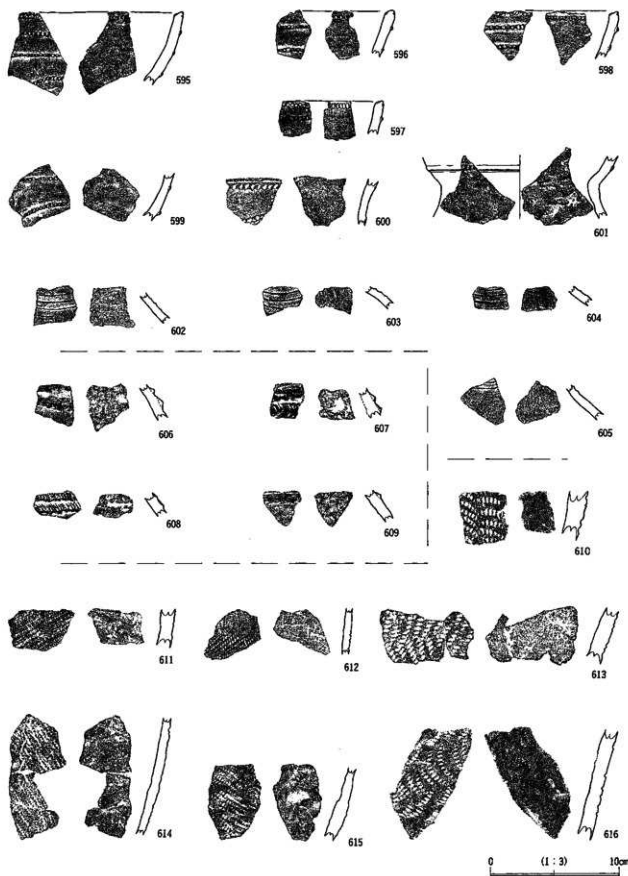
图 VI. 92 土器 9 類 (13)



図VI.93 土器9類 (14)



圖VI.94 土器9類(15)



図VI.95 土器10類

表 VI.06 土器の観察表

調査年度	調査地	遺物番号 (取り上げ)	器名	形状	色調		図面		図面		断面(μ)		備考				
					内面	外面	内面	外面	厚さ	口径	底径	高さ					
VI		21	4248	鉢形		にじみ色 7.5YR6/4	上へのケズリ線、縁のミダキ		54(100)の縁の反鼓線本文		1	0	0	0	同 一-器体か?		
		22	v. 490	鉢形					縁位のミダキが直る		1	0	0	0	同		
		23	v. 315	底形						44(100)の縁の反鼓線本文		1	0	0	0	同 一-器体か?	
		24	4652	鉢形		にじみ黄褐色 10YR5/3		上へのケズリ線、縦ないし斜めのナデ				1	0	0	0	同	
		25	4657	鉢形		にじみ色 7.5YR6/4		上へのケズリ		24(100)の縁の反鼓線本文		1	0	0	0	同 一-器体か? 器は内外面に磨ける	
		26	3714, 5233	鉢形								1	0	0	0	同	
		28	v. 38	口鉢形		青 7.5YR6/6	にじみ黄褐色 7.5YR6/4	左へのケズリ線、縁のミダキ		口唇部: 浅いきず? 口縁部: 斜めの反鼓線本文 縁部: 縁位の反鼓線本文 縁部: 縁位の反鼓線本文を刺す		1	0	0	0	0	同
		29	3653	口鉢形		にじみ黄褐色 10YR7/4	にじみ黄褐色 7.5YR7/4	右へのケズリ		口唇部: 浅いきず? 口縁部: 縁位の反鼓線本文の縁位以上直る。刺す 縁部: 縁位の反鼓線本文を刺す		1	0	0	0	0	同 一-器体か?
		30	4950	口鉢形								1	0	0	0	0	同 一-器体か? 器は内外面に磨ける
		VI + 50		31	v. 49	口鉢形							1	0	0	0	0
32	4771, 4547			口鉢形		にじみ黄褐色 7.5YR6/4	青 5YR6/6	口唇部: 縁のケズリ線、縁のミダキ 縁部: 上ないし上側の土へのケズリ線、中央部になないし斜めのミダキを施す		口唇部: 浅いきず? 口縁部: 縁位に上らる様に、刺すの反鼓線本文、刺すの反鼓線本文を刺す、刺すの反鼓線本文を刺す 縁部: 縁位の反鼓線本文		1	0	0	0	0	同 一-器体
33	4316, 4335, 4541			口鉢形								1	0	0	0	0	同
34	5003, 5083, 5212			口鉢形								1	0	0	0	0	同
35	3713			口鉢形								1	0	0	0	0	同
36	4279, 4223, 4250, 4302			鉢形								1	0	0	0	0	同
37	v. 528, v. 351, 4149			鉢形								1	0	0	0	0	同
38	4216, 4326, 4544			鉢形								1	0	0	0	0	同 一-器体か?
39	4355			底形								1	0	0	0	0	同
40	2086, 4649, 4966, 4975, 5255			口鉢形		にじみ黄褐色 10YR7/4	にじみ黄褐色 7.5YR6/4	口唇部: 縁のケズリ線、縁のミダキ 縁部: 上へのケズリ線、縁のミダキ		口唇部: 浅いきず? 口唇部: 縁位に上らる様に、刺すの反鼓線本文、刺すの反鼓線本文を刺す 縁部: 縁位の反鼓線本文		1	0	0	0	0	同 一-器体
43		41	4442, 4443, 4449, 4924, 4926, 4927, 5258, v. 349	鉢形							1	0	0	0	0	同	
		42	1362, 4561, v. 85, 101	鉢形							1	0	0	0	0	同	
		43	3697	鉢形							1	0	0	0	0	同	
		44	4842, 4979	鉢形							1	0	0	0	0	同	
		45	4977	鉢形							1	0	0	0	0	同	
		46	4979	鉢形							1	0	0	0	0	同	
		47	2910	鉢形							1	0	0	0	0	同	
		48	4029	鉢形							1	0	0	0	0	同	
		49	1361, v. 185	鉢形							1	0	0	0	0	同	
		50	4842	鉢形							1	0	0	0	0	同	
VI 50		51	2713, 2717, 2671, v. 350, 2598, 2602, 2605, 2606, 2618, 2621	口鉢形							1	0	0	0	0	同	
		52	4322	口鉢形		灰黄色 10YR8/2	にじみ黄褐色 10YR7/3	口唇部: 縁のケズリ線、縁のミダキ		口唇部: 1. 青み、平かな面をもつ 口唇部: 2. 縁の反鼓線本文が直る、と縁は縁に直る、下は口唇部に傾きをもつ 縁部: 縁位の反鼓線本文		1	0	0	0	0	同
		53	4642	口鉢形								1	0	0	0	0	同
		54	3932	鉢形								1	0	0	0	0	同
		55	4956	鉢形								1	0	0	0	0	同
		56	v. 258	鉢形								1	0	0	0	0	同
		57	1547, 4254	口鉢形		にじみ黄褐色 10YR7/4	にじみ黄褐色 10YR7/3	口唇部: 縁のケズリ線、縁のミダキ		口唇部: 縁のケズリ線、縁のミダキをもつ 口唇部: 2. 縁の反鼓線本文が直る、と縁は縁に直る、下は口唇部に傾きをもつ 縁部: 縁位の反鼓線本文		1	0	0	0	0	同
		58	5011, 5013, 5041	口鉢形								1	0	0	0	0	同
		59	4897	口鉢形								1	0	0	0	0	同
		60	794, 4368	口鉢形								1	0	0	0	0	同
VI 50		61	4798	口鉢形		にじみ黄褐色 10YR7/4	にじみ黄褐色 10YR7/3	口唇部: 縁のケズリ線、縁のミダキ		口唇部: 縁のケズリ線、縁のミダキをもつ 口唇部: 2. 縁の反鼓線本文が直る、と縁は縁に直る、下は口唇部に傾きをもつ 縁部: 縁位の反鼓線本文		1	0	0	0	0	同
		62	4462	鉢形								1	0	0	0	0	同
		63	4574	鉢形								1	0	0	0	0	同
		64	5014	鉢形								1	0	0	0	0	同
		65	v. 2617	口鉢形		にじみ黄褐色 10YR7/4	褐色 3.5YR4/2	口唇部: 縁のケズリ線、縁のミダキ		口唇部: 縁のケズリ線、縁のミダキをもつ 口唇部: 2. 縁の反鼓線本文が直る、と縁は縁に直る、下は口唇部に傾きをもつ 縁部: 縁位の反鼓線本文		1	0	0	0	0	同
		66	4653	口鉢形								1	0	0	0	0	同
		67	2150	口鉢形		にじみ黄褐色 10YR6/5	にじみ黄褐色 7.5YR6/4	口唇部: 縁のケズリ線、縁のミダキ		口唇部: 1. 青み、平かな面をもつ 口唇部: 2. 縁の反鼓線本文が直る、と縁は縁に直る、下は口唇部に傾きをもつ 縁部: 縁位の反鼓線本文		1	0	0	0	0	同
		68	4113, 4177	口鉢形		にじみ黄褐色 10YR6/5	にじみ黄褐色 7.5YR6/4	口唇部: 縁のケズリ線、縁のミダキ		口唇部: 縁のケズリ線、縁のミダキをもつ 口唇部: 2. 縁の反鼓線本文が直る、と縁は縁に直る、下は口唇部に傾きをもつ 縁部: 縁位の反鼓線本文		1	0	0	0	0	同
		69	5974, 5220	口鉢形		にじみ黄褐色 7.5YR6/4		口唇部: 縁のケズリ線、縁のミダキ		口唇部: 縁のケズリ線、縁のミダキをもつ 口唇部: 2. 縁の反鼓線本文が直る、と縁は縁に直る、下は口唇部に傾きをもつ 縁部: 縁位の反鼓線本文		1	0	0	0	0	同
		70	v. 3630	口鉢形		にじみ黄褐色 10YR6/5	にじみ黄褐色 10YR7/4	口唇部: 縁のケズリ線、縁のミダキ		口唇部: 縁のケズリ線、縁のミダキをもつ 口唇部: 2. 縁の反鼓線本文が直る、と縁は縁に直る、下は口唇部に傾きをもつ 縁部: 縁位の反鼓線本文		1	0	0	0	0	同

123	5045	印刷	にのみ裏面	にのみ裏面	上もし(は左端の上へのナズリ)	縁付の頁数表紙	1	0	0	0	0	0	3階-3	同一部外?外装は茶色化、内装は茶色化する	
124	4426	印刷	10YR/3	10YR/4											
125	4427	印刷													
126	3947	印刷													
127	4134	印刷													
128	vi. 294, 296, 476	印刷	にのみ裏面	10YR/4	10YR/4	上へのナズリ	縁付の頁数表紙	1	0	0	0	0	3階-3	縁部+縁部	
129	4171	印刷	にのみ裏面	10YR/4	10YR/4	上へのナズリ	縁付の頁数表紙	1	0	0	0	0	3階-2	縁部+縁部	
130	4817	印刷	にのみ裏面	10YR/4	10YR/4	上へのナズリ	縁付の頁数表紙	1	0	0	0	0	3階-2	縁部+縁部	
131	4304	印刷	にのみ裏面	10YR/4	10YR/4	上へのナズリ	縁付の頁数表紙	1	0	0	0	0	3階-2	縁部+縁部	
132	4725	印刷	にのみ裏面	10YR/4	10YR/4	扉の厚み(幅)が広い(3mm)	縁の頁数表紙	1	0	0	0	0	3階-2	扉の上縁部が茶色を帯び、二次酸化によるものか	
133	4310	印刷	にのみ裏面	10YR/4	10YR/4										
134	4980	印刷	にのみ裏面	10YR/4	10YR/4	扉部+扉部の上へのナズリ後、扉部+扉部の上へのナズリ後、扉部+扉部の上へのナズリ後、扉部+扉部の上へのナズリ後	縁の頁数表紙	1	0	0	0	0	3階-3	内装に茶色化、茶色化や黄の付着する	
135	4032	印刷													
136	2829, 2837, 2860	印刷													
137	2781	印刷	10YR/4	10YR/4	扉の厚み(幅)が広い(3mm)	縁の頁数表紙	1	0	0	0	0	0	3階-3	扉部+扉部	
138	3834	印刷	にのみ裏面	10YR/4	10YR/4	上へのナズリ	縁の頁数表紙	1	0	0	0	0	3階-3	扉部+扉部	
139	2053, 2054	印刷	にのみ裏面	10YR/4	10YR/4	上へのナズリ	縁の頁数表紙	1	0	0	0	0	3階-3	扉部+扉部	
140	2050	印刷	にのみ裏面	10YR/4	10YR/4	上へのナズリ	縁の頁数表紙	1	0	0	0	0	3階-3	扉部+扉部	
141	2051	印刷	にのみ裏面	10YR/4	10YR/4	上へのナズリ	縁の頁数表紙	1	0	0	0	0	3階-3	扉部+扉部	
142	2052	印刷	にのみ裏面	10YR/4	10YR/4	上へのナズリ	縁の頁数表紙	1	0	0	0	0	3階-3	扉部+扉部	
143	2053	印刷	にのみ裏面	10YR/4	10YR/4	上へのナズリ	縁の頁数表紙	1	0	0	0	0	3階-3	扉部+扉部	
144	2054	印刷	にのみ裏面	10YR/4	10YR/4	上へのナズリ	縁の頁数表紙	1	0	0	0	0	3階-3	扉部+扉部	
145	4896	印刷	2.5YR/3	2.5YR/3											
146	1646, 1702, 1713, 1711, 1716, 1725, 1731, 1733, 1733, 1737, 1739, 1820, 2258, 2387, 2392, 2394, 2398, 2399, 2404, 2405, 2407, 2414, 2429, 2430, 2431, 2432	印刷	にのみ裏面	10YR/4	10YR/4	扉部+扉部の上へのナズリ後、扉部+扉部の上へのナズリ後、扉部+扉部の上へのナズリ後、扉部+扉部の上へのナズリ後	縁の頁数表紙	1	0	0	0	0	0	3階-3	扉部+扉部
147	1646, 1702, 1713, 1711, 1716, 1725, 1731, 1733, 1733, 1737, 1739, 1820, 2258, 2387, 2392, 2394, 2398, 2399, 2404, 2405, 2407, 2414, 2429, 2430, 2431, 2432	印刷	にのみ裏面	10YR/4	10YR/4	扉部+扉部の上へのナズリ後、扉部+扉部の上へのナズリ後、扉部+扉部の上へのナズリ後、扉部+扉部の上へのナズリ後	縁の頁数表紙	1	0	0	0	0	0	3階-3	扉部+扉部
148	1646, 1702, 1713, 1711, 1716, 1725, 1731, 1733, 1733, 1737, 1739, 1820, 2258, 2387, 2392, 2394, 2398, 2399, 2404, 2405, 2407, 2414, 2429, 2430, 2431, 2432	印刷	にのみ裏面	10YR/4	10YR/4	扉部+扉部の上へのナズリ後、扉部+扉部の上へのナズリ後、扉部+扉部の上へのナズリ後、扉部+扉部の上へのナズリ後	縁の頁数表紙	1	0	0	0	0	0	3階-3	扉部+扉部
149	3426	印刷	にのみ裏面	10YR/4	10YR/4	上へのナズリ	縁の頁数表紙	1	0	0	0	0	3階-3	扉部+扉部	
150	1641	印刷	にのみ裏面	10YR/4	10YR/4	上へのナズリ	縁の頁数表紙	1	0	0	0	0	3階-3	扉部+扉部	
151	8225	印刷	にのみ裏面	10YR/4	10YR/4	上へのナズリ	縁の頁数表紙	1	0	0	0	0	3階-3	扉部+扉部	
152	4973	印刷	にのみ裏面	10YR/4	10YR/4	上へのナズリ	縁の頁数表紙	1	0	0	0	0	3階-3	扉部+扉部	
153	3374	印刷	にのみ裏面	10YR/4	10YR/4	上へのナズリ	縁の頁数表紙	1	0	0	0	0	3階-3	扉部+扉部	
154	3489	印刷	にのみ裏面	10YR/4	10YR/4	上へのナズリ	縁の頁数表紙	1	0	0	0	0	3階-3	扉部+扉部	
155	3381	印刷	にのみ裏面	10YR/4	10YR/4	上へのナズリ	縁の頁数表紙	1	0	0	0	0	3階-3	扉部+扉部	
156	3344, 4423, 5223	印刷	にのみ裏面	10YR/4	10YR/4	上へのナズリ	縁の頁数表紙	1	0	0	0	0	3階-3	扉部+扉部	
157	4454, 4465	印刷	にのみ裏面	10YR/4	10YR/4	上へのナズリ	縁の頁数表紙	1	0	0	0	0	3階-3	扉部+扉部	
158	4236	印刷	にのみ裏面	10YR/4	10YR/4	上へのナズリ	縁の頁数表紙	1	0	0	0	0	3階-3	扉部+扉部	
159	1742	印刷	にのみ裏面	10YR/4	10YR/4	上へのナズリ	縁の頁数表紙	1	0	0	0	0	3階-3	扉部+扉部	
160	5209	印刷	にのみ裏面	10YR/4	10YR/4	上へのナズリ	縁の頁数表紙	1	0	0	0	0	3階-3	扉部+扉部	
161	1682	印刷	にのみ裏面	10YR/4	10YR/4	上へのナズリ	縁の頁数表紙	1	0	0	0	0	3階-3	扉部+扉部	
162	7297	印刷	にのみ裏面	10YR/4	10YR/4	上へのナズリ	縁の頁数表紙	1	0	0	0	0	3階-3	扉部+扉部	
163	4278	印刷	にのみ裏面	10YR/4	10YR/4	上へのナズリ	縁の頁数表紙	1	0	0	0	0	3階-3	扉部+扉部	
164	5030	印刷	にのみ裏面	10YR/4	10YR/4	上へのナズリ	縁の頁数表紙	1	0	0	0	0	3階-3	扉部+扉部	
165	3173	印刷	にのみ裏面	10YR/4	10YR/4	上へのナズリ	縁の頁数表紙	1	0	0	0	0	3階-3	扉部+扉部	
166	2605	印刷	にのみ裏面	10YR/4	10YR/4	上へのナズリ	縁の頁数表紙	1	0	0	0	0	3階-3	扉部+扉部	
167	3372, 3515	印刷	にのみ裏面	10YR/4	10YR/4	上へのナズリ	縁の頁数表紙	1	0	0	0	0	3階-3	扉部+扉部	
168	1193, 1135, 2347, 2342	印刷	にのみ裏面	10YR/4	10YR/4	上へのナズリ	縁の頁数表紙	1	0	0	0	0	3階-3	扉部+扉部	
169	4182	印刷	にのみ裏面	10YR/4	10YR/4	上へのナズリ	縁の頁数表紙	1	0	0	0	0	3階-3	扉部+扉部	
170	4574	印刷	にのみ裏面	10YR/4	10YR/4	上へのナズリ	縁の頁数表紙	1	0	0	0	0	3階-3	扉部+扉部	
171	3789	印刷	にのみ裏面	10YR/4	10YR/4	上へのナズリ	縁の頁数表紙	1	0	0	0	0	3階-3	扉部+扉部	
172	vi. 488	印刷	にのみ裏面	10YR/4	10YR/4	上へのナズリ	縁の頁数表紙	1	0	0	0	0	3階-3	扉部+扉部	
173	2016	印刷	にのみ裏面	10YR/4	10YR/4	上へのナズリ	縁の頁数表紙	1	0	0	0	0	3階-3	扉部+扉部	
174	2045, 2111	印刷	にのみ裏面	10YR/4	10YR/4	上へのナズリ	縁の頁数表紙	1	0	0	0	0	3階-3	扉部+扉部	
175	2148	印刷	にのみ裏面	10YR/4	10YR/4	上へのナズリ	縁の頁数表紙	1	0	0	0	0	3階-3	扉部+扉部	
176	3077	印刷	にのみ裏面	10YR/4	10YR/4	上へのナズリ	縁の頁数表紙	1	0	0	0	0	3階-3	扉部+扉部	
177	3287	印刷	にのみ裏面	10YR/4	10YR/4	上へのナズリ	縁の頁数表紙	1	0	0	0	0	3階-3	扉部+扉部	
178	3323	印刷	にのみ裏面	10YR/4	10YR/4	上へのナズリ	縁の頁数表紙	1	0	0	0	0	3階-3	扉部+扉部	
179	3345, 3349	印刷	にのみ裏面	10YR/4	10YR/4	上へのナズリ	縁の頁数表紙	1	0	0	0	0	3階-3	扉部+扉部	

241	1139	新語	鳥類	にんげん	鳥のミダキ	鳥の羽根の具類解説文	1	0	0	0	0	0	4級	
242	5238	新語	鳥類	10YR3/2	10YR4/4								4級	
243	4695	成語	鳥類	にんげん	鳥のナデ	鳥の羽根の具類解説文	13	0	0	0	0	0	4級	
244	4105	新語	にんげん	にんげん	鳥のミダキ	鳥羽の具類解説文	13	0	0	0	0	0	4級 内装が茶色化	
245	3730	新語	鳥類	にんげん	鳥のミダキ	鳥羽の具類解説文	13	0	0	0	0	0	4級	
246	1647	新語	鳥類	にんげん	鳥のミダキ	鳥羽の具類解説文	13	0	0	0	0	0	4級	
247	4484	新語	鳥類	にんげん	鳥のミダキ	鳥羽の具類解説文	13	0	0	0	0	0	4級 内装が黒色化、再装が茶色化	
VI	248	4347, 6999	新語	にんげん	にんげん	鳥のミダキ	鳥に羽根の具類解説文	1	0	0	0	0	0	4級
249	4290	新語	にんげん	にんげん									4級 内装が茶色化程度が深い	
250	4296	新語	にんげん	にんげん									4級	
251	2613	新語	にんげん	鳥	251:鳥のミダキ 252:鳥のミダキ、ミダキ幅が広い(5mm)	鳥に羽根の具類解説文	13	0	0	0	0	0	4級	
252	3861	新語	10YR3/3	7.5YR3/6									同一一体材	
254	1586	成語											4級	
255	1633	新語	にんげん	にんげん		鳥に羽根の具類解説文	2	0	0	0	0	0	4級	
256	1732, 3186, 3264	新語	にんげん	にんげん	鳥のミダキ	鳥に羽根の具類解説文	2	0	0	0	0	0	4級	
258	3338	新語	10YR3/3	2.5YR/3									同一一体材	
257	3431	新語	にんげん	鳥	上へのナズリ	鳥に羽根の具類解説文	2	0	0	0	0	0	4級 同一一体材 251の内装が茶色化	
258	2608, vi, 3015	新語	にんげん	鳥	上へのナズリ								4級	
259	3862	新語	10YR3/3	7.5YR3/6									4級	
260	3255	新語	成語	成語	鳥のナデ	鳥に羽根の具類解説文	1	0	0	0	0	0	4級	
261	2738	新語	成語	成語	鳥のミダキ	鳥に羽根の具類解説文	1	0	0	0	0	0	4級	
262	2736	新語	成語	成語	鳥のミダキ	鳥に羽根の具類解説文	1	0	0	0	0	0	4級	
263	3438	新語	成語	成語	262:鳥のナズリ 265: 鳥のミダキ	成語をナズリ後、後に羽根の具類解説文	1	0	0	0	0	0	4級 同一一体材	
264	5232	新語	成語	成語	鳥のナデ	鳥に羽根の具類解説文	1	0	0	0	0	0	4級 同一一体材	
265	4270	新語	成語	成語	鳥のナデ	鳥に羽根の具類解説文	1	0	0	0	0	0	4級 同一一体材	
266	271	新語	成語	成語	鳥	鳥に羽根の具類解説文	1	0	0	0	0	0	4級	
267	271	新語	成語	成語	鳥	鳥に羽根の具類解説文	1	0	0	0	0	0	4級	
268	271	新語	成語	成語	鳥	鳥に羽根の具類解説文	1	0	0	0	0	0	4級	
269	271	新語	成語	成語	鳥	鳥に羽根の具類解説文	1	0	0	0	0	0	4級	
VI	268	271	新語	成語	成語	鳥	鳥に羽根の具類解説文	1	0	0	0	0	4級	
269	271	新語	成語	成語	鳥	鳥に羽根の具類解説文	1	0	0	0	0	0	4級	
270	271	新語	成語	成語	鳥	鳥に羽根の具類解説文	1	0	0	0	0	0	4級	
271	271	新語	成語	成語	鳥	鳥に羽根の具類解説文	1	0	0	0	0	0	4級	
272	271	新語	成語	成語	鳥	鳥に羽根の具類解説文	1	0	0	0	0	0	4級	
273	271	新語	成語	成語	鳥	鳥に羽根の具類解説文	1	0	0	0	0	0	4級	
VI	274	4306, 4306, 4307, 4309, 4320, vi, 327, 472	口縁部	にんげん	口縁部:天へのナズリ後、羽のミダキ 羽根:羽のミダキと縁のミダキ 縁部:縁のミダキ	口縁部:天へのナズリ後、羽のミダキ 羽根:羽のミダキと縁のミダキ 縁部:縁のミダキ	1	0	0	0	0	0	4級 同一一体材 内装の 一部が茶色化	
275	4674, vi, 396, 345, vi, 305	口縁部	にんげん	口縁部	口縁部:天へのナズリ後、羽のミダキ 羽根:羽のミダキと縁のミダキ 縁部:縁のミダキ	口縁部:天へのナズリ後、羽のミダキ 羽根:羽のミダキと縁のミダキ 縁部:縁のミダキ	1	0	0	0	0	0	4級	
276	1078, 4672, vi, 345, 373, vi, 372	口縁部	にんげん	口縁部	口縁部:天へのナズリ後、羽のミダキ 羽根:羽のミダキと縁のミダキ 縁部:縁のミダキ	口縁部:天へのナズリ後、羽のミダキ 羽根:羽のミダキと縁のミダキ 縁部:縁のミダキ	1	0	0	0	0	0	4級	
277	2975	口縁部	にんげん	口縁部	口縁部:天へのナズリ後、羽のミダキ 羽根:羽のミダキと縁のミダキ 縁部:縁のミダキ	口縁部:天へのナズリ後、羽のミダキ 羽根:羽のミダキと縁のミダキ 縁部:縁のミダキ	2	0	0	0	0	0	5級 同一一体材 275の内装が茶色化、茶色化	
278	4179, 4187, 4189, 4724	口縁部	10YR3/3	10YR3/4									5級 同一一体材 275の内装が茶色化、茶色化	
279	4183	口縁部	10YR3/3	10YR3/4									5級 同一一体材 275の内装が茶色化、茶色化	
280	vi, 428	口縁部	10YR3/3	10YR3/4									5級 同一一体材 275の内装が茶色化、茶色化	
281	2964, vi, 2546	口縁部	10YR3/3	10YR3/4									5級 同一一体材 275の内装が茶色化、茶色化	
282	737, 4289	口縁部	10YR3/3	10YR3/4									5級 同一一体材 275の内装が茶色化、茶色化	
283	4626	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	5級 同一一体材 275の内装が茶色化、茶色化	
VI	284	2730	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	5級 同一一体材 275の内装が茶色化、茶色化	
285	2732	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	5級 同一一体材 275の内装が茶色化、茶色化	
286	vi, 3038, 2711	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	5級 同一一体材 275の内装が茶色化、茶色化	
287	2728	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	5級 同一一体材 275の内装が茶色化、茶色化	
288	2728	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	5級 同一一体材 275の内装が茶色化、茶色化	
289	2727, 2729	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	5級 同一一体材 275の内装が茶色化、茶色化	
290	2728, 2727	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	5級 同一一体材 275の内装が茶色化、茶色化	
291	vi, 428, 257	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	5級 同一一体材 275の内装が茶色化、茶色化	
292	4010	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	5級 同一一体材 275の内装が茶色化、茶色化	
293	3092	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	5級 同一一体材 275の内装が茶色化、茶色化	
294	3090	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	5級 同一一体材 275の内装が茶色化、茶色化	
295	3093	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	5級 同一一体材 275の内装が茶色化、茶色化	
296	vi, 329	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	5級 同一一体材 275の内装が茶色化、茶色化	
297	3069	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	5級 同一一体材 275の内装が茶色化、茶色化	
VI	298	471	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	5級 同一一体材 275の内装が茶色化、茶色化	
299	273, vi, 3023	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	5級 同一一体材 275の内装が茶色化、茶色化	
300	2997	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	5級 同一一体材 275の内装が茶色化、茶色化	
301	2997	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	5級 同一一体材 275の内装が茶色化、茶色化	
302	2802	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	成語	5級 同一一体材 275の内装が茶色化、茶色化	

78	1279	1360, 4711, 4714, 4716	新編	電	にょい権	1.5YR6/4	しむへのケズリ後、巻のナゲ	横山山形神宮文	R3	C0	O0	A0	L0	内装が茶色化、外面が黄色化
	1279	vi. 36	165, 168, 171	新編	電	1.5YR6/4	しむへのケズリ	横山山形神宮文						
	1280	4714, 4715	新編											
	1281	vi. 37	新編											
	1282	vi. 38	新編											
	1284	3417	戸除部	黒色	にょい権	2.5Y3/1	は除部：巻のナゲリ後、巻の1/4	は除部：巻の1/4ギキ(黒)						
	1285	1652	新編		にょい権	2.5YR6/4	巻部：1/4のナゲリ(黒)	は除部：巻の1/4ギキ(黒)						
	1286	3378	新編											
	1285	1621, 1660	新編		にょい権	2.5YR6/4		は除部：巻の1/4ギキ(黒)						
	1286	3213	新編											
	1287	2264	新編		にょい権	2.5YR6/4	ナゲリ	口除部：汗文						
	1288	2343	新編		2.5YR6/4	2YR6/6		口除部：刺部、刺部(両面粘土)						
1289	2266	戸除部												
1290	2268, 2258	新編												
79	1301	3610	新編	黄緑	にょい権	2.5Y5/2	巻の1/4ギキ(黄)	押入文(祝祭文文)	R3	C0	O0	A0	内装が茶色化、外面が黄色化	
	1292	3064, 4376, vi. 377	戸除部	にょい権	2.5Y5/2	2.5Y5/3	は除部：丁字な巻のナゲリ後、巻のナゲリ	口除部：1/4のナゲリ(黄)						
	1293	4297	戸除部			1YR7/3/4	刺部：1/4のナゲリ後、巻のナゲリ	口除部：刺部、刺部の山形神宮文						
	1294	4879	戸除部			2.5Y5/2	口除部：左へのケズリ後、巻の1/4ギキ(今令)	口除部：山形神宮文						
	1295	vi. 312	戸除部			1YR7/3/4	口除部：1/4のナゲリ後、巻のナゲリ	口除部：巻の1/4ギキ(黄)						
	1296	1187	新編		にょい権	2.5Y5/2	刺部：左へのケズリ後、巻の1/4ギキ(今令)	刺部：上)巻部の山形神宮文						
	1297	4829	新編		2.5Y5/2	2.5Y5/2	刺部：左へのケズリ後、巻のナゲリ	刺部：上)巻部の山形神宮文						
	1299	5176, vi. 350	新編		にょい権	2.5Y5/2	巻の1/4ギキ	巻部の刺(山形神宮文)						
	4811	2287, 2268	新編		にょい権	2.5Y5/2	巻の1/4ギキ	巻部の刺(山形神宮文)						
	4810	3617	新編		にょい権	1YR7/3/4	刺部：1/4のナゲリ	刺部：1/4のナゲリ						
	4812	3729	新編		2.5YR5/4	1YR7/3/4	かへのケズリ	黒色文						
	4813	3736	新編											
	4814	3617	新編											
	4815	1249	新編		にょい権	2.5YR6/4	ナゲリ後、1/4ギキ(今令)	刺(山形神宮文)						
4816	4946	新編												
4817	3623	新編												
4818	1343	新編												
4819	4877	新編												
4820	1732, 3649	新編												
80	4111	4223, 4277, 4278, vi. 474	戸除部・新編		にょい権	7.5YR5/4	は除部：刺部・巻部：巻のケズリ後、丁字な巻のナゲリ	は除部：刺部のナゲリと口除部	R3	C0	O0	A0	内装が黒色化・黄色化、外面が茶色化・黄色化	
	4112	1321, 1322, 3056, 3666, 4646, 4656, vi. 36, 172, 140	刺部・巻部					口除部：刺部のナゲリ後、巻部の刺(黒)						
	4113	vi. 129	新編					口除部：刺部のナゲリ後、巻部の刺(黒)						
	4114	1424, 1430, 3218, vi. 116, 117, 119	新編					口除部：刺部のナゲリ後、巻部の刺(黒)						
	4113	4399, 4405, vi. 327, 375	口除部・新編		にょい権	10YR7/4	口除部：巻のナゲリ後、巻の1/4ギキ	口除部：巻のナゲリ後、巻の1/4ギキ						
	4116	1559, 1560	口除部		にょい権	10YR7/4	口除部：巻のナゲリ後、巻の1/4ギキ	口除部：巻のナゲリ後、巻の1/4ギキ						
	4117	1273	新編					口除部：巻のナゲリ後、巻の1/4ギキ						
	4118	vi. 491, 481, 489	刺部・巻部					口除部：巻のナゲリ後、巻の1/4ギキ						
	4119	1600, 1677, 1527, 1564, 1565, 4373, 4482, 4490, 4502, 4506, vi. 170, 280, 281, 380, 392, 394, 395, 496, 567, 569, 516, 518, 512, 520, 524, vi. 266, 290	口除部・新編		にょい権	10YR7/4	口除部：巻のナゲリ後、巻の1/4ギキ	口除部：巻のナゲリ後、巻の1/4ギキ						
	4201	vi. 170	口除部		にょい権	10YR7/4	口除部：巻のナゲリ	口除部：巻のナゲリ						
4202	4979, vi. 130	新編		にょい権	10YR7/3	左のケズリ後、巻のナゲリ	巻の1/4ギキ後、巻部の刺(黒)							
4211	4771, vi. 217, vi. 170, 182, 183, vi. 107, 108	口除部・新編		にょい権	10YR7/3	口除部：巻のナゲリ	口除部：巻のナゲリ							
4212	3069, 3089, 4990, vi. 165	口除部・新編		にょい権	10YR6/3	口除部：巻のナゲリ後、巻のナゲリ	口除部：巻のナゲリ後、巻のナゲリ							
4213	vi. 170	口除部・新編		にょい権	10YR7/3	口除部：巻のナゲリ後、巻のナゲリ	口除部：巻のナゲリ後、巻のナゲリ							
4214	3666, vi. 481, 461	新編		黒色	2.5Y7/3	左側のナゲリ後、巻のナゲリ	巻の1/4ギキ後、巻部の刺(黒)							
4215	3666, 4982, vi. 520, vi. 268, 400	口除部		黒色	10YR5/4	口除部：巻のナゲリ後、巻のナゲリ	口除部：巻のナゲリ後、巻のナゲリ							
4216	1160, 5553, 5559, 5683, vi. 305	新編												
4217	1400, 3330, vi. 187	新編												
4218	4427	新編												
4219	4277, 4262, 4099	新編												
4220	2960	新編		にょい権	10YR6/3	巻のケズリ後、巻のナゲリ	ナゲリ後、巻部の刺(黒)							
4221	1505, 3569	新編		にょい権	7.5YR5/4	左のケズリ後、巻のナゲリ	巻のナゲリ後、巻部の刺(黒)							

VI +	563	vi. 482	灰層	にょい層 7.5YR7/4	にょい実層 10YR6/3	横のナズリ後、横のナア	横のナア	83	○	○	○	○	○	○	9階-4 同一階床小	
	564	1879	灰層													
	564	vi. 426	灰層													
	565	3663	灰層													
	566	3118, 3120, 3122, 3145, 3145, 3146	灰層	にょい実層 10YR6/3	にょい実層 7.5YR7/4	横のナズリ後、横のナア	横のナア	83	○	○	○	○	○	○	9階-4 同一階床小 内外面が黄色化	
	567	1688, 1689, 1693	灰層													
	568	3143, 3146, 3169, 3474	灰層													
	569	3112	灰層													
	570	3156, 3158, 3159	灰層													
	571	4585, vi. 409	灰層													
572	3475	灰層														
573	79T vi. vi.9	2, 400A	灰層	にょい層 7.5YR5/4		左へのナズリ	左へのナズリ後、横のナア	83	○	○	○	○	○	9階-4 同一階床小 内外面が黄色化		
574	4257	灰層	にょい実層 10YR5/3	にょい実層 7.5YR6/4	横のナズリ後、横のナア	横のナア	83	○	○	○	○	○	○	9階-4 同一階床小 内外面が黄色化		
575	4265	灰層														
576	1184	灰層														
577	4953, 4960, 4992, vi. 76	灰層														
578	4250, 4386	灰層	にょい実層 2.5Y6/3	にょい実層 10YR7/4	横のナズリ後、横のナア	横のナア	83	○	○	○	○	○	○	9階-4 同一階床小 内外面が黄色化		
579	2873	灰層														
580	4263	灰層														
581	5209	灰層														
582	4264	灰層														
583	1943, vi. 320	灰層	にょい実層 2.5Y6/3	にょい実層 10YR7/4	横のナズリ後、横のナア	横のナア	83	○	○	○	○	○	○	9階-4 内面が黄色化		
584	3548, 3575, 3580, 4911, 4842	灰層	灰実層 2.5Y5/3	にょい実層 2.5YR2/4	横のナズリ後、横のナア	横のナア	83	○	○	○	○	○	○	9階-4 内面が黄色化		
585	vi. 452	灰層	にょい実層 2.5Y6/3	にょい実層 10YR7/4	横のナズリ後、横のナア	横のナア	83	○	○	○	○	○	○	9階-4 内面が黄色化		
586	1424, vi. 293	灰層	にょい実層 2.5Y6/3	にょい実層 10YR7/4	横のナズリ後、横のナア	横のナア	83	○	○	○	○	○	○	9階-4 内面が黄色化		
VI +	587	2887	灰層	にょい実層 7.5YR7/4	にょい実層 10YR7/4	横のナズリ後、横のナア	横のナア	83	○	○	○	○	○	○	9階-1 やや黄色化	
	588	vi. 324, 529	灰層	にょい実層 7.5YR7/4	にょい実層 7.5YR6/6	横のナズリ後、横のナア	横のナア	83	○	○	○	○	○	○	9階 やや黄色化	
	589	2881	灰層	にょい実層 10YR7/2	にょい実層 10YR7/4	横のナズリ後、横のナア	横のナア	83	○	○	○	○	○	○	9階	
	590	vi. 37	灰層	にょい実層 7.5YR7/4	にょい実層 7.5YR6/6	横のナズリ後、横のナア	横のナア	83	○	○	○	○	○	○	9階-1 やや黄色化	
	591	5611, 5635, 5676, 3721, 3746, 3741	灰層	灰実層 5.5Y7/3	にょい実層 10YR7/4	横のナズリ後、横のナア	横のナア	83	○	○	○	○	○	○	9階-1	
	592	4019	灰層	にょい実層 10YR7/3	にょい実層 10YR7/4	横のナズリ後、横のナア	横のナア	83	○	○	○	○	○	○	9階-1	
	593	2843	灰層	にょい実層 10YR6/4	にょい実層 7.5YR6/4	横のナズリ後、横のナア	横のナア	83	○	○	○	○	○	○	9階-1	
	594	4998	灰層	にょい実層 10YR7/4	にょい実層 10YR7/4	横のナズリ後、横のナア	横のナア	83	○	○	○	○	○	○	9階-1	
	VI +	595	vi. 308	白砂層	にょい実層 7.5YR6/4		横のナズリ後、横のナア	横のナア	83	○	○	○	○	○	○	10階-1
		596	1328	白砂層												
597		vi. 322	白砂層													
598		710	白砂層	にょい実層 7.5YR7/4		横のナズリ後、横のナア	横のナア	83	○	○	○	○	○	○	10階-1	
599		4718	白砂層	にょい実層 7.5YR6/4	にょい実層 7.5YR6/4	横のナズリ後、横のナア	横のナア	83	○	○	○	○	○	○	10階-1	
600		1540	白砂層													
601		4910	灰層													
602		4527	灰層	灰実層 2.5Y7/2	灰実層 2.5Y7/3	横のナズリ後、横のナア	横のナア	83	○	○	○	○	○	○	10階-1	
603		4528	灰層													
604		4528	灰層													
605	vi. 460	灰層														
606	3669	灰層														
607	3674	灰層	にょい実層 10YR7/4	にょい実層 10YR7/4	横のナズリ後、横のナア	横のナア	83	○	○	○	○	○	○	10階-2		
607	4954	灰層	横 7.5YR4/3	横 5YR2/6	横のナズリ後、横のナア	横のナア	83	○	○	○	○	○	○	10階-2		
609	4650	灰層	にょい実層 10YR6/3	にょい実層 10YR6/4	横のナズリ後、横のナア	横のナア	83	○	○	○	○	○	○	10階-3		
610	3178	灰層	にょい実層 10YR7/4		横のナズリ後、横のナア	横のナア	83	○	○	○	○	○	○	10階-4 外壁が黄色化		
610	4636	灰層	灰実層 10YR5/2	灰実層 10YR5/4	横のナズリ後、横のナア	横のナア	83	○	○	○	○	○	○	10階-4 外壁が黄色化		
611	1422	灰層	灰 7.5YR2/1	にょい実層 5YR5/4	横のナズリ後、横のナア	横のナア	83	○	○	○	○	○	○	10階-3 内面が黄色化		
612	3171	灰層	にょい実層 7.5YR7/4	にょい実層 2.5Y7/1	横のナズリ後、横のナア	横のナア	83	○	○	○	○	○	○	10階-3 外壁が黄色化		
613	vi. 326, 524	灰層	にょい実層 10YR6/4	にょい実層 2.5Y6/2	横のナズリ後、横のナア	横のナア	83	○	○	○	○	○	○	10階-3		
614	4138, 4674, vi. 47	灰層	にょい実層 7.5YR7/4	にょい実層 10YR6/4	横のナズリ後、横のナア	横のナア	83	○	○	○	○	○	○	10階-3		
615	5244	灰層	灰実層 2.5Y7/1	にょい実層 10YR7/4	横のナズリ後、横のナア	横のナア	83	○	○	○	○	○	○	10階-3 外壁が黄色化		

※ 灰層の記載は多く含まれるときをいふ。○は記載がある、○は多い、△は多少含むをいふ。

3. 土製品

土製品は、耳栓 1 点、土製円板 10 点が出土している。詳しくは表 VI.07 に示している。

耳栓

耳栓はグリッド D10 より完形品 1 点が出土している。器形が特徴的で多角形を呈する。外面と仮定した面は 11 角、内面は 10 角と角数に違いがある。器面には文様を持たず、丁寧なナデで整える。多角形の形そのものが文様の代わりをなしたと考えられる。

土製円板

土製円板は、いずれも深鉢の底部を 2 次加工したものである。縁を細かく打ち欠いた底面が、円形ないし楕円形を呈する。

620 を除いた土製円板は、土器 9 類（塞ノ神式）に属すと考えられる。時期が早期後葉に集中している。620 は土器 3 類に類似するものが見られる。また、623 は楕円形の土製円板 2 点が接合する。底部を 2 つに分け、縁を細かく打ち欠いている。

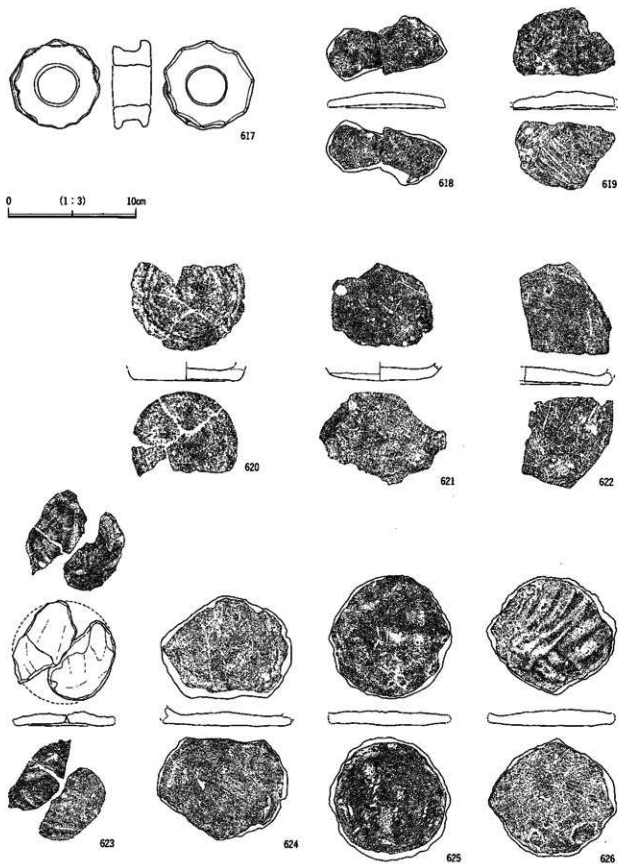
なお、3 類-1 底部 39 と 3 類-3 底部 171 も土製円板の可能性が考えられる。



写真 VI.06 耳栓出土状況

表 VI.07 土製品の計測表

図番号	遺物番号	器種	色調		調物		胎土 (cm)					法量 (cm, g)			
			内面	外面	内面	外面	粒炭	石英	長石	雲母	赤色砂	その他	平面 (長軸×短軸)	厚さ	重さ
617		土製耳栓	12.20~黄 7.5YR (6/4)		ナデ	ナデ	0.5	○	○	○	○		7.0×7.0	3.0	110.79
618	3332, 3335	土製円板	灰青陶 10YR (4/2)	12.20~黄 10YR (6/4)	一定方向のナデ	一定方向のナデ	0.5	○	○	○	○		9.3×4.3	1.0	34.29
619	4174	土製円板	12.20~黄 10YR (6/4)	12.20~黄 10YR (6/4)	ナデ	ケズリ後、一部ナデ	0.5	○	○	○	△		7.7×5.2	1.1	40.43
620	4567, 5243 vi. 239, 252	土製円板	赤赤陶 5YR (5/6)	12.20~黄 10YR (6/4)	ケズリ後、ナデ	縁に沿ったナデ	1	○	○	○	○		9.0×7.0	1.0	71.1
621	4965	土製円板	灰青 2.5Y (6/2)	12.20~黄 10YR (7/4)	ナデ	一定方向のケズリ後、弱いナデ	0.5	○	○	○	△		9.8×7.2	1.1	60.47
622	4099	土製円板	12.20~黄 10YR (7/4)	黄青陶 10YR (6/4)	ナデ	ナデ	0.5	○	○	○	△		7.0×6.5	1.2	57.95
623-1	4331	土製円板	灰青 2.5Y (6/2)	12.20~黄 10YR (6/4)	ケズリとナデ後、ミダキ	ケズリ後、ナデ	0.5	○	○	○	○		7.1×3.2		22.07
623-2	4332	土製円板	灰青 2.5Y (6/2)	12.20~黄 10YR (6/4)	ナデ	ナデ	0.5	○	○	○	○		6.4×3.3	0.8	23.02
624	2875	土製円板	灰青 2.5Y (7/3)	12.20~黄 10YR (7/2)	ナデ	ナデ	0.5	○	○	○	○		5.7×7.8	1.1	79.35
625	vi. 511	土製円板	12.20~黄 7.5YR (7/4)	12.20~黄 10YR (7/2)	ナデ	ナデ	0.5	○	○	○	○		9.5×9.5	1.1	88.96
626	4812	土製円板	12.20~黄 10YR (7/3)	12.20~黄 10YR (7/2)	ケズリ後、ナデ	強いナデ	0.5	○	○	○	○		10.0×9.3	1.3	89.78



図VI.96 土製品

4. 石器

VI・VII層より出土した石器・石製品は総数106点を数える。内訳は剥片石器32点、礫石器65点、石製品5点となる。その他、フレーク・チップなどの剥片類が147点存在する。

石材

石材は肉眼観察により分類している。一部については産地を同定している¹⁾。石材の分類・呼称については、表VI.08に示している。

なお、肝属山地に見られる花崗岩が製品以外でも出土している。いずれも5cm程度の小片であるが、遺物の中には、形態が板状を呈して研磨面と考えられる範囲をもつものがある。石皿など一部である可能性が考えられる。詳しくは表VI.13に示している。

表VI.08 石材の分類一覧

黒曜石	以下の6つに細分している。
黒曜石1	剥離面の色調が灰白(5Y7/1)色~灰(5Y6/1)色を呈する。不透明で剥離面も光沢がなく、ザラつく。野鳥産の黒曜石と考える。
黒曜石2	剥離面の色調が黒(2/0)色を呈する。不透明で剥離面が光沢をもっている。少量の0.5mm大の不純物を含んでいる。豊岳産の黒曜石と考える。
黒曜石3	剥離面の色調が黒(1.5/0)色を呈する。不透明で剥離面が光沢をもっている。非常に多量に0.5~2mm大の不純物を含んでいる。
黒曜石4	剥離面の色調が暗黒(5P2/1)色を呈する。ガラスの様に透明で、剥離面が光沢をもっている。0.5mm大の不純物を極少量含んでいる。森ノ木津留産の黒曜石と考える。
黒曜石5	剥離面の色調が暗青灰(5B3/1)色~暗青灰(5B4/1)色を呈する。全くの不透明で剥離面も光沢が鈍い。西北九州系産の黒曜石と考える。石器659については、暗青灰(10BG4/1)色上記と異なるが、不透明である点から黒曜石5に入れている。
黒曜石6	剥離面の色調が黒(2/0)色を呈する。全くの不透明であるが、剥離面は光沢をもっている。剥離面には同じ方向の縞模様が見られる。
チャート	以下の5つに細分している。いずれも剥離面が明瞭でやや光沢をもっている。
チャート1	色調がおもに青白(10BG6/1)色を呈し、縞模様状に暗青灰(5BG4/1)色が入る。
チャート2	チャート1と同色であるが、やや黄色味を帯びる。両者の違いが石材の産地産であるかどうかは不明である。
チャート3	色調はチャート2に類似し、光を全く通さない不透明なものである。
チャート4	色調が暗青灰(5B4/1)色を呈する。
赤色チャート	色調が赤黒(10R4/4)色を呈する。剥離面が歪で乱れる。
頁岩	以下の3つに細分している。いずれも剥離面は明瞭だが光沢はない。
頁岩1	色調が青黒(5B2/1)色を呈する。
頁岩2	色調が暗青灰(5B4/1)色を呈する。軟質のためか鋭が丸みを帯びる。
頁岩3	色調が青黒(5PB1.7/1)色を呈する。硬質頁岩と考えられる。
安山岩	以下の2つに細分している。剥離面は明瞭だが光沢はない。
安山岩1	色調が灰オリーブ(7.5Y6/2)色を呈す。風化している様な状態である。
安山岩2	色調が灰(10Y4/1)色を呈する。
砂岩	同一産地の中に硬質のものから、軟く脆いものまで存在する。
花崗岩	3つに細分している。花崗岩1は肝属山地に産地の所在する石材と考える。花崗岩2は出土遺物の中の製品に見られる石材である。
花崗岩1	色調がおもに灰白色の石材の中に、様々な鉱物を多量に含んでいる。石質は軟く脆い。
花崗岩2	色調が灰白色(10Y8/1)を呈する。複数の鉱物を含み、表面に細かい凹凸が見られる。石質は硬い。
花崗岩3	色調は青灰(2.5GY6/1)色を呈する。石質は硬く、不純物を含まず、質の細かい石材である。
赤粘板灰岩	シラス台地の基底部に見られる石材と考える。

※石材は肉眼観察により分類している。分類に際しては和川のみ子氏にご助言いただいた。

剥片石器

剥片石器は、石鏃12点、石鏃未製品5点、石匙1点、スクレイパー3点、局部磨製石器1点が出土している。

石鏃は脚をもつものも多く、形態が数種類にまとまる。自然面や主剥離面を残すものも多くあり、未製品の可能性も考えられる。646は剥片の縁辺部に簡単な剝離を施す。石鏃以外の器種の可能性も考

られる。石鏃648は側辺に使用痕と考えられる微細な剥離が見られる²。650～653は石鏃未製品と考えられ、650には横裂きの主剥離面と打面が残る。653は横長剥片の縁辺部に簡単な剥離を施す。礫面の稜を主軸に利用している。素材は川原礫と考えられる。

局部磨製石器654はやや軟い素材である。類似の石材のものが下堀遺跡³で出土している。石鏃656は礫面と主剥離面を残す。スクレイパー659は自然面が残る。659は成形の剥離が2辺に見られ、他の器種の可能性も考えられる。スクレイパー656には2ヶ所の挟りがある。局部に研摩面があり使用痕と考えられる微細な剥離が存在する。形態が石鏃に類似する。

剥片類

剥片は、使用痕剥片を含む3点を図化している。その他については、石材別に計測表にて報告する。なお、表において報告分はチップ・フレックなどに分類していない、剥片類として一括している。石材別の出土量は黒曜石が最も多く、次いでチャート、頁岩の順となる。

礫石器

礫石器は、磨製石斧⁴1点、敲・磨石18点、磨石21点、石鏃13点、石皿9点、台石3点、礫石器1点、不明石製品5点が出土している。

磨製石斧657は図VI.657に掲載している。多くの剥離は磨面形成後に行なったと考えられる。

敲・磨石は形態が棒状の664～668と、平面形が楕円形、もしくは円形の670～680がある。前者は敲打痕が多く、磨面をもたない。敲石としての機能が主体であったと考えられる。石鏃などの製作に用いられた可能性も考えられる⁵。665・666は石鏃の可能性も考えられる。後者は、背腹面の磨面は使い込まれているものが多い。669はひよこ形とも言うべき特異な形をする。

磨石は背腹面に磨面をもつものが多いが、対になる片面の内1面は擦痕が少なく、使用頻度は高くないと考えられる。平面形が円形のものが多い。

機能不明の石製品が5点ある。703・704は縄文時代早期の包含層でよく見られる。何らかの素材であろうか。705～707は器面が光沢をもち、擦痕も見られる。何らかの道具もしくは素材と考えられるが、形状が特異であることから、祭祀関係の道具の可能性が考えられる。

石鏃は長軸方向に挟りをもつ708と短軸方向に挟りをもつ709～719に分けられる。挟りは剥離面で形成されるものと敲打痕で形成されるものがある。715のみ背腹面に多くの擦痕が見られる。719・720は破砕礫を加工している。

石皿は小型の721・722・725があり、他は大型のもの一部と考えられる。721は石鏃の素材の可能性も考えられる。725は台石の形態に類似している。

台石729・731・732は、下部となる背面が尖っており、731・732は短軸の断面が逆三角形を呈する。

礫石器733は、溶結凝灰岩の辺を打ち欠いて分銅状に整える。

1 鹿児島大学大学院 和田るみ子氏にご教授頂いた。

2 648～656は和田氏に実測・トレースを依頼し、観察についてご助言頂いている。

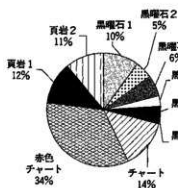
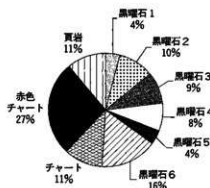
3 東鑑志・松崎卓朗 2003 『浜場遺跡・下堀遺跡』 有明町教育委員会

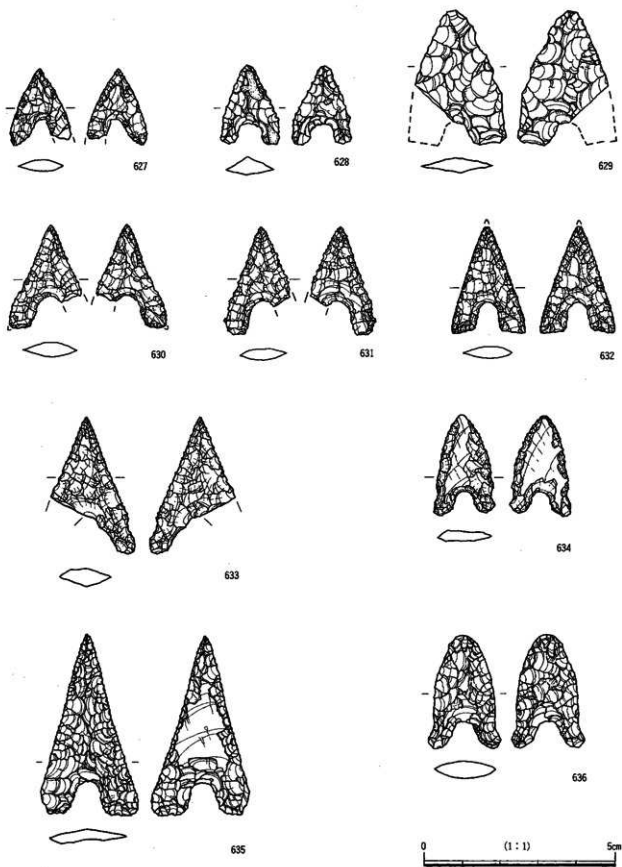
4 レイアウトの都合上、剥片石器の図中であり、表も同じである。

5 宮田栄二氏（鹿児島県立埋蔵文化財センター）にご教授頂いている。

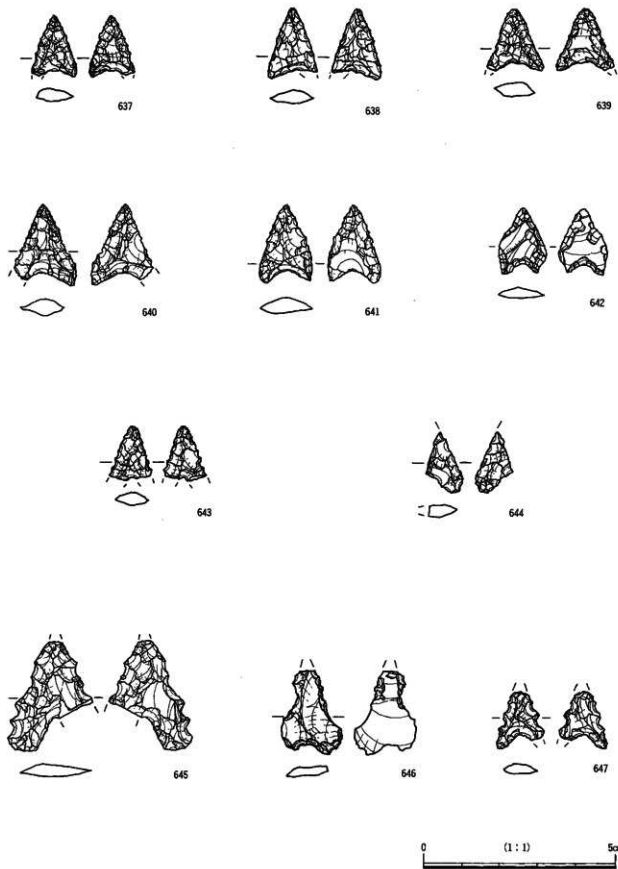
表VI.09 剥片石器の計測表

神岡 番号	遺物 番号	出土位置		器種	石材	法 量 (cm, g)			備考	
		地区	層位			最大長	最大幅	最大厚		重量
627	3789			石鏃	チャート1	(2.0)	(1.6)	0.35	0.8	
628	285		VII	石鏃	頁岩1	2.1	1.6	0.5	0.8	
629	4196			石鏃	チャート2	3.5	(2.5)	0.5	3.2	
630	3631			石鏃	チャート4	(2.7)	(1.85)	0.4	1.3	
631	4430			石鏃	黒曜石5	(2.85)	(1.7)	0.35	1.1	
632	442		VII	石鏃	チャート2	(2.8)	1.9	0.35	1.3	
633	5156			石鏃	チャート1	(3.6)	(2.2)	0.5	2.2	
634	一括	9T	VI	石鏃	頁岩1	2.65	1.6	0.3	1.0	
635	3026			石鏃	チャート2	4.8	2.6	0.5	4.2	
636	4226			石鏃	チャート2	3.0	1.9	0.5	2.6	
637	2137			石鏃	黒曜石1	(1.65)	(1.15)	0.35	0.4	
638	2046			石鏃	頁岩1	(1.9)	(1.2)	0.35	0.6	
639	3341			石鏃	黒曜石1	(1.65)	(1.5)	0.35	0.5	
640	2441			石鏃	頁岩1	(2.15)	(1.6)	0.45	0.9	
641	521		VI	石鏃	頁岩1	2.05	1.35	0.4	0.9	
642	3078			石鏃	チャート2	1.8	1.3	0.3	0.5	
643	2701			石鏃	黒曜石1	(1.45)	(1.1)	0.35	0.4	
644	2708			石鏃	黒曜石1	(1.6)	(0.95)	0.35	0.3	
645	3303			石鏃	黒曜石5	(2.9)	(2.2)	0.35	1.5	
646	391		VI	異形石器	チャート2	(2.2)	1.6	0.4	0.8	
647	1828			石鏃	頁岩1	(1.5)	(1.25)	0.3	0.3	
648	5219			石鏃	黒曜石4	2.15	1.5	0.5	0.83	
649	2675			石鏃	黒曜石1	1.95	1.4	0.3	0.40	
650	2			石鏃未製品	チャート3	2.3	1.8	0.6	2.65	
651	2223			石鏃未製品	チャート2	1.1	1.2	0.35	0.31	
652	29			石鏃未製品	黒曜石1	1.5	1.4	0.5	0.66	
653	265			石鏃未製品	安山岩2	3.45	2.0	5.0	2.66	
654	1343			局部磨製石器	頁岩2	7.15	2.95	1.15	16.43	
655	5197			石鏃	黒曜石2	2.0	1.55	0.65	1.66	
656	4124			スクレイパー	頁岩3	2.3	2.35	6.0	2.85	ノッチドスクレイパー
657	3704			磨製石斧	安山岩1	(8.75)	3.95	2.0	98.0	礫石器
658	3651			スクレイパー	赤色チャート	3.3	3.4	1.2	15.2	
659	3523			スクレイパー	黒曜石5	(1.65)	2.9	0.6	2.6	
660	237		VI	使用痕剥片	チャート3	2.6	2.5	0.9	4.8	
661	58		VI	フレーク	安山岩2	3.8	3.1	1.1	10.4	
662	2094			?	花崗岩3	(5.6)	(4.7)	(1.1)	22.4	
663	161		VI	フレーク	チャート3	5.2	2.6	0.7	11.0	

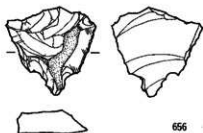
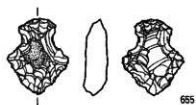
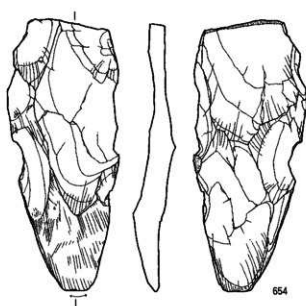
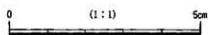
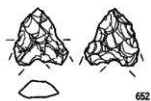
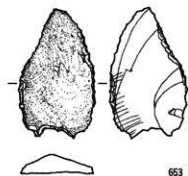
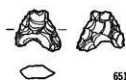
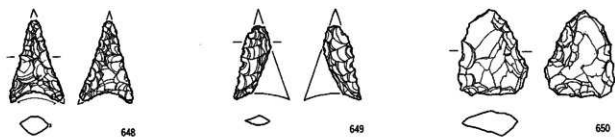
表VI.10 剥片類の石材別割合
(重量)表VI.11 剥片類の石材別割合
(石材別総重量/総重量)



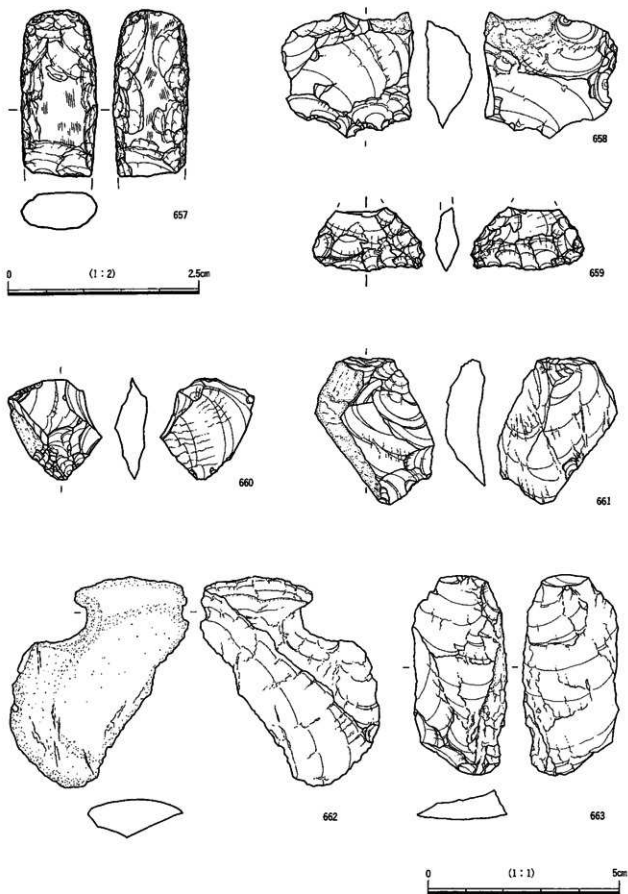
图VI.97 剥片石器(1)



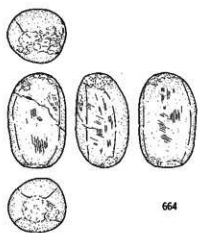
図VI.98 剥片石器（2）



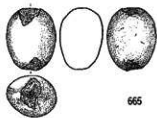
圖VI.99 剝片石器(3)



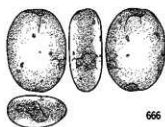
図W.100 剥片石器(4)



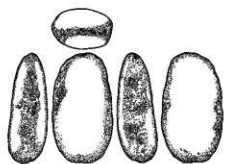
664



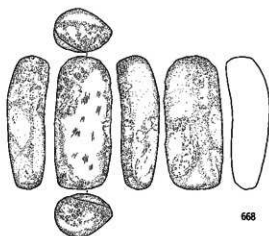
665



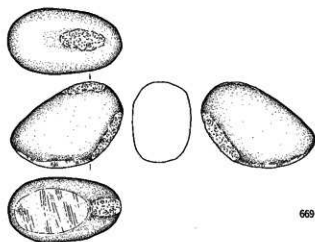
666



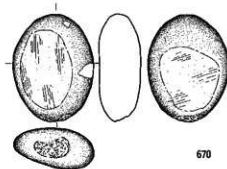
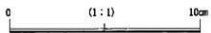
667



668



669



670

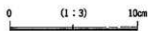
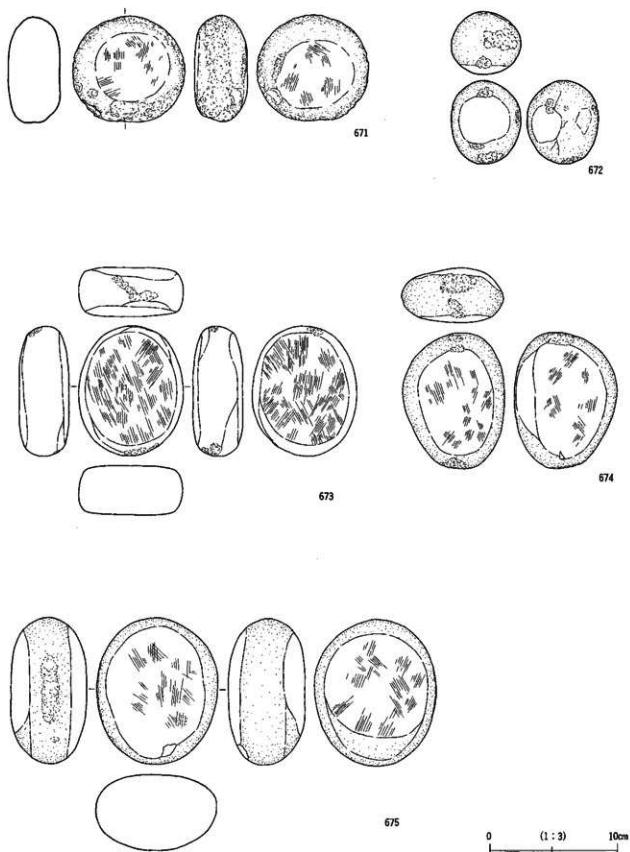


图 VI . 101 碟石器 (1)



図VI.102 礫石器(2)

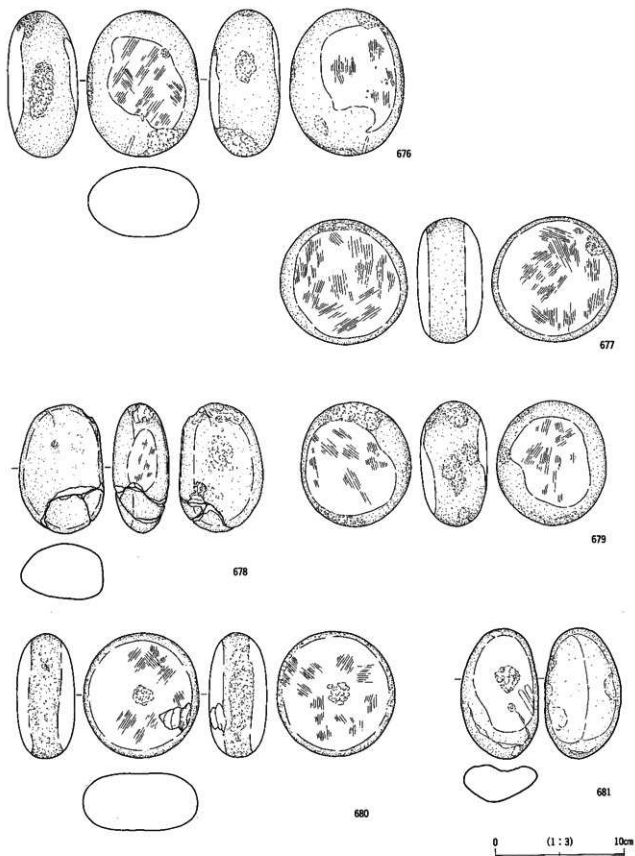
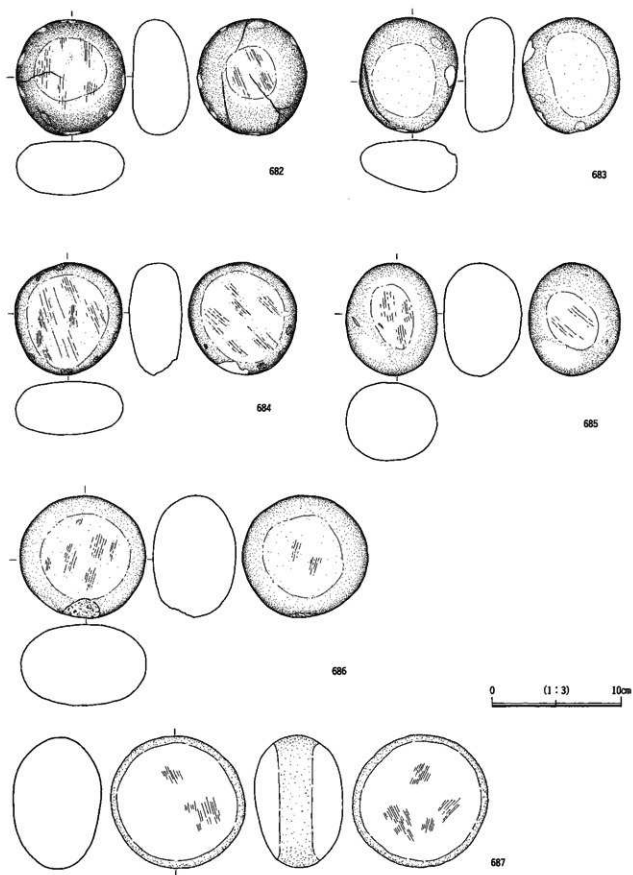


图 VI.103 碟石器 (3)



図VI.104 礫石器(4)

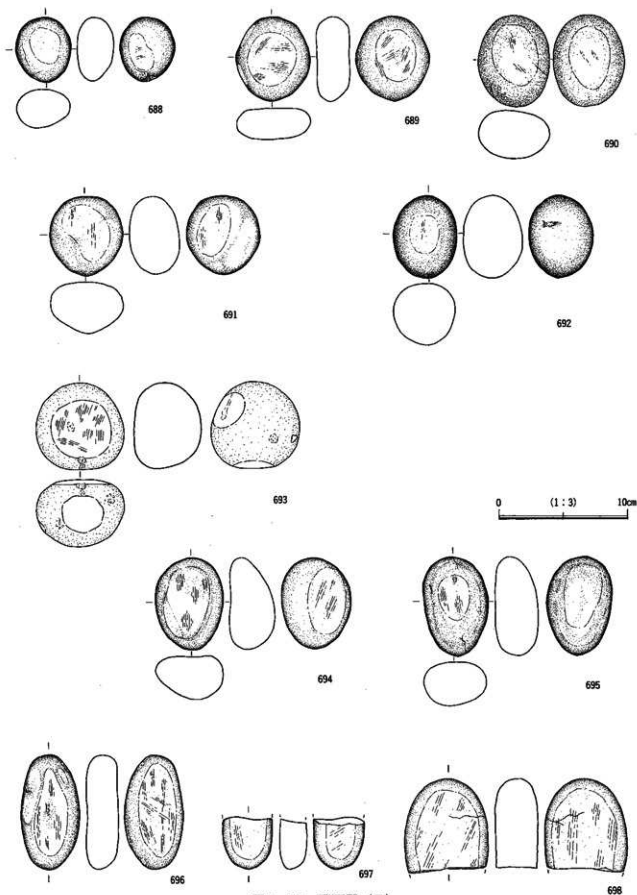
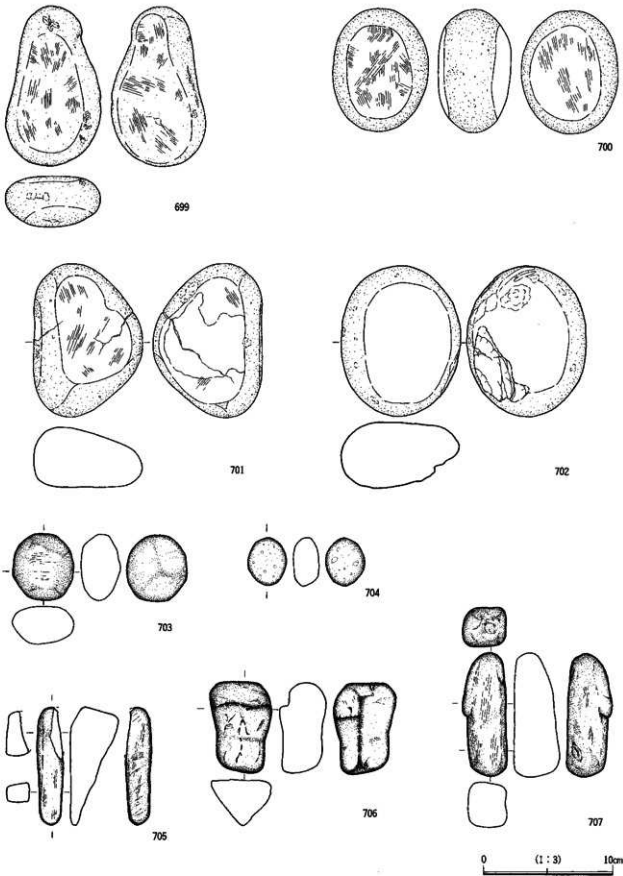


图 VI.105 碟石器 (5)



図VI.106 礫石器(6)

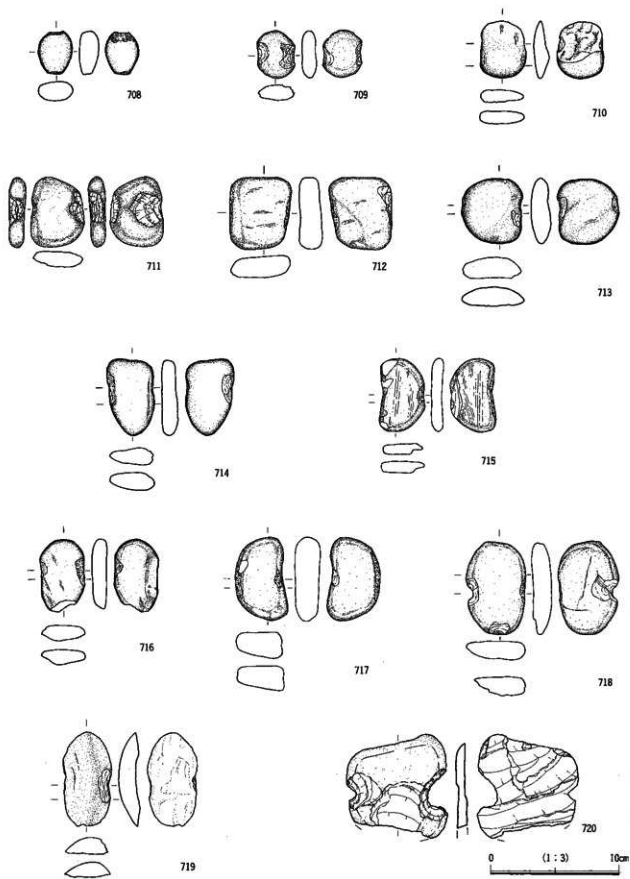
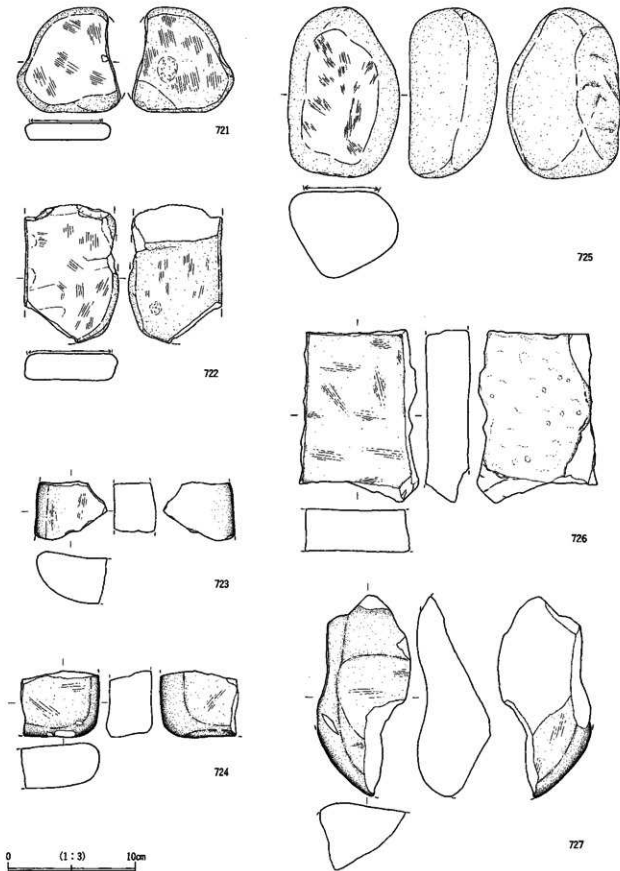


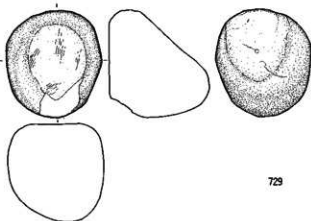
图 V. 107 砾石器 (7)



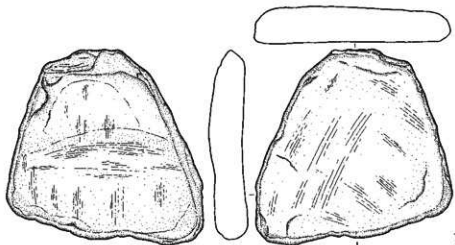
図VI.108 礫石器(8)



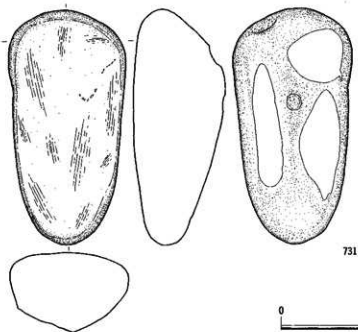
728



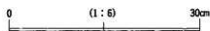
729



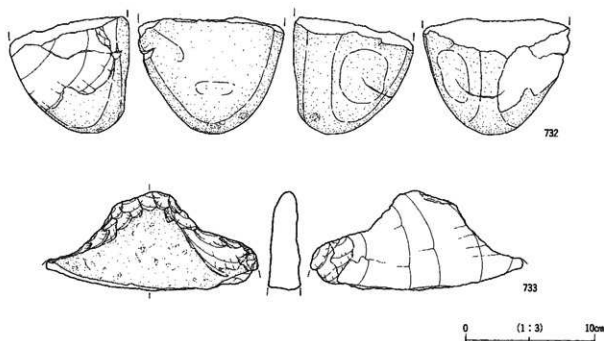
730



731



图Ⅵ.109 礫石器(9)



図VI.110 礫石器(10)

表VI.13 花崗岩の計測表

遺物番号	出土位置 地区 層位	石材	色調	法量 (mm, g)			備考	
				長さ	幅	厚さ		
2722		花崗岩1	淡黄(2.5Y8/4)	55.71	47.40	26.98	92.07	板状を呈する。
966		花崗岩1	灰黄褐(10YR4/2)	98.70	82.72	21.04	185.53	板状を呈する。
3334		花崗岩1	灰白(5Y8/1)	110.87	86.59	22.99	324.28	板状を呈し、腹面が平滑に磨かれる。裏面は赤色化する。
4507		花崗岩1	灰白(5Y8/1)	53.45	37.14	16.40	41.31	板状を呈し、背腹の両面が平滑に磨かれる。
4796		花崗岩1	灰白(5Y8/2)	40.40	29.23	20.88	27.10	
3711		花崗岩1	淡黄褐(10YR8/4)	42.41	27.65	19.82	30.23	板状を呈する。
2832	VI	花崗岩1	淡黄(2.5Y8/4)	46.65	39.54	28.75	70.63	
2023		花崗岩1	灰白(5Y8/1)	63.75	42.69	37.43	128.74	
4453		花崗岩1	灰白(2.5Y8/2)	66.97	60.86	20.78	130.18	板状を呈する。
4493		花崗岩1	灰白(2.5Y8/2)	77.56	69.46	26.20	165.72	
1008		花崗岩1	灰(5Y6/1)	62.48	58.90	40.74	134.93	板状を呈し、背腹の両面が平滑に磨かれる。

表VI.14 礫石器の計測表(1)

神宮番号	遺物番号	出土位置 地区 層位	器種	石材	法量 (mm, g)			重量	備考
					最大長	最大幅	最大厚		
664	1004		磨・敲石	砂岩	7.5	4.5	4.25	192.2	棒状
665	4838		敲石	砂岩	4.9	3.9	3.3	90	棒状
666	4281		敲石	砂岩	6.5	4.6	2.5	110	棒状
667	5237		磨・敲石	砂岩	8.7	4.85	3.2	180	棒状
668	1102		磨・敲石	砂岩	10.55	4.6	3.35	220	棒状
669	4260		磨・敲石	砂岩	4.2	5.35	3.05	110.63	盤形状
670	4037		磨・敲石	砂岩	8.4	6.3	3.25	226.68	楕円状
671	5214		磨・敲石	砂岩	8.4	8.7	4.15	401.6	
672	4473		磨・敲石	砂岩	6.6	5.5	5.0	205.8	
673	4021		磨・敲石	砂岩	10.3	8.2	3.9	521.9	
674	4932		磨・敲石	砂岩	10.7	8.0	4.3	509.6	
675	1289		磨石	砂岩	11.5	9.5	6.0	888.3	

表VI.15 礫石器の計測表(2)

押附番号	遺物番号	出土位置		器種	石材	法 量 (mm, g)			備考	
		地区	層位			最大長	最大幅	最大厚		重量
676	1851			磨・敲石	花崗岩 3	11.6	8.8	5.5	775.5	
677	5224			磨・敲石	花崗岩 3	9.9	9.8	5.1	750	
678	798			磨・敲石	砂岩	10.2	6.6	4.4	337.1	
679	5000			磨・敲石	砂岩	9.8	8.6	5.2	568.8	
680	4221			磨・敲石	花崗岩 3	9.8	9.1	4.55	593.8	背腹の両面の中央に敲打による凹み
681	4362			凹石	海結礫灰岩	10.3	6.0	3.2	198.2	腹面の中央に敲打による凹み
682	7号集石 サンプル1			磨石	砂岩	9.1	8.5	4.45	484.85	12-集石より出土
683	2687			磨石	砂岩	9.05	7.4	3.9	346.21	
684	2855			磨石	砂岩	8.75	8.4	4.1	422.89	
685	4070			磨石	砂岩	8.9	7.0	6.1	507.62	
686	4213			磨石	花崗岩 1	9.6	9.85	6.4	848.83	
687	4212			磨石	花崗岩 1	10.4	10.6	6.9	1040	
688	3301			磨石	砂岩	5.1	4.25	2.9	80.16	
689	2031			磨石	砂岩	6.65	5.75	2.5	139.10	
690	5215			磨石	砂岩	7.2	5.6	3.8	210	
691	846			磨石	砂岩	6.2	5.75	3.9	180.08	
692	4078			磨石	砂岩	6.5	5.0	4.6	207.59	
693	4646			磨石	砂岩	6.8	7.0	5.3	334.3	
694	2038			磨石	砂岩	7.2	5.3	3.6	172.84	
695	2790			磨石	砂岩	7.75	5.0	3.3	188.28	
696	3427			磨石	砂岩	9.0	4.65	2.55	169.97	
697	1197			磨石	砂岩	4.05	4.0	2.1	32.67	
698	1281			磨石	砂岩	7.1	6.5	3.3	242.07	
699	5160			敲石	砂岩	12.6	7.4	4.1	500.1	
700	5001			磨石	砂岩	9.8	7.4	5.7	570.9	
701	4489			磨石	砂岩	12.1	8.6	4.8	650.3	
702	4309			磨石	海結礫灰岩	11.9	9.3	5.2	521.6	
703	1437			(素材)	花崗岩 2	5.2	4.7	3.1	99.23	何らかの素材であろうか
704	3310			(素材)	花崗岩 2	3.75	3.05	2.0	30.27	何らかの素材であろうか
705	887			石製品	砂岩	9.3	2.05	3.65	78.36	
706	4754			石製品	砂岩	7.2	4.75	3.6	147.82	
707	799			石製品	砂岩	9.7	3.4	3.6	186.37	
708	3524			石鏃	砂岩	3.25	2.7	1.55	18.90	
709	1310			石鏃	砂岩	3.8	2.9	1.1	17.68	
710	1856			石鏃	砂岩	4.5	3.6	0.7	23.87	
711	4525			石鏃	砂岩	5.55	4.3	1.4	60	
712	4162			石鏃	砂岩	5.6	4.8	1.75	75.84	
713	1843			石鏃	砂岩	5.15	4.7	1.5	63.21	
714	4470			石鏃	砂岩	6.0	3.7	1.25	46.02	
715	800			石鏃	砂岩	5.75	3.35	0.8	26.97	
716	3971			石鏃	砂岩	5.7	3.55	1.2	35.33	
717	4158			石鏃	砂岩	6.5	3.75	1.9	82.33	
718	4596			石鏃	砂岩	7.2	4.65	1.45	60.43	
719	1894			石鏃	砂岩	7.4	3.85	1.4	45.16	
720	4196			石鏃	砂岩	(8.2)	7.9	0.95	67.3	
721	4499			石鏃	砂岩	8.3	(8.0)	1.4	151.2	石鏃の素材か
722	1863			石鏃	砂岩	(11.0)	(7.4)	(3.3)	286.2	
723	942			石鏃	砂岩	4.45	5.6	3.3	132.40	
724	2394			石鏃	砂岩	5.2	6.15	3.6	188.52	
725	1837			石鏃	砂岩	13.45	8.7	6.9	1099.1	
726	3328			石鏃	砂岩	12.1	8.1	3.2	744	
727	4803			石鏃	砂岩	15.8	6.7	5.6	539.69	
728	4047			石鏃	花崗岩 1	30	25	4.7	6000	
729	e 集石 サンプル1			台石	花崗岩 1	17.2	14.8	15.7	4600	22-集石より出土
730	781			石鏃	砂岩	30.2	30.8	4.7	8000	45-集石より出土
731	集石土坑 8号 サンプルA			石鏃・台石	砂岩	37.5	18.7	14.3	12000	13 集石より出土
732	4384			台石	砂岩	(9.2)	(11.4)	(9.3)	910	
733	5096			礫器	海結礫灰岩	7.8	16.6	2.6	242.5	

第VII章 分析

第1節 分析について

VII章では、今回の調査における自然科学分析の成果について記述する。まず、1節において、分析対象の説明を行い、次いで2節以降に分析結果を掲載する。分析結果については、業務委託先の成果品を掲載している。

1. 23-連穴土坑出土の炭化物の分析

検出面2の23-連穴土坑の覆土中より、植物遺体を思わせる炭化物が良好な状態で多数出土している。炭化物はほぼ底面直上を中心に、比較的広い平面範囲に散在する。遺構の時期は縄文時代早期と考えられ、当時の生業と食料について情報を得るのを目的に分析を実施した。分析は放射性炭素分析・種実遺体同定を実施している。結果は第2・3節に記述している。

なお、出土位置の詳細についてはVI章に記述している。



写真VII.01 23-連穴土坑

2. 土器胎土の分析

VI層・VII層中より出土した土器から、任意に5点を選別して、胎土中の薄片作製観察・珪藻分析・植物珪酸体分析を実施している。5点はいずれも完形に近い個体から抜き出している。分析は土器胎土中の鉱物種類と植物痕跡の情報を得るために行い、それにより土器素材（混和材・粘土）の把握を目的としている。結果は第4節に記述している。



写真VII.02 分析試料

表VII.01 試料一覧

試料	注記	押図番号	色調	混和材	分類
1	VI.543	419	ぶい黄橙 10YR7/4	石英・長石・雲母・黒色砂・赤色砂・石英・長石・黒色砂が多い	9類(塞ノ神式)
2	4183	277~283	ぶい黄褐 10YR5/3	石英・長石・雲母・黒色砂・赤色砂・長石が多い	5類(辻タイプ)
3	1673	352~357	ぶい褐 7.5YR5/4	石英・長石・雲母・黒色砂・赤色砂・黒色砂が多い	8類(山形押形文)
4	VII.2601	50・51	ぶい黄橙 10YR7/3	石英・長石・雲母・黒色砂・赤色砂	3類(石坂式)
5	3716	32~39	ぶい黄橙 7.5YR6/4	石英・長石・雲母・黒色砂・赤色砂	3類-1(石坂式)

※注記の「VI」「VII」は出土層を示す。 ※色調・混和材は肉眼観察による。

※押図番号は同一個体もしくは類似個体を示す。

第2節 横掘遺跡出土試料の放射性炭素年代

パリーノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

横掘遺跡が所在する有明町は、志布志湾に臨む大隅半島北東部に位置する。町の大部分は、いわゆる「シラス」の厚く堆積した台地が広がっている。横掘遺跡の発掘調査では、縄文時代の遺構・遺物が検出されている。今回の分析調査では、それらの中から縄文時代早期とされる土坑中より出土した炭化種子を対象として放射性炭素年代測定を行い、遺構の年代資料を得ることを目的とする。

1. 試料

試料は、縄文時代早期とされる土坑中より出土した炭化種子1点である。

2. 分析方法

測定は、佛地球科学研究所を通じて米国ベータ社による液体シンチレーション法にて行われた。なお、放射性炭素の半減期は、Libbyの5568年が用いられている。

3. 結果

測定結果を表1に示す。測定された年代は約8500年前を示す。

表1 放射性炭素年代測定結果

試料名	測定年代	$\delta^{13}C$ (‰)	同位体補正年代	測定番号
炭化種子	8480±70	-25.4	8470±70	Beta-153792

注。(1)年代値：1,950年を基点とした値。

(2)誤差：標準偏差(ONE SIGMA)に相当する年代

(3) $\delta^{13}C$ ：試料炭素の $^{13}C/^{12}C$ 原子比を質量分析器で測定し、標準にPDBを用いて同様に算出した値

4. 考察

キーリ・武藤(1982)による九州の縄文土器の型式と放射性炭素年代との対応

関係では、早期の年代は10,500~6,900BPとされている。また、南九州における縄文時代の時期区分は、火山灰(テフラ)層との層位関係からも認識されている(桑畑・東, 1997)。これによれば、南九州の縄文時代早期の層位は、桜島を給源とする薩摩テフラ(小林, 1986)と鬼界カルデラを給源とする鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah:町田・新井, 1978)の両テフラに挟まれる土壌層の層位と概ね一致する。薩摩テフラの噴出年代は約11,000年前(奥野, 1997)、K-Ahのそれは約6,300年前(町田・新井, 1978)とされているから、南九州の早期の年代観は、これらのテフラの年代からも得られる。

上述したどちらの年代観にしても、今回得られた約8,500年前という年代は、縄文時代早期を示す。これは、発掘調査所見による土坑の年代観と調和することから、土坑の年代を示している可能性がある。

【引用文献】

- キーリ C.T.・武藤廣弘(1982) 縄文時代の年代。縄文文化の研究 1, p.246-275, 蓬山閣。
小林哲夫(1986) 桜島火山の形成史と大噴流。文部省科学研究費自然災害特別研究。計画研究「火山噴火に伴う乾燥粉体塵(大砂流等)の特徴と災害」(代表者 荒牧重雄)報告書, p.137-163。
桑畑光博・東 和幸(1997) 南九州の火山灰と考古遺物。月刊地球19, p.208-214。
町田 洋・新井勇夫(1978) 南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ層アカホヤ火山灰。第四紀研究, 17, p.143-163。
奥野 光(1997) 桜島テフラ群の放射性炭素(^{14}C)年代学。月刊地球19, p.231-235。

第3節 横堀遺跡出土遺物の分析調査

バリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

横堀遺跡が所在する有明町は、志布志湾に臨む大隅半島北東部に位置する。町の大部分は、いわゆる「シラス」の厚く堆積した台地が広がっている。本遺跡は安楽川沿いに位置し、縄文時代早期を中心とした複合遺跡であることが明らかにされている。

今回、縄文時代早期の土坑から出土した炭化物の種類を明らかにするため、種実遺体同定を実施する。

1. 試料

種実遺体同定を行う試料は、縄文時代早期の土坑から出土した炭化物である。なお、この炭化物は、放射性炭素年代測定により8,470±70BP (Beta-153792) の同位体補正年代が得られている (既報)。

2. 分析方法

双眼実体顕微鏡下で、その形態の特長から種類を同定した。

3. 結果

検出されたものは炭化した鱗茎 (球根) で、100個程度検出された。大きさは1~1.5cm程度。鱗片が何重にも重なっている。ユリ科やヒガンバナ科などの根にみられる、いわゆる「球根」である (形態学的には葉の変化したものである)。

4. 考察

縄文時代早期の土坑から検出された炭化物は、鱗茎であった。鱗茎は取量が多く、保存が利くことから古くから食用として利用されてきた。貯蔵されていたものが火熱に遭い、炭化したものと思われる。鱗茎は、古くから植物質食料として重要であったと考えられているが (辻, 1994)、粉碎して澱粉を採集するため遺物として残りにくく、群馬県北橋村北町遺跡での検出例 (高橋・田中, 1996) など数例あるだけで、出土例は少ない。おそらく、当時、本地域でも重要な有用植物の一つであったと推定される。

【引用文献】

- 辻 秀子 (1994) 可食植物の概観。「縄文時代の研究 生業 (第2版)」, 加藤晋平・小林達雄・藤本 登編, p.18-41, 雄山閣。
 高橋 敦・田中義文 (1996) 北町遺跡から出土した炭化材・種実遺体の同定。「北橋村埋蔵文化財発掘調査報告書第18集 北町遺跡・田ノ保遺跡 一平成5・6年度主要地方道渋川・大胡線特殊改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」, p.347-355, 北橋村教育委員会。



1 cm

①磷茎 (球根)
②磷茎 (球根)



1 cm

写真1 炭化物

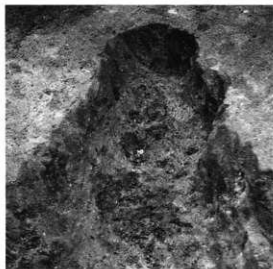
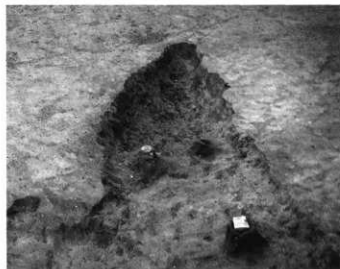


写真2 炭化物の出土状況

第4節 横堀遺跡出土縄文土器の胎土分析

パリオ・サーヴェイ株式会社

はじめに

鹿児島県曾根郡有明町に所在する横堀遺跡では、縄文時代早期とされる土器が出土している。土器は、型式学的特徴や製作技法上の特徴、さらには胎土の外見的特徴などの発掘調査所見から、その製作に関わる事情が複雑であることが予想された。

今回の分析調査では、土器胎土の特徴を、岩石学や地質学をはじめとする自然科学的手法によって把握し、胎土を構成している砂をはじめとする混和材や素地の主体となっている粘土の由来などを検討する。

1. 試料

試料は、横堀遺跡から出土した縄文時代早期とされる土器片5点である。試料には、試料1～試料5までの試料名が付され、それぞれ順に、「横堀 VI 543」、「横堀 4183」、「横堀 1673」、「横堀 VII 2601」、「横堀 3716」と注記されている。

2. 分析方法

ここでは、土器胎土の特徴を把握するために、岩石学的手法を応用して土器断面の薄片を作製し、偏光顕微鏡による観察を行う。また、微化石分析については、土器片を粉砕し粉末にした状態から処理を行う。以下に各方法について述べる。

(1) 薄片作製観察

薄片は、試料の一部をダイヤモンドカッターで切断、正確に0.03mmの厚さに研磨して作製した。薄片は偏光顕微鏡による岩石学的な手法を用いて観察し、胎土に含まれる鉱物片、岩石片および微化石の種類構成を明らかにする。また胎土の基質については、孔隙の分布する程度と砂の配列や孔隙などに方向性が認められるかどうか、および基質を構成する粘土が焼成によりどの程度ガラス化してどの程度粘土鉱物として残存しているかということと、酸化鉄などの鉄分の含まれる程度について定性的に記載した。

(2) 珪藻分析

土器を粉砕し、5g前後秤量する。過酸化水素水、塩酸で加熱処理した後、自然沈降法で珪藻化石を分離・濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈したあと、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸400倍あるいは600倍で行い、メカニカルステージでカバーガラス全面を走査する。

(3) 植物珪酸体分析

土器胎土試料をアルミナ製乳鉢で粉砕し、過酸化水素水-塩酸処理、沈定法、超音波処理(70W, 250KHz, 1分間)、重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム, 比重2.5)の順に物理化学処理を行い、植物珪酸体を分離濃集する。検鏡しやすい濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。

400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)、およびこれらを含む珪化組織片を近藤・佐瀬(1986)の分類に基づいて同定し、計数する。

結果は、検出された種類とその個数の一覧表で示す。

表1 土器胎土薄片観察結果

試料名	注記	砂粒		砂粒の種類構成										備考									
		粒度	重量	鉱物片					岩石片						合重量	粘土成分量	方向性	孔隙率					
				石英	カウタ石	網子石	斜方晶石	早稲餅石	黒雲母	角閃石	緑泥石	シムロン	不透明鉱物	凝灰石	輝石	流紋石	花崗岩	粘土塊	火山ガラス	植物残渣			
試料1	横瀬 VI 543	○ × 3.0	△	+	○	+	+	+		+	△	△		○					+			+	葉地は表面付近で褐色、内部で黒褐色を示す。火山ガラスは軽石型。
試料2	横瀬 4183	○ × 4.0	○	△	+	+	+	+	△	+	+	+			+	△			+			+	葉地粘土は雲母質。火山ガラスは軽石型。
試料3	横瀬 1673	○ × 2.2	○		△	+	+	+	+	+		△	+			+			△	△	△	+	火山ガラスは軽石型およびパブルウォール型。
試料4	横瀬 VII 2601	○ × 1.7	△		○	+	+	+		+		+				+			△	△	△	+	火山ガラスは軽石型。
試料5	横瀬 3716	○ × 1.5	△		○	+	+	+		△		+			+	+			△	+	○	+	火山ガラスは軽石型およびパブルウォール型。

量比 ○：多量 △：中量 ○：少量 +：微量 ×：なし
 程度 ●：強い ○：中程度 △：弱い ×：なし

3. 結果

(1) 薄片作製観察

観察結果を表1に示す。5点の試料の胎土には、粒径の淘汰度の不良な中量程度の砂が含まれるが、鉱物片と岩石片の産状は、試料2とそれ以外の4点とで大きく分けることができる。

試料2は、鉱物片では石英が多く、これに次いでカリ長石と黒雲母とが比較的多い。他に微量の斜方輝石、単斜輝石、角閃石などを含む。また、岩石片では、花崗岩が比較的多く認められ、他に軽石や粘土塊、火山ガラスなども微量認められる。

一方、試料2を除く4点の試料では、鉱物片では石英と斜長石が多く、4点の中の傾向としては斜長石の方がやや多いように見える。他に微量の斜方輝石、単斜輝石、角閃石を含む。また、カリ長石および黒雲母は微量かほとんど含まれない。なお、試料5は角閃石を少量含む。岩石片では、凝灰岩と流紋岩および火山ガラスを含むことが特徴である。特に試料1は、凝灰岩と流紋岩を多く含む。

(2) 珪藻分析

5点の試料は、いずれも無化石であった。よって、珪藻分析結果から土器胎土を構成する粘土の由来を推定することはできない。なお、珪藻化石が1,400℃位まで溶解や変形に耐えられる(Matiskainen, H. and Alhonen, P. 1984)ことを考慮すると、土器焼成の際に珪藻化石が熱によって溶解してしまったとは考えられない。すなわち、今回の試料では珪藻化石が元々含まれていない粘土を利用した可能性が高い。

(3) 植物珪酸体分析

結果を表2に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔(溶食痕)が認められる。いずれの試料からも、イネ属などの栽培植物に由来する植物珪酸体は全く認められない。

試料1ではダンク型の不短細胞珪酸体、試料3ではウシクサ族の機動細胞珪酸体などがわずかに認められるに過ぎない。試料番号2、4、5ではタケ亜科やウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが認められる。胎土薄片観察用のプレパラートについても観察したところ、粉碎した試料と同様な種類が認められる。なお、先に調査した上苑遺跡などの土器胎土では樹木起源珪酸体などがわずかに見られたが、今回は全く認められない。

表2 土器胎土植物珪酸体分析結果

種 類	試料				
	1 横堀 VI 543	2 横堀 4183	3 横堀 1673	4 横堀 VII 2601	5 横堀 3716
イネ科葉部短細胞珪酸体					
タケ亜科	-	3	-	31	16
ヨシ属	-	2	-	-	-
ウシクサ族ススキ属	-	4	-	2	-
イチゴツナギ亜科	-	6	-	4	2
不明キビ型	-	17	-	1	1
不明ヒゲシバ型	-	12	1	9	-
不明ダンク型	1	18	1	7	-
イネ科葉身機動細胞珪酸体					
タケ亜科	-	-	-	8	17
ウシクサ族	-	9	2	19	10
不明	-	17	2	28	21
合 計					
イネ科葉部短細胞珪酸体	1	62	2	54	19
イネ科葉身機動細胞珪酸体	0	26	4	55	48
総 計	1	88	6	109	67

4. 考察

(1) 胎土の由来する地質

鹿児島県地質図編集委員会(1990)による地質図では、有明町のほぼ全域が、後期更新世に始良カルデラより噴出した火砕流堆積物いわゆるシラスにより構成されている台地からなり、それ以外の地質としては、シラスの台地を刻む谷に堆積する沖積層と、局所的に分布する新第三紀の砂岩・頁岩からなる残丘が認められる程度である。今回の試料のうち、試料2を除く4点の胎土に認められた斜長石の多い特徴や凝灰岩および流紋岩の岩石片を含むという特徴は、シラスの分布する地質に由来すると考えられる。すなわち、これら4点の土器の材料となった砂や粘土は、横堀遺跡またはその周辺域(現時点ではシラス台地の分布域としか言えないが)の堆積物に由来する可能性が高い。

一方、試料番号2の胎土から推定される地質学的背景は、黒雲母花崗岩あるいは黒雲母角閃石花崗閃緑岩などの岩石の分布域である。上述のように現在の有明町域内には、このような地質は認められないことから、試料2は、横堀遺跡出土土器としては、周辺の地質とは異質の胎土であるということができると考えられる。すなわち、花崗岩類の分布する地域からの搬入品である可能性が高い。

有明町の周辺における花崗岩類の分布は、上述の地質図からは、大隅半島南部の高山町から佐多町、根占町まで広く分布する大隅花崗閃緑岩(日本の地質「九州地方」編集委員会, 1992)を認めることができる。詳細には、多くの岩体に分類されているが、概ね黒雲母花崗閃緑岩～黒雲母花崗岩を主体とした記載がされており、今回の試料2の胎土が由来する地質としては調和的である。したがって、試料2の土器胎土は、大隅花崗閃緑岩の分布域に由来する可能性があるといえる。しかし、大隅花崗閃緑岩とはほぼ同質の花崗岩は、同じ大隅半島内の高隈山周辺にも分布している。また、大隅半島外の地域まで広がれば、鹿児島県北西部の紫尾山周辺や海を隔てた屋久島にも、比較的広い花崗岩類の分布が知られている。現時点では、試料2の胎土の由来する地域が、これらの遠隔地である可能性を否定することもできない。また、大隅花崗閃緑岩の分布域に限定された場合でも、その分布域内における地域の限定も求められると考えられる。これらの課題については、今後の有明町およびその周辺域における分析例の蓄積が必要と考えられる。

(2) 胎土における植物珪酸体の産状から

植物珪酸体の産状からは、植物珪酸体がわずかにしか認められない試料1と3のグループ、タケ亜科やウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが認められる試料2、4、5のグループに分けられる。前述した砂粒の特徴による分類と合わせれば、試料2を除く4点が、さらに試料1、3と試料4、5の2点ずつのグループに分けられるということになる。前述のように胎土中の砂粒の特徴からは、試料2を除く4点は、横堀遺跡またはその周辺域に由来するとして一括したが、植物珪酸体の産状により、これら4点の中においても最低2つの異なる製作事情(製作者、製作地、製作時期など具体的なことはわからない)が含まれている可能性があると考えられる。

なお、植物珪酸体はガラスに近い性質を持つため、素地や混和材などの材料となる粘土や砂に含まれていた場合には、焼成した後も胎土中にほとんど残る。したがって、その産状は材料となった砂や粘土の由来を反映すると考えられる(辻本・伊藤, 1995)。今回検出された種類は、集落周辺の開けた場所に生育する。このことから、今回の試料となった土器の材料は集落周辺のイネ科植物が生育するような開けた場所から採取されていたと考えられる。また、試料2で検出されたヨシ属は湿潤な場所に生育する種類であることから、湿潤な場所の堆積物も混在している可能性もあると考えられる。

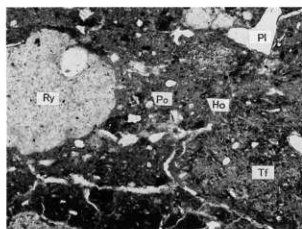
また、先に調査した有明町内の遺跡から出土した縄文時代晩期や古墳時代とされる土器胎土では、照葉樹に由来すると思われる植物珪酸体が出された。しかし、今回の土器胎土からは全く認められなかった。照葉樹林に由来する植物珪酸体について杉山(1999)は、九州南部の台地上では霧島御地軽石(約4200年前)以降の土層から認められるとしている。今回の試料はいずれも縄文時代早期とされているから、照葉樹林に由来する植物珪酸体が認められなかったことは、上記の杉山の分析例と調和する結

果といえる。さらに今回の試料からは、植物体の混入を示唆する珪化組織片も認められなかった。したがって、イネ科草本類の植物体が混和材として用いられた可能性は低い。

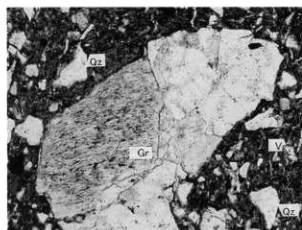
今後も、土器胎土の特徴から土器製作に関わる情報を得るためには、今回のように、胎土の岩石学的な特徴と微化石の産状を合わせて検討し、さらに周辺に分布する堆積物についても同様の分析を行い、比較検討するなど総合的な分析調査の展開が必要と考えられる。

【引用文献】

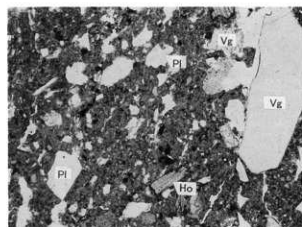
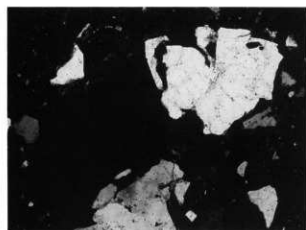
- 鹿児島県地質図編集委員会, 1990, 鹿児島県地質図 縮尺10万分の1, 鹿児島県.
- 近藤謙三・佐瀬 隆, 1986, 植物珪酸体分析, その特性と応用, 第四紀研究, 25, 31-64.
- Matiskainen, H. and Alhonen, P., 1984, Diatoms as Indicators of Provenance in Finnish Sub-Neolithic Pottery. *Journal of Archaeological Science* 11, 147-157.
- 日本の地質「九州地方」編集委員会, 1992, 日本の地質9 九州地方, 共立出版, 371p.
- 杉山真二, 1999, 植物珪酸体分析からみた晩新石器以降の九州南部における黒葉樹林発達史, 第四紀研究, 38, 109-123.
- 辻本孝夫・伊藤良水, 1995, 市兵衛谷遺跡第Ⅱ群土器の製作技術について—分析調査結果の解釈から—, 綾瀬市埋蔵文化財調査報告4「市兵衛谷遺跡・新道遺跡—綾瀬市における縄文早期遺跡の研究—」, 綾瀬市教育委員会, 108-125.



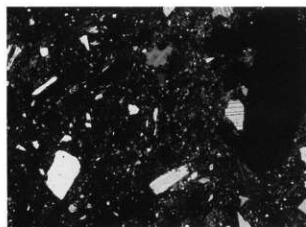
1. 試料1 横堀 VI 543



2. 試料2 横堀 4183



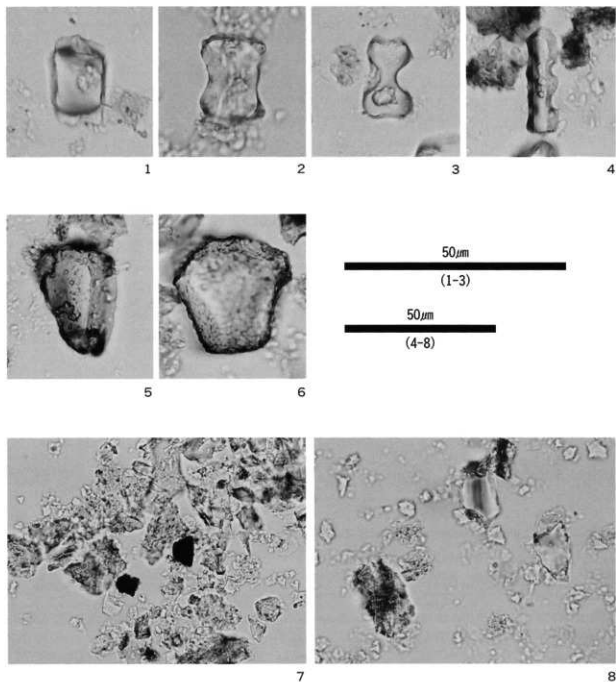
3. 試料5 横堀 3716



Qz：石英，Pl：斜長石，Ho：角閃石，Tf：凝灰岩，Ry：流紋岩，Gr：花崗岩。
 Vg：火山ガラス，Po：植物珪體。
 写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm

写真1 胎土薄片



- | | |
|------------------------------|---------------------------------|
| 1. タケ亜科短細胞珪酸体(試料2 横場 4183) | 2. タケ亜科短細胞珪酸体(試料4 横場 VII 2601) |
| 3. ススキ族短細胞珪酸体(試料2 横場 4183) | 4. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体(試料2 横場 4183) |
| 5. ウシクサ族機動細胞珪酸体(試料2 横場 4183) | 6. タケ亜科機動細胞珪酸体(試料4 横場 VII 2601) |
| 7. 状況写真(試料1 横場 VI 543) | 8. 状況写真(試料2 横場 4183) |

写真2 植物珪酸体・珪藻分析プレパラート内の状況写真

第八章 まとめにかえて

はじめに

今回の報告書作成では、十分な検討はおろか、記録としても不十分¹であることから、調査成果をまとめるに至っていない。そのため報告書作成を担当した者として気づいた点を中心に略述し、まとめにかえた。

1. 検出面1（縄文時代早期以降）について

検出面1については遺物・遺構がともに少なく、詳しいことは不明である。しかし、今回の調査では、V層上面の土坑1がおとし穴状遺構と考えられ、時期は遺構の性格と検出面・覆土から縄文時代後期頃と推定される。さらにII層上面の溝が近代と考えられる。以上のことから、次のことが考えられる。

後述する縄文時代早期以降に、調査地点は居住範囲から離れた地点と化し、縄文時代後期ではおとし穴状遺構が築かれる程度の人の生活域から離れた場所となっている。その後についても遺構が見られないことから、近代に耕地化するまでは同様もしくは類似の状況が続いたと考えられる。

今後、プラント・オパール分析などの自然科学分析を行うことで、植生の変遷などから、遺構として検出されない時期における耕地化などの土地の利用状況を把握する必要がある。

2. 検出面2（縄文時代早期）について

報告した遺構の多くは、諸事情により詳細な年代が把握できていない。そのため時期別の記述ができないため、遺構ごとに述べる。

集石

今回の調査では礫の集中が見られた範囲をすべて集石遺構として報告している。しかし、その成果をまとめるにはいくつかの問題点が存在する。問題点は、先ず包含層が黒色土であるため生活面の把握が難しく、検出面が当時の生活面と大きく離れている点である。次いで集石の廃棄状況がそれぞれ異なり、集石として把握する礫集中範囲の高さ（検出面）が異なる点である。そのため、検出した各集石の様相は大きく異なり、構成礫ひとつでも個数が最大約623個から最小約23個と大きな差がある。そして、検出面の上下の差異が直接的に年代観として利用できないという結果を招き、供伴遺物がない時には時期不明となる。

以上の状況から、集石については具体的な記述を避け、今後の課題について若干記述する。

集石の性格などの把握には、調査中に十分な土層の検討が必要である。とくに構築するに際して掘り込みを築いている層と遺構内の覆土との関係が重要である。そのためには黒色土層の詳細な分層を行い層ごとに遺構検出を実施するか、もしくは任意の高さごとに遺構の検出を行い、正確な上下差を把握する必要がある。そのうえで埋没状況がどのような廃棄状況を示すかの検証を行うべきと考えられる。

連穴土坑

今回、連穴土坑と考えられるものは3基と少ない。しかし、遺存状態は良好で24一連穴土坑には「ブリッジ部」が残り、23一連穴土坑は鱗茎を貯蔵していた可能性も持っている。この23一連穴土坑には掘り出し想定される小土坑に貯蔵の可能性をもつ鱗茎が出土し、燃焼部及び足場と考えられる土坑には被熱を受けた痕跡はあるが破砕の少ない礫が集中する。これらのことから連穴土坑を使用後に食材や礫の貯蔵・収蔵の施設として用いられた可能性も持っている。また、礫の収蔵施設以外にも集石遺構として凹みを利用し、燃焼を伴う行為が行われた可能性も考えられる。

土器

Ⅶ章においては上野原遺跡（国分市）²の編年観に沿って中葉・後葉に分け報告したが、分布状況から次のことが言える。

土器分類ごとの分布の推移は、数量の少ない土器1類・2類・10類を除くと、大きく2つに分けることができる。ひとつは土器3類から6類まで、もうひとつは土器7類から9類までである。前者は分布の中心が徐々に西に移る。後者は徐々に数量が増加している。この場合、土器8類の所在がⅦ章で前述した時期と異なることとなり、今後、層中における上下の検討が必要と考えられる。

また、土器3類とした土器群は「石板式」に比定されるが、典型的な「石板式」と考えられる土器群以外に、前段階とされる「吉田式」に近い土器（32～49）³があり、その他にも文様などが大きく異なる土器群⁴が存在する。今後、細分などの検討が必要と考えられる。

土器5類とした土器群は「辻タイプ」と考えられ、今回、2個体分が出土している。「ハ」字状に施された刺突文が特徴であるが、刺突には直線状と弧状のものが見られる。弧状のものについては同一方向に弧を描いている。これらのことから用いられた施文具について考えると直線状のものはヘラ状工具、弧状は分離した二枚貝の腹縁などが使用されたと考えられる。さらに「ハ」字状の文様自体が口の開いた二枚貝を横に刺突した場合と同様の形となることから、文様がこの形を意識していた可能性が考えられる。

土器胎土については自然科学分析を試み、その由来を探ったところⅦ章に記述のとおりいくつかの成果を挙げることができている。とくに胎土中の鉱物の把握では、町内では産出しなない雲母を含むことが指摘されており、肉眼観察の結果とも一致している。

土製品

耳栓については、供伴遺物が存在しないが出土地点の周辺には土器7～9類が多く、鹿児島県下における事例⁵から土器9類（塞ノ神式）に伴う可能性が高いと考えられる。

石器

礫石器が多く出土しており、完形の石皿などは町内では初めてとなる。とくに石鍾はまとまった量が出土しており、台地下を流れる安楽川での漁労の可能性が考えられる。

1 遺構については、残された調査記録をまとめたものであり、具体的な時期の検討などを行っていない。土製品・石器についても同様である。土器の分布状況は平面分布のみを掲載しており、垂直方向での土器分類ごとの上下関係について検証も行っていない。

2 森田郁朗・今村敏照・中村和美・黒川忠広 2002 『上野原遺跡』 鹿児島県立埋蔵文化財センターを参照。

3 前迫亮一氏（鹿児島県立埋蔵文化財センター）のご教授による。

4 前迫亮一氏の提唱される「石板Ⅱ式」にあたと考えられる。前迫亮一 2003 「石板式土器再考」『縄文の森から』創刊号 鹿児島県立埋蔵文化財センターを参照。

5 新東晃一氏（鹿児島県立埋蔵文化財センター）のご教授による。

【参考文献】

有明町教育委員会の刊行図書

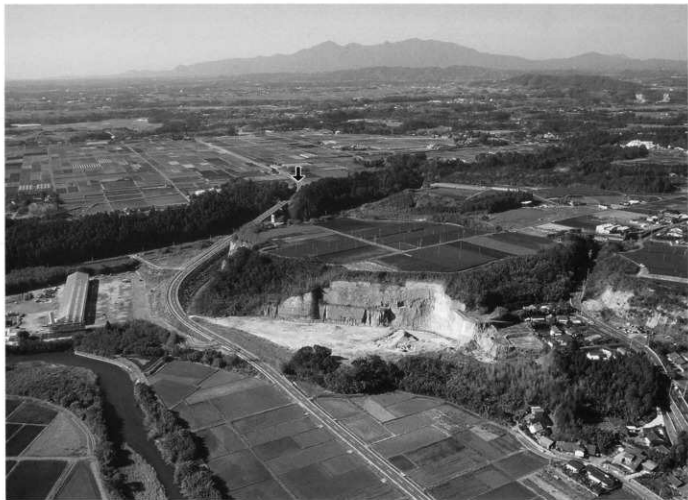
- 有明町郷土史編さん委員会 昭和55年 『有明町誌』 有明町
- 有明町文化財保護審議委員会 昭和49年 『有明町の文化財 第1集』 有明町教育委員会
- 有明町文化財保護審議委員会 昭和51年 『有明町の文化財 第2集 - 遠原・野井合の園田史 -』 有明町教育委員会
- 有明町文化財保護審議委員会 昭和54年 『有明町の文化財 第3集 - 有明町のタノカンサア -』 有明町教育委員会
- 有明町文化財保護審議委員会 昭和55年 『有明町の文化財 第4集 - お地蔵さんと観音さま -』 有明町教育委員会
- 有明町文化財保護審議委員会 昭和56年 『有明町の文化財 第5集 - 早馬どんと水神さま -』 有明町教育委員会
- 有明町文化財保護審議委員会 昭和57年 『有明町の文化財 第6集 - 伝説 -』 有明町教育委員会
- 有明町文化財保護委員会 昭和58年 『有明町の文化財 第7集 - わかし話 -』 有明町教育委員会
- 有明町文化財保護委員会 昭和58年 『有明町の文化財 第8集 - おどりと民謡 -』 有明町教育委員会
- 有明町文化財保護審議委員会 昭和61年 『有明町の文化財 第9集 - いしふみをたずねて -』 有明町教育委員会
- 有明町文化財保護審議委員会 昭和61年 『有明町の文化財 第10集 - 戦争体験記 -』 有明町教育委員会
- 有明町文化財保護審議委員会 平成元年 『有明町の文化財 第11集 - 祭りと謡 -』 有明町教育委員会
- 有明町文化財保護審議委員会 平成2年 『有明町の文化財 第12集 - 伊崎田和紙の歴史と伝承 -』 有明町教育委員会
- 有明町文化財保護審議委員会 平成3年 『有明町の文化財 第13集 - 昔の地名 -』 有明町教育委員会
- 有明町文化財保護審議委員会 平成5年 『有明町の文化財 第14集 - 昔の方言 -』 有明町教育委員会
- 有明町文化財保護審議委員会 平成7年 『有明町の文化財 第15集 - 昔のあそび -』 有明町教育委員会
- 有明町文化財保護委員会 平成9年 『有明町の文化財 第16集 - 昔の慣習 -』 有明町教育委員会
- 有明町教育委員会 昭和56年3月 『鹿児島県無形民俗文化財 熊野神社神舞保存記録報告書』 有明町教育委員会
- 牛ノ浜修一・中村耕治・柴榮久志 1985 『札元遺跡、山原遺跡』 有明町埋蔵文化財発掘調査報告書(1) 有明町教育委員会
- 出口順一朗・宍田秀人 2003 『長口遺跡』 有明町埋蔵文化財発掘調査報告書(2) 有明町教育委員会
- 東藤志・中水忍・出口順一朗 2003 『黒嘉遺跡(第1次・第2次)、牧原遺跡、牧原A遺跡、大迫遺跡、熊野A遺跡、本村遺跡』 有明町埋蔵文化財発掘調査報告書(3) 有明町教育委員会
- 出口順一朗・黒川忠広 2003 『鹿嶋当遺跡、楠原遺跡』 有明町埋蔵文化財発掘調査報告書(4) 有明町教育委員会
- 東藤志・中水忍 2004 『上荒遺跡』 有明町埋蔵文化財発掘調査報告書(5) 有明町教育委員会
- 東藤志・松崎卓朗・中水忍 2004 『浜場遺跡、下塚遺跡』 有明町埋蔵文化財発掘調査報告書(6) 有明町教育委員会
- 出口順一朗・中水忍・宍田秀人・横手浩二郎・東藤志 2005 『仕明遺跡』 有明町埋蔵文化財発掘調査報告書(7) 有明町教育委員会
- 河口真徳 昭和63年 『日本の古代遺跡38 鹿児島』 保育社
- 原口泉・永山修一・日隈正守・松尾千歳・皆村武一 1999 『鹿児島県の歴史』 県史46 山川出版社
- 新東晃一 1989 『九州貝殻文円筒土器様式』 『縄文土器大観』 1 小学館
- 新東晃一 1989 『蕉ノ神・平槽式土器様式』 『縄文土器大観』 1 小学館
- 新東晃一 1997 『縄文時代早期伊穴の復元』 『南九州縄文通信』 No.11 南九州縄文研究会
- 南九州縄文研究会 1998 『九州縄文土器編年の疑問-早期後半土器編年の現状と課題』 九州縄文研究会鹿児島資料集
- 南九州縄文研究会 2002 『南九州縄文集成1 南九州貝殻文系土器』 I~鹿児島県~
- 南九州縄文研究会 2003 『南九州縄文集成2 南九州貝殻文系土器』 II~宮崎・熊本・大分編~
- 九州縄文研究会・宮崎県考古学会 2003 『九州縄文時代の集石遺構と伊穴』 第13回 九州縄文研究会 宮崎大会 資料集
- 八木澤一郎 1992 『鹿児島県下の縄文期集石』 『南九州縄文通信』 No.6 南九州縄文研究会
- 八木澤一郎 1994 『南九州の集石遺構』 『南九州縄文通信』 No.8 南九州縄文研究会
- 雨宮瑞生 1997 『煙道付き伊穴の設計図』 『南九州縄文通信』 No.11 南九州縄文研究会
- 前迫亮一 2000 『第V章 発掘調査のまとめ』 『大中原遺跡』 鹿児島県肝属郡根占町教育委員会
- 前迫亮一 2003 『石版式土器再考』 『縄文の森から』 新刊号 鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 森田郁朗・今村敏照・中村和美・黒川忠広 2002 『上野原遺跡』 鹿児島県立埋蔵文化財センター

圖 版



調査地遠景 (1)

※北東より



※矢印下が調査地

調査地遠景 (2)

※上段：北東より、下段：北より



※昭和49年撮影

空中写真

※国土画像（カラー空中写真）国土交通省より



検出面1 土坑1
(おとし穴状遺構)



検出面2 VI・VII層
遺物分布状況
(グリッドB4から北西を望む)



検出面2 VI層
3～6-集石 検出状況
(北東より)

検出面2 VI・VII層
遺構検出状況
(グリッドA9から南東を望む)



検出面2 VII層
11-集石



検出面2 VI・VII層
遺構検出状況 (グリッドD13)
(北東より)





① 3-集石 ② 4-集石 ③ 5-集石 ④ 6-集石 ⑤ 13-集石



①



②



③



④



⑤



⑥

① 8-集石(下)、9-集石(上) ② 18-集石(下)、19-集石(上) ③ 20-集石(下)、21-集石(上) ④ 21-集石
⑤ 22-集石 ⑥ 31-集石



① 34-集石 ② 35-集石 ③ 36-集石 ④ 37-集石 (最終検出状況) ⑤ 37-集石 ⑥ 38-集石



①・② 44-集石 ③ 46-集石 ④ 47-集石 ⑤ 23-連穴土坑 ⑥ 24-連穴土坑



28



30



31



23



25



21



26



24



40



34



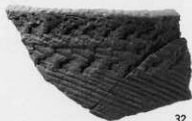
33



35



66



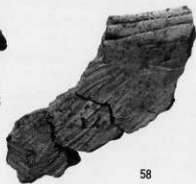
32



52



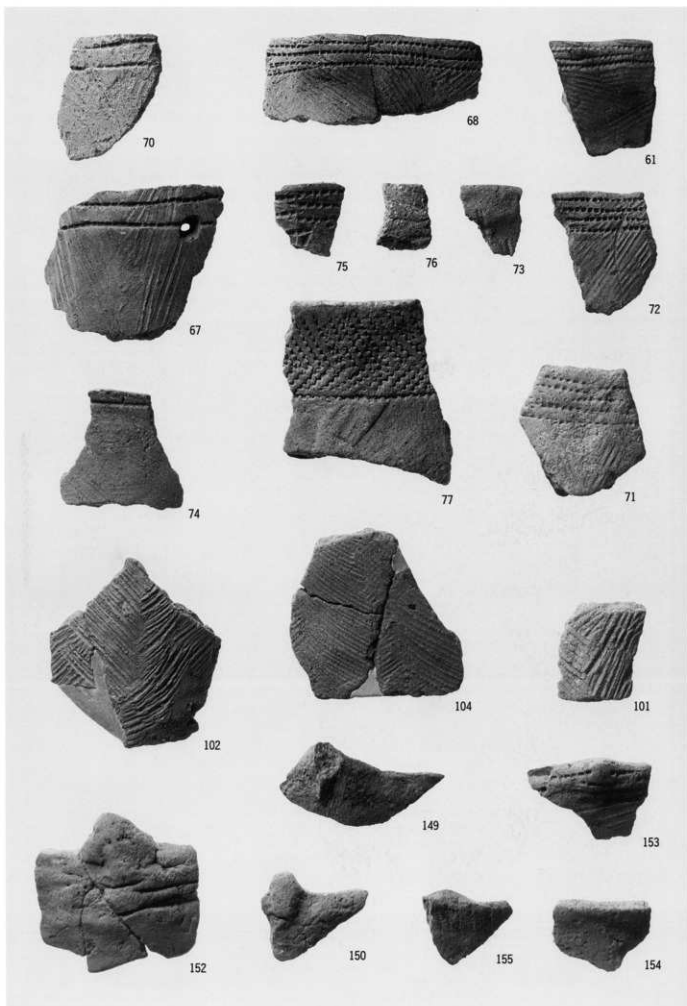
45



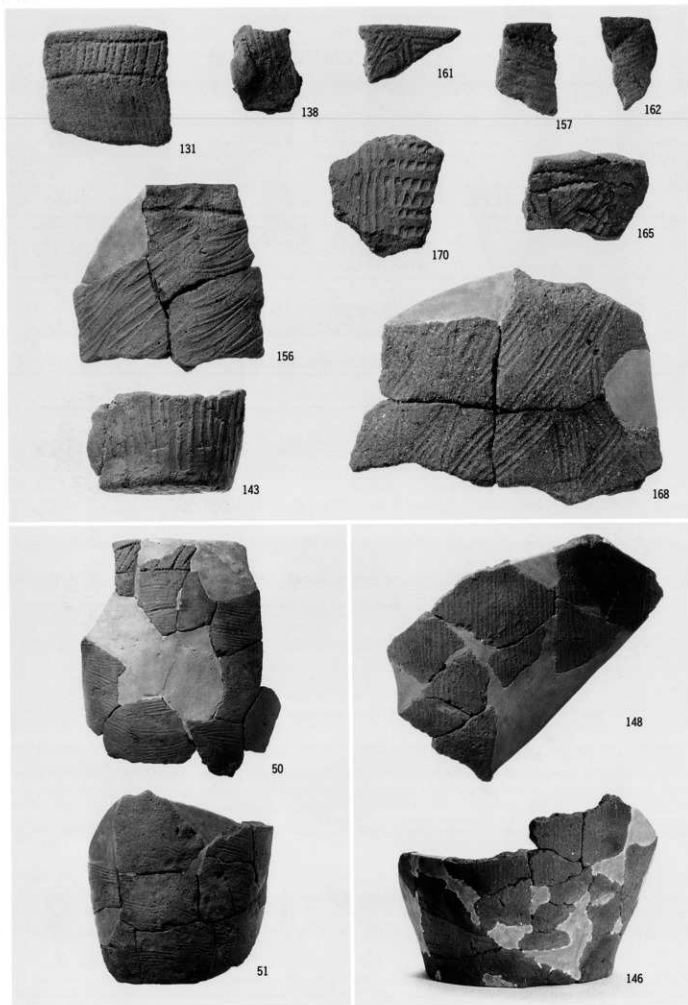
58

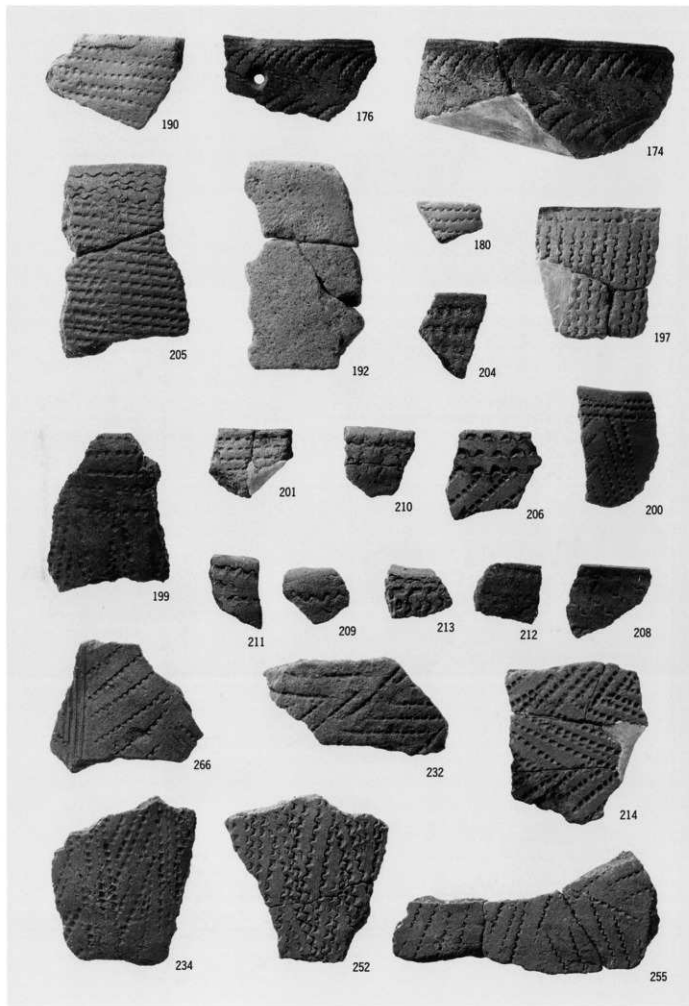


57

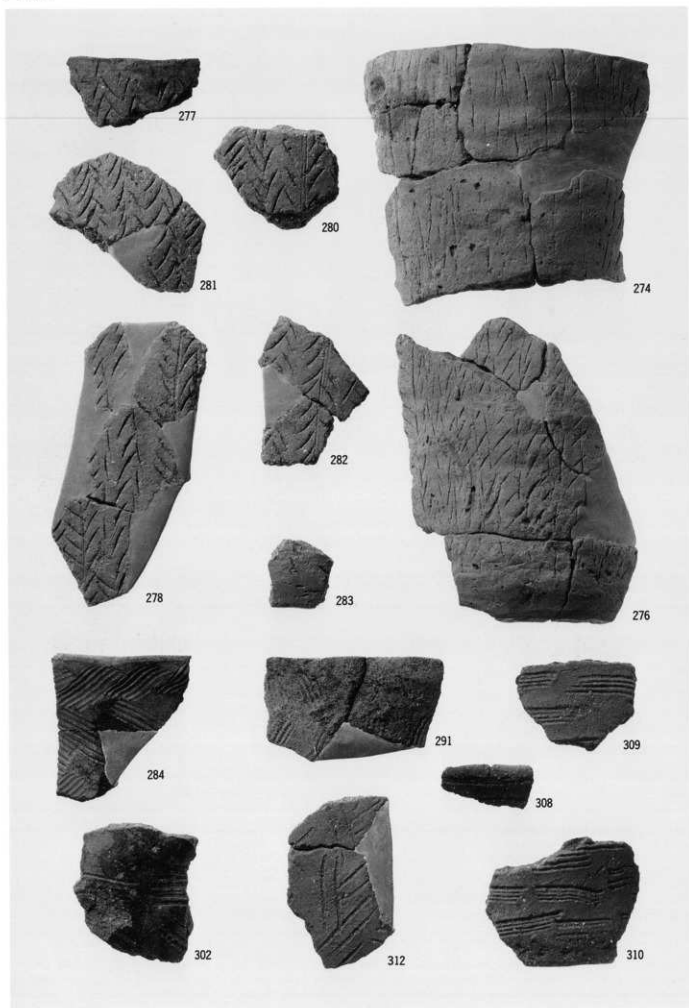


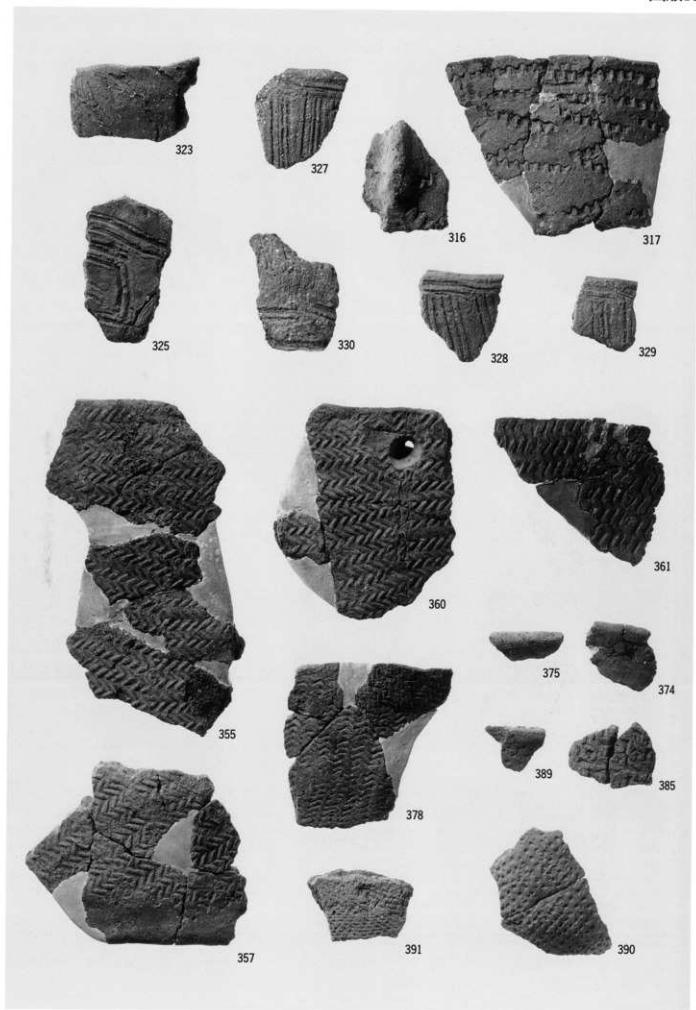
土器3類(1)





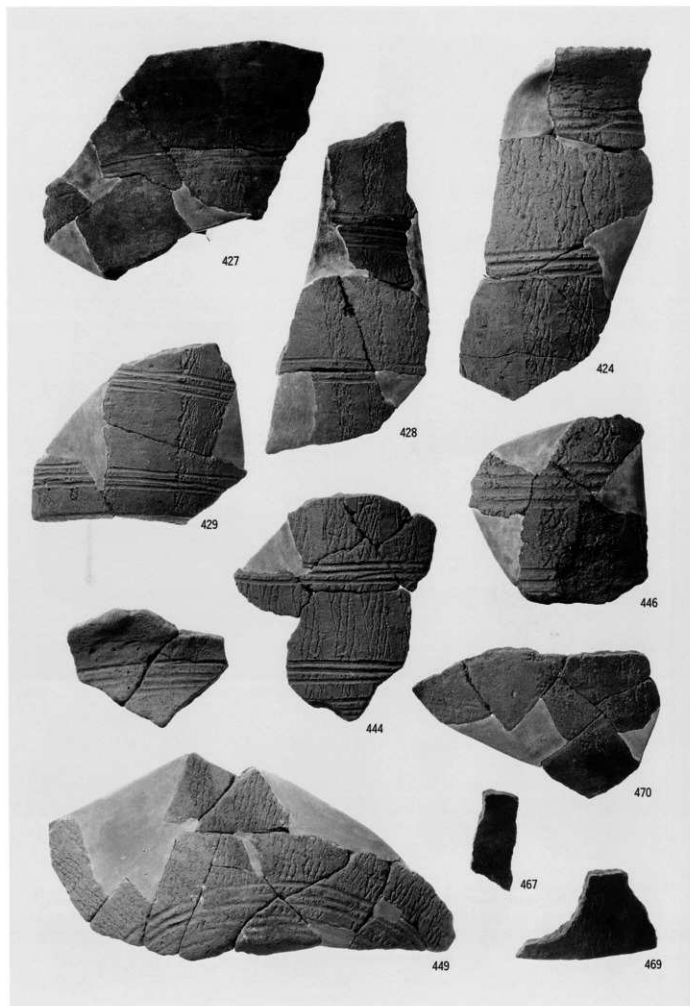
土器4類



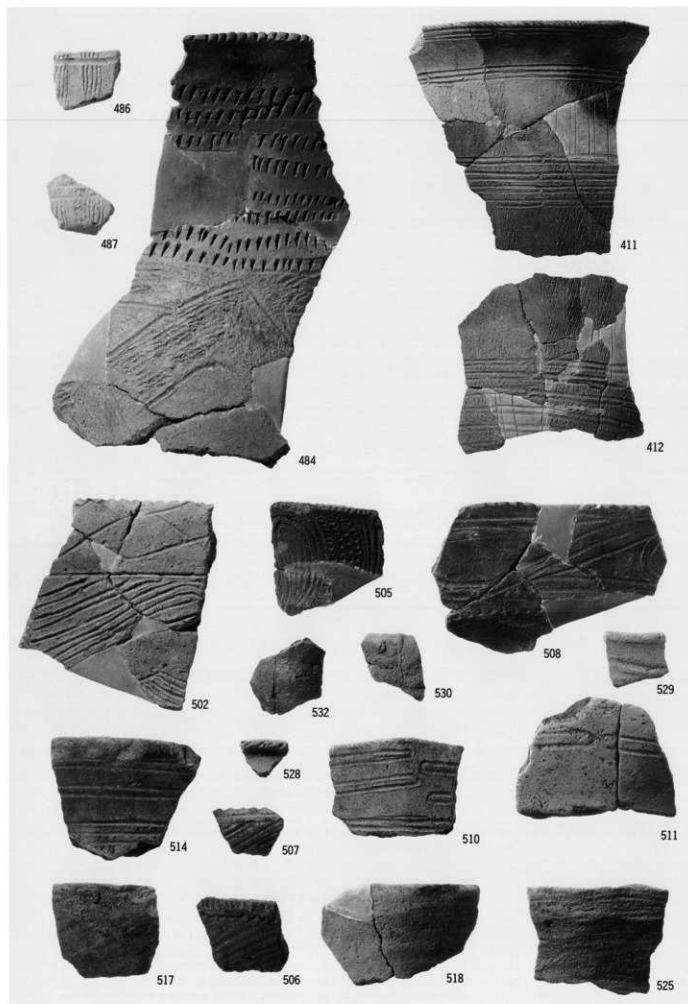


土器7・8類

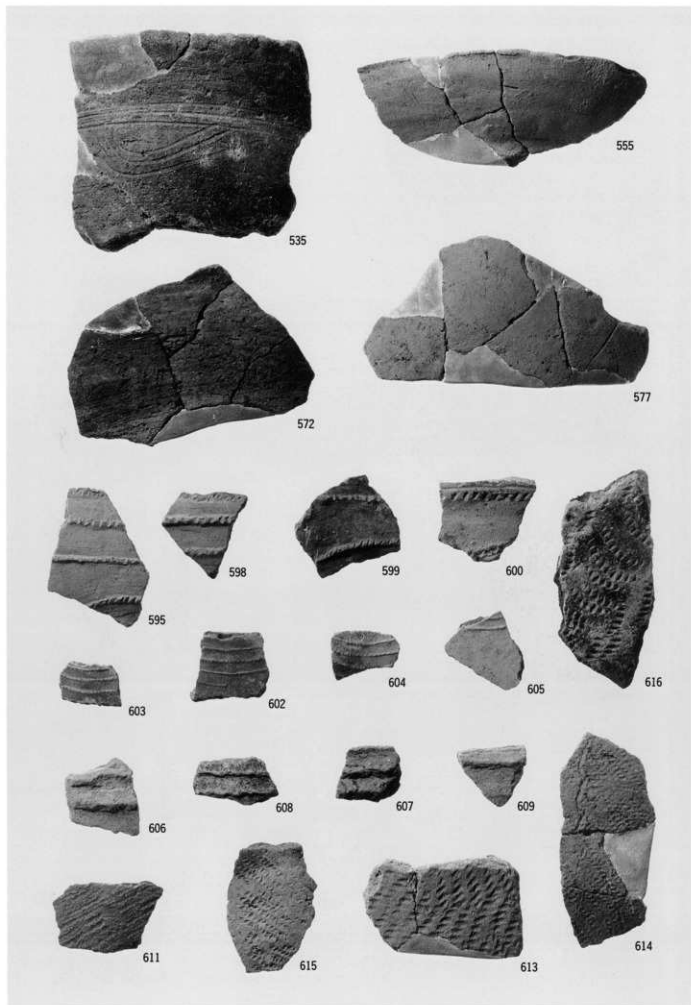


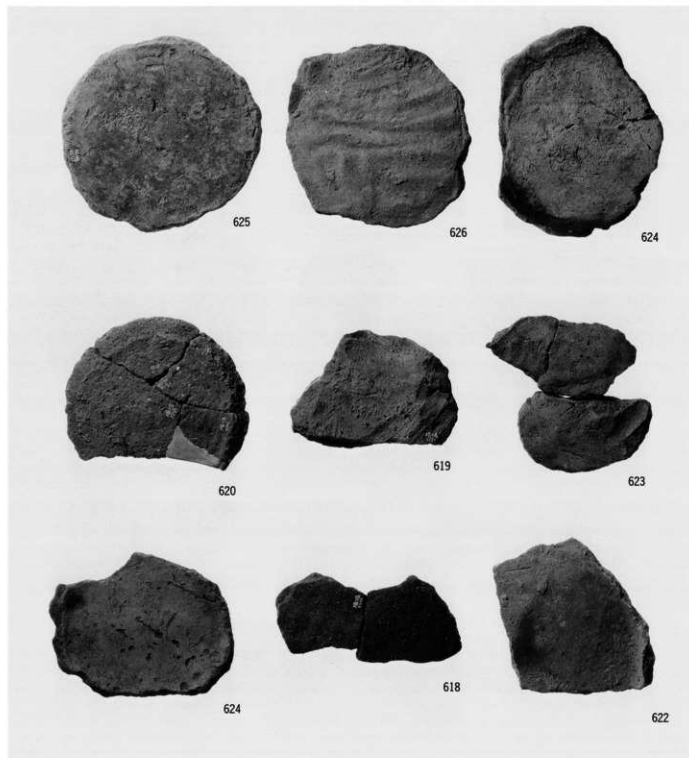
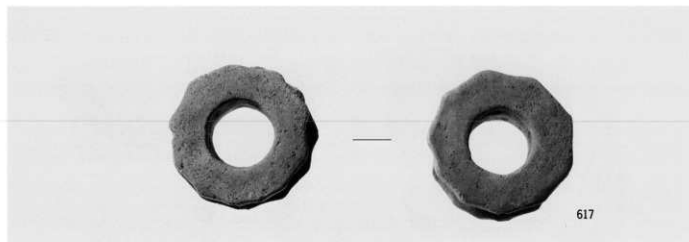


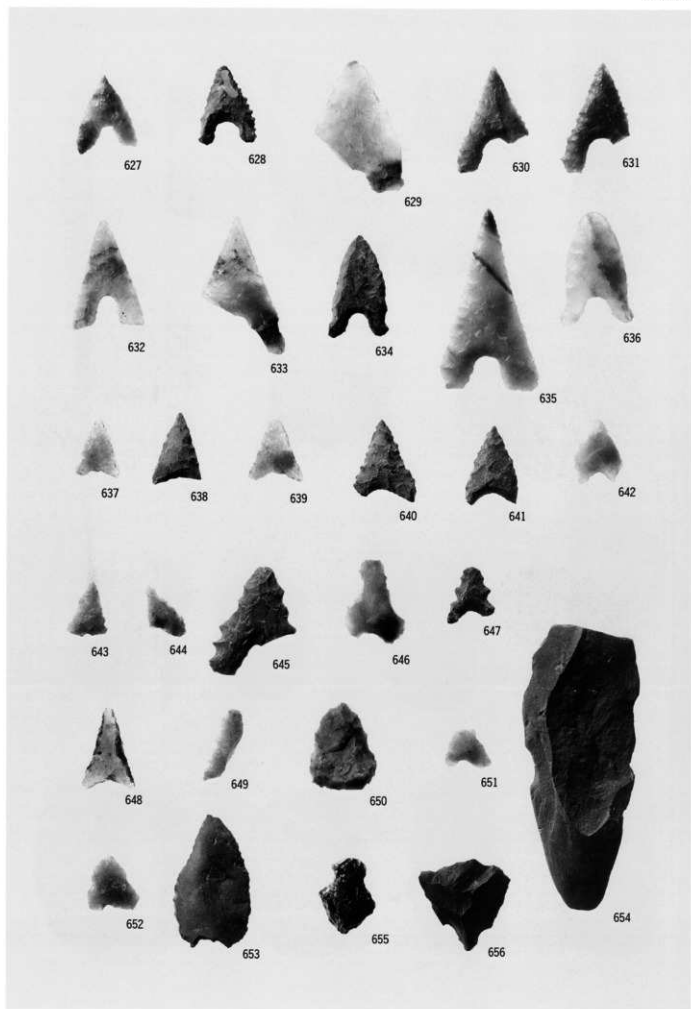
土器9類 (1)



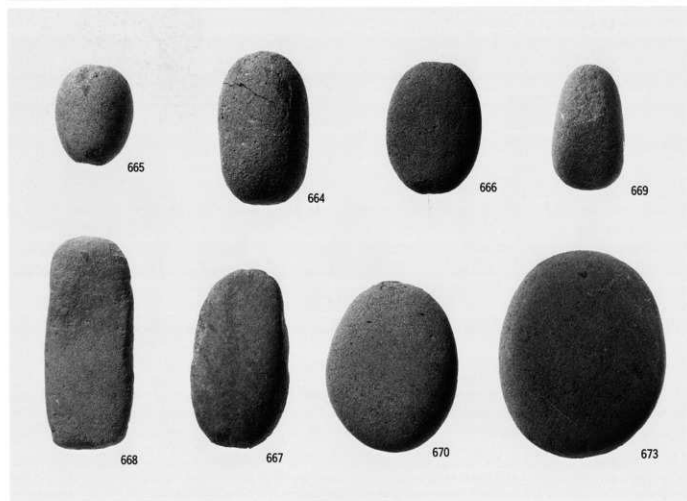
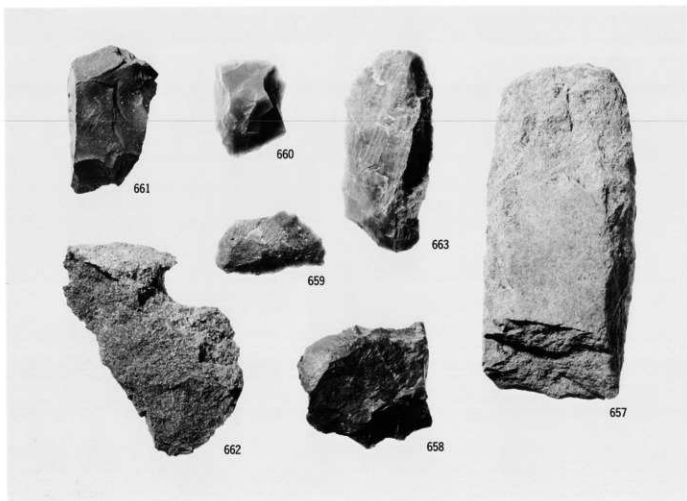
土器9類(2)







剥片石器



剥片石器·砾石器



708



709



710



711



712



713



714



715



716



717



718



720



719



705



706



707

あとがきにかえて

発掘調査から約4年をかけてようやく報告書刊行に至り、先ずは安堵しております。しかし、消滅してしまったものの記録としては十分な内容と言えず、悔いが残ります。また、横堀遺跡の調査では、発掘中に調査員が人事異動となり、さらに報告書作成中においても担当者が代わり、埋蔵文化財の記録保存の観点からはあり得ない状況の中で作業が進みました。その点で調査に携わって頂いた関係者の方々の気持ちをくめた内容になっているかについても、不安を覚えます。今後も不備な点について、追記していきたいと思えます。

最後となりましたが、発掘調査から報告書刊行まで多くの方々に協力を頂き、無事に報告書刊行を迎える事ができました。ありがとうございました。今後、発掘調査の成果が、町や地域の人々のために活かされることを祈っております。

(編集者)



確認調査の参加者



本調査の参加者

有明町埋蔵文化財発掘調査報告書（8）

農用地総合整備事業（大隅中央区域）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

横堀遺跡

発行日 2005年3月14日

発行 鹿児島県曾於郡有明町教育委員会

〒899-7492 鹿児島県曾於郡有明町野井倉1756番地

TEL 0994-74-1111

印刷 (株) トライ社

〒892-0834 鹿児島県鹿児島市南林寺町12-6

TEL 099-226-0815
